The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の福祉住環境に関する研究 |
| Author(s) | 丁, 文磊 |
| Citation | 大阪大学, 2022, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/89629 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博士学位論文

# 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の福祉住環境に関する研究

2022 年 6 月

大阪大学大学院　工学研究科地球総合工学専攻

丁　文磊

# The Research on Welfare Living Environment of Elderly Japanese People from China and Elderly Chinese People in Japan


## Abstract:

This research studied the welfare living environment of elderly Japanese people from China and elderly Chinese people in Japan. The welfare living environment is defined as "home environment, neighborhood environment, social environment and care environment". Throughout interview and field survey, the actual conditions of their home environment, neighborhood environment, social environment were clarified. In addition, by the mail questionnaire to the day-service-centers that can provide Chinese service in Japan, the nationwide conditions of operation and use were grasped. Furthermore, through behavioral observation surveys at one day-service-center for Chinese people in Japan, and one day-service-center for Japanese people, the users' behavioral difference, daily life flew, and the spatial characteristics were compared and architectural planning about nursing care facilities for the Chinese elderly were obtained. The results are as follows.

1. Home environment, social environment, neighborhood environment

(1) All the research subjects came to Japan after 1980, and most of them relocated several times after coming to Japan, and the relocations brought them environment changes. Before coming to Japan, many of them were farmers with low economical and low education levels. Due to the low education level and the old age, many of them cannot speak Japanese and half of them had no jobs in Japan, some had part time jobs in factories.

(2) As for the home environment, most of them live in small public housing such as municipal and prefectural housing without barrier-free. Their home lifestyle can be divided into 3 types. The most dissatisfied point about the housing environment was "no barrier-free".

(3) As for the social environment, most of them have no friends and they nearly did not participate in social activities in Japan. Based the number of dimension and types of social relations, their social degrees are divided into 4 types and most of them are weak and somewhat weak. Most of them lived a very isolated life in Japan.

(4) As for the neighborhood environment, based on the frequency of going out and the variety of behaviors in neighborhood, their lifestyles in neighborhood are divided into 4 types and most of them are passive and somewhat passive types. Their lifestyles in neighborhood have strong relationship with their social degree.

2. Care environment

(1) From the mail questionnaire survey, most of the day-service-centers can support Chinese language service were set up after 2010, and the operating body is profit-making corporation. Most of them have a capacity of 11 to 20 users per day and have less than 2 staff that can speak Chinese including full-time and part-time. Most of the day-service-centers were reformed from other buildings and have less than 100 $m^2$ total floor area. The language problems, problems of different lifestyle and problems of different cultural background and values are the main problems between cross-cultural care.

(2) From the behavior observation survey, the recreation behaviors of Chinese users are different form Japanese users. No matter types or total time of creation behaviors of Chinese users are more than Japanese users. As for the behaviors between users and staff, the Chinese users play Mahjong, table tennis, Karaoke, and card games with staff. However, except for watching TV together, there are no creation behaviors between Japanese users and staff. In addition, Chinese users spend the most time at Mahjong table, Japanese users spend the most time at self-own table. Most of Chinses users' behavior scenes are group scenes, but Japanese users are individual scene. So, it is necessary to consider the above difference in designing and planning of day-service-centers for Chinese people in Japan.



Key words: Elderly Japanese People from China, Elderly Chinese People in Japan, Welfare living environment, Home environment, Social environment, Neighborhood environment, Care environment

## 目次

**第１章　序論** ...1

1.1　研究の背景と意義 ...3

1.2　既往研究と本研究の位置付け ...7

1.2.1　既往研究

1.2.1　本研究の位置付け

1.3.　高齢中国帰国者と在日中国人高齢者に対する政策 ...13

1.3.1　高齢中国帰国者に対する政策

1.3.2　在日中国人高齢者に対する政策

1.4　研究の目的と調査の方法 ...15

1.4.1　研究の目的

1.4.2　研究の方法

1.5　論文の構成 ...17

**第２章　高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の環境移行と住宅環境** ...25

2.1　本章の目的と調査の方法 ...27

2.2　調査対象の属性 ...29

2.3　環境移行のプロセスと移行の原因 ...31

2.4　住宅環境 ...35

2.4.1　住宅の基本情報

2.4.2　家でよく使っている生活用品と中国風の飾り物

2.4.3　在宅の日常活動と在宅ライフスタイル

2.4.4　住宅環境に対する満足度

2.5　まとめ ...45

**第３章　高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会環境と近隣環境** ...47

3.1　本章の目的と調査の方法 ...49

3.2　社会環境 ...51

3.2.1　対象者の社会的つながり

3.2.2　対象者の社交程度

3.3　近隣環境 ...57

3.3.1　近隣環境の生活利便性

3.3.2　外出頻度、近隣での活動と近隣でのコミュニティーライフスタイル

3.3.3　近隣環境に関する重要視するポイント

3.4　住宅環境・社会環境・近隣環境の関係性および移行による環境の変化 ...63

3.4.1　住宅環境・社会環境・近隣環境の関係性化

3.4.2　中国から日本への移行による住環境の変化

3.5　まとめ ...65

**第４章　中国語の対応が可能なデイサービスの運営と利用の実態** ...67

4.1　本章の目的と調査の方法 ...69

4.2　施設の運営状況と在日中国人利用者の特性 ...71

4.2.1　施設の運営状況

4.2.2　在日中国人利用者の属性

4.3　施設建物の状況 ...75

4.3.1　建物の概要

4.3.2　現在施設建物の使い方の不便な点

4.4　在日中国人高齢者を受け入れるきっかけ ...77

4.5　異文化介護における問題 ...79

4.6　まとめ ...81

**第５章　中国語の対応が可能なデイサービスの利用者の滞在状態と空間利用特性** ...83

5.1　本章の目的と調査の方法 ...85

5.2　調査対象施設の概要 ...87

5.3　調査日両施設の概要と一日のプログラム ...89

5.3.1　調査日両施設の概要

5.3.2　調査日両施設の一日のプログラム

5.4　調査日２つの施設における利用者の行動 ...91

5.4.1　利用者または利用者同士間の行動

5.4.2　利用者とスタッフ間の行動

5.5　調査日利用者とスタッフの一日の生活展開の概要と空間利用特性 ...95

5.5.1　調査日利用者の一日の生活展開の概要と空間利用特性

5.5.2　調査日スタッフの一日の生活展開の概要と空間利用の特性

5.6　利用者の行動場面の種類・内容と自発的な集団行動の集まるパターン ...101

5.6.1　利用者の行動場面の種類・内容

5.6.2　自発的な集団行動とその集まるパターン

5.7　まとめ ...105

**第6章　総括及び研究の不足点と今後の課題** ...107

6.1　各章の要約 ...109

6.2　在日中国人高齢者の福祉住環境に関する考察及び改善 ...117

6.3　本研究の不足点と今後の課題 ...119

**データシート** ...121

# 第１章　序論

## 1.1　研究の背景と意義

### 高齢中国帰国者

二次世界大戦後、中国特に中国東北部(満州)に多くの日本人が戦後の混乱によって帰国できず、中国に長期間残留を余儀なくされた。1945 年 8 月 9 日時点で、満 13 歳以上の男性・女性たちを「中国残留婦人等」、13 歳未満で孤児となり中国の養父母に育てられた人々を「中国残留孤児」と呼び、それらをまとめて「中国残留邦人」(一世)と総称している[注1)]。また、中国残留邦人（一世）から 1945 年 8 月 10 日以降に生まれた子どもを二世と呼んでいる。

1972 年に日中国交が正常化して、日本政府は中国残留邦人の帰国問題に取り組み始め、1975 年から中国残留邦人は徐々に日本に帰国し始めた[1)]。帰国した中国残留邦人の中には中国で家族を作った人もおり、その家族を含めて帰国した人たちを「中国帰国者」と呼んでいる。日本政府の統計によると、2021 年 2 月末までに、国費[注2)]で日本に永住帰国した中国残留邦人の人数は 6724 人（孤児 2,557 人、婦人 4,167 人）であり、家族を加えると、総数は 20911 人である[2)]。その中、東京、大阪、神奈川、愛知県、埼玉県、北海道、千葉県、長野県、兵庫県と福岡県は、中国帰国者が最も多い上位 10 都道府県であり、全国の 70%以上を占めている（図１.1)。さらに、私費で帰国した中国帰国者は日本全国で約 10 万人に達すると推測される[注3)]。厚生労働省の報告書より、2015 年、中国残留邦人一世の平均年齢は 76 歳であり、配偶者の平均年齢は 72.6 歳である[3)]。また、中国残留邦人二世も多くは 65 歳以上であり、高齢化の問題がある[4)]。

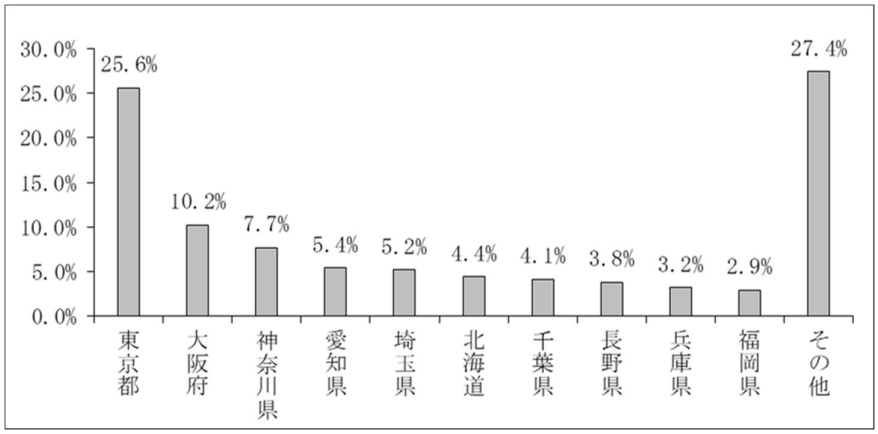



図１.1　中国帰国者の都道府県別居住割合[2)]

### 在日中国人高齢者

少子高齢化の進展に伴い、益々多くの外国人労働者が日本に来ている。法務省入国管理局の統計により、2019 年 6 月末時点で外国人の数は 2,829,416 人である（日本国籍を取った人は含まれない)。 その中、最も多いのは中国人で、848,201 人であって、外国人の 30%を占めている[5)]。図 1.2 に示すように、年齢構成をみると、在日外国人と在日中国人が同じ傾向を示す、20～39 歳の人は最も多く、総人数の半分以上を占めている。また、65 歳以上の在日外国人高齢者は 179,838 人で総人

数の 6.4%を占めている。65 歳以上の在日中国人高齢者は在日中国人総人数の 2.8%を占め、26,517 人である。さらに、日本国籍を取った中華系の人と残留孤児を加えて、文化的意味としての中国人の総数は 100 万人を超え、高齢者は 6 万人以上になっている[6)]。今後、在日中国人高齢者の介護の必要が高まることが予想される。

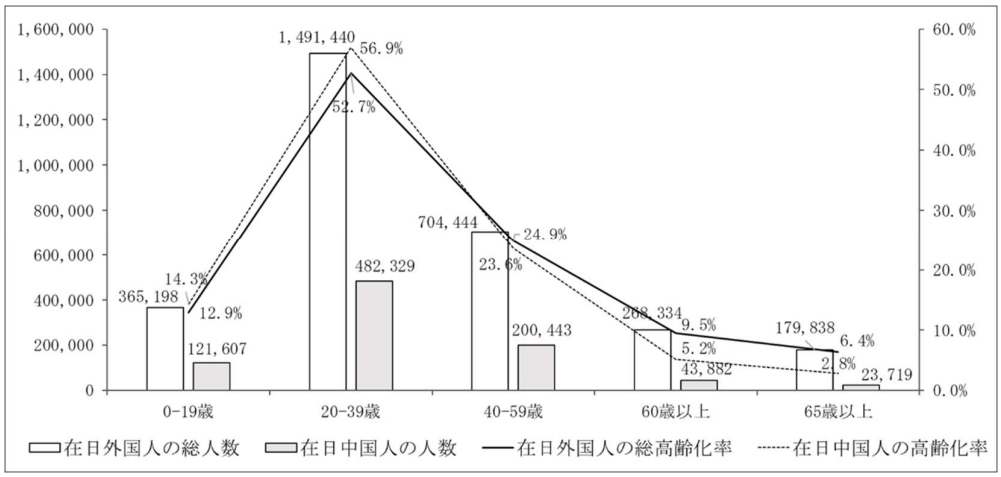



図 1.2　2019 年 6 月末時点で在日外国人と在日中国人の人数とそ年齢構成[5)]

### 研究の対象について

本研究では、高齢中国帰国者と在日中国人高齢者を対象に研究を進める。その理由は、1）ほとんどの中国帰国者は日本に来た後、まだ中国国籍を保留し、日本の定住または永住ビザを持っている。国籍から判断すると、彼らはまだ中国人である[7)]。2）2007 年から実施された「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進並びに永住帰国した中国残留邦人等及び特定配偶者の自立の支援に関する法律」（以下新支援法）により、帰国者一世に対する生活、住宅、医療などの支援があるが、帰国者二世には一切適用されない。二世は普通の在日中国人と同じで、特別な支援政策がない[注 4)]。3）調査により、ほとんどの中国帰国者は日本に来る前中国に何十年に住み、言語、文化背景、生活習慣と考え方が完全に中国人のようになっており、自分自身が中国人だと思っている。アイデンティティからみると、彼らは中国人である[7)]。

### 福祉住環境の定義

「日本国語大辞典」では「住環境」を「住居と、それを取り巻く自然的あるいは社会的な状況」と記述している[8)]。「福祉」を「公的な配慮・サービスによって社会の成員が等しく受けることのできる充足や安心。幸福な生活環境を公的扶助よって作り出そうとすること。」と記述している[9)]。これを組み合わせて本研究では、「福祉住環境」を「異文化環境に高齢者の生活に関し、改善できる物理的と社会的な環境の総合」と定義する。福祉住環境の構成要素を図 1.3 に示す。

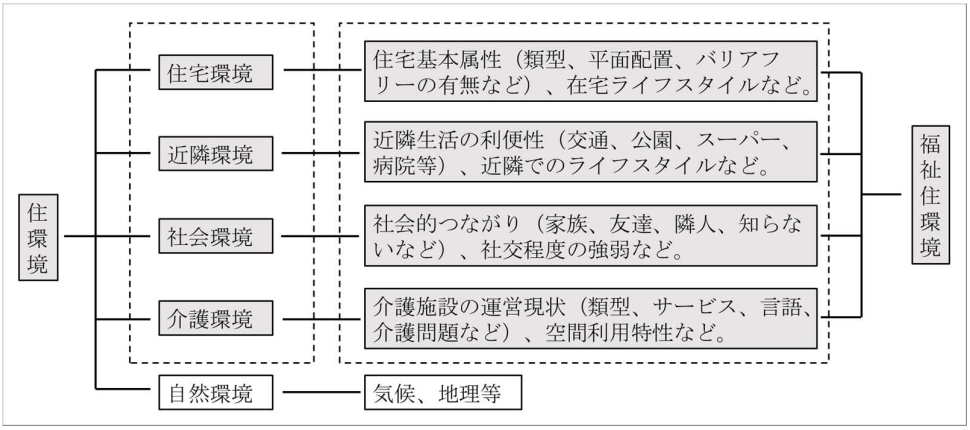



図 1.3　福祉住環境の構成要素

**研究の意義**

高齢中国帰国者・在日中国人高齢者にとって、母国から日本への移住は、大きな環境変化をもたらす。日本の文化背景、生活習慣、社会システムは母国と異なるため、福祉住環境に対するニーズも日本の高齢者と異なっている。人間の高齢化プロセスは、外部環境と身体機能の変化の両方への継続的な適応過程と見なすことができる[10)]。移行による環境ストレスが彼らの適応力をはるかに超えると、不適応の問題を引き起こし、「移行ストレス症候群」を生じる[11)]。これらの背景から、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者が日本社会に適応し、安心して穏やかに老後を過ごせるように、「エイジング・イン・プレイス」[注 5)]という目標を達成しながら地域に住み続けるために彼らの福祉住環境の実態や改善等に対する研究が重要である。

## 1.2　既往研究と本研究の位置付け

### 1.2.1　既往研究

#### 高齢者を対象とした環境移行に関する研究

高齢期の引っ越しによる環境移行に関する研究について、Sandra. C. Howell は、構築環境の移行を伴う大きな変化が、環境への適応能力が低下している高齢者にとっては深刻な影響を与える可能性があると指摘している[12]。Shigehiro Oishi は、人間の幸福感が頻繁な引っ越しで低下する傾向があると指摘し、特に高齢者にとって頻繁な引っ越しは人間の社会関係に大きく影響を与え、それ故に幸福感が社会関係に大きい影響を受けていることを明らかにしている[13]。Toyama Tadashi は環境移行から高齢者に与える影響を最小限に抑え、自宅に備え付けられたモノ(家具や写真など)を持ち込むことが重要であることを明らかにしている。写真には、自身の精神的な継続を促し、使い込まれた家具には自宅内の生活を継続させる効果があるとされて、このようなモノを持ち込むためのスペースが最低限必要な物理的環境であると言える[14]。

日本において高齢期の引っ越しによる環境移行の研究は少ない。介護が必要な高齢者が自宅から介護施設に移住することや施設間の移住による環境移行の研究が多く蓄積されてきた。足立らは、老朽化した都市に立地する特別養護老人ホーム（以下、特養）の先駆的な建替え事例を通して、同一敷地内で施設運営を維持しながら段階的な建替えを行うに際して、環境移行を余儀なくされる入居者の性格が環境移行前後の行動に及ぼす影響を検討することで、行動・性格の両面から見た環境移行時の特性を明らかにしている[15]。山口らは、介護が必要な高齢者の特養とグループホームを対象に、高齢者がその環境に適応する過程に注目し、高齢者に与える影響を最小限に抑え、適応しやすい環境を実現するための改善の課題を明らかにしている[16]。厳爽らは認知症高齢者がグループホームから特養に転居するという前後での生活やケアの変化を示し、環境移行に伴う諸問題を明らかにた。さらに生活環境の移行とターミナルケアの視点から見た認知症高齢者グループホームのあり方を考察した[17]。

#### 高齢者を対象とした住宅環境に関する研究

建築計画学分野では、高齢者を対象とした住宅環境についての研究が多数行われている。橘らは、家族同士の関係に影響を受けない一人暮らしの高齢者の住居を対象として、「居」「食」「寝」「客」の場の重りや場の位置関係に見るヒエラルキー、住戸内の居場所における外部との関係に注目し、住宅の向きの関係や外部情報の向きなどによって自宅生活のタイプを分類している[18]。井上らは、在宅サービスを環境要素として捉え、在宅サービスが住まい方に与える影響、生活の場が自宅外に広がっていくことと住まいとの関連性について論じている[19]。番場らは、都市の集合住宅に居住する自立高齢者を対象に、長期化する高齢期をステージに分類し、「個」に着目して自立高齢者の住まい方の変化とその変容過程を捉えている[20]。

高齢期に対応した居住空間に関する研究について、外山は個人空間の在り方、共用空間の在り方、

家族や外部的サービスの介入方法などが段階的に示し、地域全体での高齢者の生活支援に関する方策を述べている[21)]。加藤らは、団地に居住する高齢者の生活スタイルと住まい方を注目し、高齢者が出来る限り自宅で住み続けられる居住空間の在り方、質の高い生活を継続できるような社会のサポートの在り方について述べている[22)]。村田らは、住要求や住宅空間の改善について検討するためには生活の自立度や痴呆の程度が重要であるという考えのもと、高齢者の自立度を軸に住宅空間の改善の実態や改善内容、住宅空間改善要求にっいて考察を行い、一般高齢者と要介護高齢者の住宅空間改善の顕在化要因に違いがあることを明らかにしている[23)]。

### 高齢者を対象とした社会環境に関する研究

社会学分野でも建築計画学分野でも、高齢者の社会環境に関する研究は主に高齢者の孤立化の予防や社会的ネットワークの構築に注目している。社会学分野では高齢者の社会環境に関する研究は数多く存在している。岡本は、高齢者のインフォーマルな非親族の社会的ネットワークの形成に着目し、新たな友人・知人の獲得に関連する要因、非親族とのつながりが弱い者の特徴を検討し、地域における高齢者の非親族とのつながりづくりや社会的孤立の予防に関する方策を提案している[24)]。河野らは、在宅要援護高齢者の生活満足度と社会環境要因の関連性を比較分析し、独居の高齢者、家族介護者がいない高齢者、友人・知人の少ない高齢者は生活満足度が低い者が多いことを明らかにしている[25)]。清水らはアンケート調査を通して、高齢者の性別、年齢段、世帯人数別、住宅の種類別、居住年数などの項目から社会環境を分析し、高齢者の地域社会との関わりと孤立感の相互関係分析を明らかにしている[26)]。堀口らは自律的に動機づけられている高齢者が活動に取り組むきっかけや要因をどのように認識しているかを探索的に検討し、取り組んでいる活動と本人の価値観や生活史との間につながりがあることを示唆した。またこのつながりを形成するような支援を行うことで活動していない高齢者の自律的な活動への参加を促せる可能性を指摘している[27)]。

建築計画学分野における高齢者の社会環境に関する研究をみると、室永らは高齢者が自立的生活を維持する上で、外出や自宅外での活動は必要不可欠であり、外出して様々な活動に関わり、他人との接触を継続的に楽しむことは、精神的・肉体的健康を維持し、体力低下・健康不安増大に伴う諸問題を予防する上でも効果的であることを指摘している[28)]。室田らは、高齢化の著しい団地で孤立や孤立死を防ぐための方法として着目し、自治会を中心とした住民連携ネットワークの組織体制と進め方、活動の内容や主体、及び活動による住民意識の変化を把握し、自治会中心のネットワークの可能性や条件、孤立対策の課題を明らかにしている[29)]。上和田らは、親子の居住関係を軸にして、親子両世帯が距離的に離れて居住していながら、他方、日常的に密な接触、交流、協力、支援といった行為を通して互いに支え合う家族関係およびその居住関係に注目し、老親世帯の自立と支援を止揚するサポート居住の動向を明らかにしている[30)]。

### 高齢者を対象とした近隣環境に関する研究

建築計画学分野では高齢者の近隣環境に関する研究は膨大にある。高齢者の近隣での生活と施設

の利用に関する研究について、山岸らは駅周辺と団地周辺の三つ地域を対象に、街区単位での各施設に対する便利性から近隣環境評価の方法や見える化の方法を提案している[31)]。森永らは、近隣での「利便性」に着目し、歩行生活圏における生活利便施設の分布と都市基盤、人口、用途地域との関連を定量的に分析し、現在の近隣環境の現状と課題を明らかにしている[32)]。曽根らは、近隣商店が高齢者層にとって、生活上必要なだけでなく、近隣居住者との交流機会の場を提供する機能を持てものであることを明らかにし、同時に高齢者の需要に答える経営をしている商店の実態から高齢社会における近隣商店の在り方を示唆している[33)]。

高齢者の外出頻度と近隣環境の関係性に関する研究について、室永らは高齢者の外出状況、生活領域の空間構成、住民の近隣空間評価を分析比較し、高齢者の近隣環境と外出行動の促進・抑制要因の関係を明らかにしている[34)]。杉山らは既成市街地に居住する高齢者を対象し、地域特性の異なる状況下で生活タイプからみた活動環境を考察し、活動環境の相違と活動量に影響する近隣環境の要因を明らかにし、行動量の増加に向けた近隣環境改善のアプローチを考察している[35)]。室崎らは都市都心部の高齢化の進んだ既成住宅地を対象とし、1人暮らしの高齢者の外出状況、家族・地域との付き合い関係を捉え、その実態に即した近隣環境での支援の重要性を述べている[36)]。加藤らは高齢者の近隣環境への愛着に関する実態を明らかにし、身体的、社会的変化により愛着のある場所が選択できない状況を指摘し、愛着を持って住み続けられる近隣環境の要件を捉えている[37)]。

### 高齢者を対象とした介護環境に関する研究

日本では高齢者の介護環境に関する研究が多く蓄積されている。郵送アンケート調査を通した介護施設の全体像の把握に関する研究では、江らは富山県内の富山型デイサービスセンターへの郵送アンケート調査をとして、共生ケアの代表例である富山型の運営状況、利用者の属性や施設建築等に関する実態・現状を明らかにしている[38) 39)]。山口らは、郵送アンケート調査と建築図面収集を通して、小規模多機能サービス拠点の建築的特徴を説明している[40)41)]。足立らは全国悉皆アンケート調査により、従来型特養のユニットケア実態と効果を分析・考察し、従来型施設のユニットケアは同じ施設内であってもユニットごとで実態の違いがあることを示した[42)]。神吉らは、宮城県および岩手県に位置する高齢者施設を対象とした悉皆ア調査に基づき、高齢者施設における建築設備面・ソフト面の被災の実態、復旧状況、防災計画の全体像を明らかにし、高齢者施設の防災計画や将来の施設計画に資するための基礎的知見を捉えている[43)]。島田らは先駆的にユニットケアを導入した１２６ヵ所の従来型特養への郵送アンケート調査として、従来型特養におけるユニットケアの導入状況を把握し、ユニットのハード整備状況やユニットの構成を明らかにしている[44)]。

行動観察により高齢者の行動や施設の空間特性を示した研究では、中園らは食堂兼機能訓練室と和室が一体的に構成された小規模多機能通所介護施設の空間の使われ方の特性を整理している[45)]。井村らは通いを基本とする小規模多機能介護施設の空間特性と利用者の滞在状態に注目し、利用者の活動場所、活動場面、集団の規模が多様であることを明らかにしている[46)]。加藤らはデイサービ

スセンターにおける高齢者の場所移動を「場所と移動のまとまり」の視点から分析することにより、場所移動の特徴や問題点を述べている[47]。奥田らは、障碍者、高齢者の福祉事業に加えて、温泉事業や飲食事業等といった複合施設を対象に利用実態及び利用者の交流様態を明らかにしている[48]。登張らは、大規模高齢者通所施設を対象として、施設プログラムや人数規模と利の滞在様態の関係を明らかにし、画一的なサービスからの脱却と施設毎の独自性の確保の必要性について言及している[49]。松原らは、ユニットケアの整備を行っている二つの高齢者福祉施設を比較し、物理的環境とケアのあり方の違いが入居者の生活、ならびに護職員の介護に与える影響を考察し、入居者に対する介護職員の関わりに明らかにしている[50]。赤澤らは入居者が生活するリビングルームに隣接したキッチンで、日常的に調理を行っている先駆的な「個室・ユニット型」特養を調査対象として、リビングの定点観察と調理職員の行動観察調査を実施し、特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果を検証している[51]。

### エイジング・イン・プレイスに関する研究

エイジング・イン・プレイスとは、高齢者の自宅・地域にとどまりたいという根源的な願いに応え、虚弱化にもかかわらず高齢者が尊厳をもって自立して住み慣れた自宅・ 地域で、その人らしく最後まで健康的・快適に暮らすことである[52][53]。エイジング・イン・プレイスという概念の発展について、欧米諸国では、戦後の経済成長を背景に大規模施設が建設されたが、1980 年代には施設に代わる高齢者ケアの体系として「エイジング・イン・プレイス（地域居住）」という概念が登場した。日本においても、2005 年特別養護老人ホームの国庫補助が打ち切られ、2006 年からは介護保険による地域密着型サービスが登場して、制度上は「エイジング・イン・プレイス（地域居住）」の道を歩み始めた[54]。

海外では、エイジング・イン・プレイスに関する研究が多く蓄積されてきた。Laukkanen P らは高齢者の生活機能、認知機能等の個人特性と居住継続とするエイジング・イン・プレイスの関連性を指摘している[55][56]。Sommers DG らは家族・子どもとのかかわりの視点から、同居家族の有無、子ども数及び別居子との距離が高齢者の地域に居住継続への影響を検討している[57][58]。Judith Davey は高齢者が身体機能の低下のため、住宅の老朽化に適したメンテナンスやバリアフリー等の改修は彼らが自宅で快適に住み続けることにとって重要であると指摘している[59]。Sabia JJ は高齢者のエイジング・イン・プレイスの実現は友人や近隣住民からの社会的支援や社会的ネットワーク及び近隣環境に関する要因との関連性を明らかにしている[60]。日本では、齋藤らは、別荘分譲地の定住高齢者を対象に，5 年間の追跡研究から居住継続性と高齢者の心身の健康、生活習慣、家族や子とのかかわり、地域とのかかわり、および住居・近隣環境要因の関連性を検討し、別居子との関係性とともに近隣環境が重要であることを明らかにしている[61]。村田らは軽度要介護高齢者がエイジング・イン・プレイスを実現する居宅生活を継続するためには、身体的健康状態の維持を図るとともに、精神的健康を維持することの重要性を指摘している[62]。番場らは別荘地に中高齢者が多く移住

して形成されたシニアタウンでは、将来の居住継続に対する不安があることを検討している[63]。永田らは、地域包括ケアシステムの体制下でのエイジング・イン・プレイスを果たす地域密着型サービスが「介護サービスの充実強化」や「住まいの機能をもつこと」「ネットワークを生かしたケアニーズへのタイムリーな対応」などの重要な機能を担うことを明らかにしている[64]。

### 1.2.2　本研究の位置付け

建築学分野において高齢中国帰国者・在日中国人高齢者を対象とした研究は取り組まれていない。高齢のエスニック・マイノリティを対象とした研究は在日韓国人・朝鮮人の特別養護老人ホームの居住環境に関する研究のみである[65]。また在日外国人に関する研究は公営団地等のコミュニティ形成や居住環境に関する研究があり、在日外国人労働者を対象にしている[66] [67] [68]。異文化への環境移行についての研究は、在日ウイグル族を対象とした異なる住文化への環境移行に伴う住まい方の変容に関する研究のみである[69]。

他分野にも高齢中国帰国者・在日中国人高齢者に関する研究を広げると、熊原らは、中国帰国者に対し日本に長期的な適応の促進を目指し、かねてより社会経済的側面、文化的差異、母文化の保持といった側面からの支援が重要視されてきたと指摘している[70]。王らは中国帰国者をはじめ、在日外国人高齢者が介護サービスを利用するにあたって①「コミュニケーションの壁」、②「識字の壁」、③「食（味覚）の壁」、④「習慣の壁」、⑤「心の壁」の 5 つの問題を指摘している[71]。辻村らは、アンケート調査を通して中国帰国者 1 世・2 世とその配偶者に必要な介護支援を検討し、彼らの文化に配慮した介護支援として、言語の障壁を考慮すること、行政や福祉サービスと連携して多角的にかかわること、地域住民の理解を促すことなどが重要であることを示唆している[72]。

本研究において、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者にとってのエイジング・イン・プレイスとは、「母語（日本語能力も）や母国文化、風習や習慣などに配慮する必要性から社会環境も重視しつつ、さらに介護や看取りも視野に入れながら、人生の終末期にできる限り住み慣れた現在の自宅や地域での継続した生活を可能にする」と定義する。このように在日高齢中国帰国者・中国人高齢者の福祉住環境の実態は把握されておらず、建築計画分野から福祉住環境に焦点を当てた研究に本研究は取り組む意義がある。

## 1.3　高齢中国帰国者と在日中国人高齢者に対する政策

### 1.3.1　高齢中国帰国者の政策

1980 年代から、日本政府は、中国帰国者の生活の安定を目的として、いくつかの支援政策を実施してきた。1994 年に「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律」が制定され、初めて「国等の責務」が明らかにされた。これまでの親族・身元引受人中心の援護政策から「援護の社会化」へという大きな転換を迎えることとなった。2007 年には従来の支援策を改善するため、「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進並びに永住帰国した中国残留邦人等及び特定配偶者の自立の支援に関する法律」(以下、「新支援法」)が成立し、2008 年に施行された。なお、中国帰国者のうち二世とその配偶者はこの新支援法の対象外である[注4)]。

生活支援について、2008 年から帰国前の公的年金に加入できなかった期間だけでなく、帰国後の期間も特例的に保険料の納付が認められた。納付に必要な額は全額国が負担することにより、老齢基礎年金等の満額支給が受けられる。また、中国残留邦人等の方が亡くなられた後に、支援給付を受けているその配偶者に対して配偶者支援金を支給する。住宅支援について、国及び地方公共団体は、中国帰国者の居住の安定を図るため、公営住宅等の供給の促進に必要な施策を講ずるものとする。多くの都道府県は国費で帰国した中国帰国者に対する公営住宅の優先入居の取扱いと優先入居枠の確保、家賃の減免等の住宅支援を実施している。

医療支援について、医療支援給付の範囲や診療方針等は、基本的に医療扶助の取扱いに準じ、一定の条件で医療費の全額が医療支援給付の対象となる。日本語が不自由であるなど中国残留邦人等の特別な事情を踏まえ、手続きに関する配慮がある。介護支援について、介護支援給付に関する公費負担以外にも、高齢中国帰国者が利用する介護事業所や介護施設等を訪問し、中国語による語りかけを行う「語りかけボランティア訪問支援」を中国帰国者支援・交流センター(全国 7 カ所)が実施されている。また、国はこうした帰国者を支援するために、帰国者事情に通じ中国語が話せる支援・相談員、自立支援通訳などの派遣事業を行っている。

上記以外の支援政策について、日本へ永住帰国を希望する中国残留邦人等に対して永住帰国旅費や自立支度金を支給する。永住帰国直後の世帯に対し全国各地の定着促進センターにおいて、6 ヶ月間にわたり基礎的な日本語教育や日本の生活習慣等の研修を実施する。また、永住帰国した中国残留邦人等及びその親族等の雇用の機会の確保を図るため、職業訓練の実施、就職のあっせん等必要な施策を講ずる。

### 1.3.2　在日中国人高齢者の政策

日本においては、1981 年の「難民の地位に関する条約」の批准以降、内外平等の原則に立って国内法の整備を行い、適法滞在者には、日本人と同様の社会保障制度が適用されている[73)]。なお、日本の公的医療保険及び公的年金制度においては、民間サラリーマンは健康保険及び厚生年金に、自営業者等は国民健康保険及び国民年金にそれぞれ加入する。

また、2012 年 7 月 9 日に外国人登録法が廃止されたことに伴い、日本人と同じく「住民基本台帳法」が改正され、適法に 3 か月を超えて在留する 40 歳以上の外国人（中長期在留者等）は住民基本台帳の対象となり、介護保険の被保険者となる。この条件にあてはまる人は、日本人と同様の介護保険制度下のサービスを受けることができるとともに、介護保険料も同じように納めなければならない[74]。

しかし、愛知県県民文化局の調査によると中国帰国者または在日中国人は介護保険制度にアクセスすることすら難しい状況にある[75]。また、ケアマネジャーや認定調査員、福祉用具貸与などの関係者との面談、及び各種介護サービスの内容、施設利用などの説明と契約に当たっては、専門用語や制度を十分に理解しておくことが必要となるため、彼れらにとって難しいと考えられる[75]。

## 1.4　研究の目的と調査の方法

本研究はエイジング・イン・プレイスを実現するために福祉住環境を指標として高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の現状を把握する。また、調査の方法によって高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の福祉住環境を二つの部分に分けている。先ずは、20 人の研究対象へのアンケート・ヒアリング調査と彼らの住宅・近隣での現地調査により、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の住宅環境、近隣環境と社会環境の研究を行った。次に郵送アンケート調査及び現地行動観察に基づいて、在日中国人高齢者の介護環境を実態を示す。下記に各調査の目的と調査の方法を示す。

### 研究の目的

１）住宅環境、近隣環境と社会環境

（1）高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の中国から日本の現在の家への移行のプロセスを示し、移行によって引き起こされる環境の変化を明らかにする。（2）高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の住宅環境、近隣環境及び社会環境の現状実態を把握し、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者にとって「エイジング・イン・プレイス」を実現するために、住環境の改善の方策を提案する。

２）介護環境

本研究は、日本において中国語の対応が可能な施設として最も多いデイサービスセンター（以下、デイと表記）に注目する。日本における中国語の対応が可能なデイの実態は把握されていない。中国語の対応が可能なデイはどのように運営され利用されているのか、また空間利用の特性は日本人向けのデイと比べどのような違いがあるのか、これらが明らかにされていないので、介護環境についての研究目的を次の二点に設定する。

（1）日本において中国語の対応が可能なデイへのアンケート調査によりその運営と利用の実態の全国的な傾向を把握し、その全体像を明らかにする。

（2）アンケート調査では明らかにできない利用者の滞在様態、施設の空間利用特性について、中国語の対応が可能なデイと日本人高齢者向けのデイでの行動観察調査を通して比較考察し、中国語の対応が可能なデイに関する建築計画に関する知見を得る。

### 調査の方法

１）住宅環境、近隣環境と社会環境

大阪府在住の 20 人の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者へのアンケートとヒアリング調査及び彼らの家や近隣での現地調査を行った。調査者は訪問介護事業所のケアマネジャーの協力の下で調査を行い、ケアマネジャーと一緒に調査対象の家に訪問した。調査は、主に中国語を使用した。対象者の選定では、ケアマネージャーを通して協力を依頼したため、居住地域は同じではなく、20 名の対象者は大阪府の 6 市に居住している。そのことにより多様な住環境の結果が得られると考えられる。調査期間は 2019 年 11 月から 2020 年 08 月である。

２）介護環境

（１）全国の 115 ヶ所の中国語の対応が可能なデイサービスへの郵送アンケート調査

郵送アンケート調査では、日本における中国語の対応が可能なデイの運営と利用の状況を把握する。調査対象は厚生労働省社会・援護局がまとめた「中国語の対応が可能な介護事業所一覧　（令和 2 年 9 月 30 日時点)」[76] に掲載されている全ての 115 ヶ所の中国語の対応が可能なデイである。アンケート発送日は 2021 年 2 月 8 日で、回収締め切り日は 2021 年 3 月 1 日である。

（２）一つの中国帰国者・在日中国人向けのデイサービスと一つの日本人向けのデイサービスでの行動観察調査

行動観察調査では、中国語の対応が可能なデイサービスと日本人高齢者向けのデイサービスの利用者の滞在状態と空間利用特性の違いを把握する。調査対象施設は大阪府にある 2 つのデイサービス（中国帰国者・在日中国人向けのデイサービスが 1 ヶ所、日本人向けのデイサービスが 1 ヶ所）である。調査の時間は 2021 年 3 月と 2021 年 7 月で、大阪府の新型コロナウィルス感染症緊急事態宣言が解除された時期である。調査概要を表 1.1 に示す。

表 1.1 調査の概要

| | | | |
|---|---|---|---|
| 住宅環境<br>近隣環境<br>社会環境 | アンケートとインタビュー調査 | 目的 | 20人の対象者の基本属性を把握し、日常生活の現状と過去の人生ストーリーを了解する。 |
| | | 調査対象 | 大阪府に在住している20人の高齢中国帰国者・中国人高齢者とその家族。 |
| | | 調査項目 | 性別、年齢、要介護度、来日原因と年数、国籍、アイデンティティ、日本語能力、教育背景、家族、社会的つながり、在宅活動、外出頻度、中国の生活状況など。 |
| | | 調査方法 | アンケートとインタビュー |
| | | 調査時間 | 2019.11-2021.08（1人の対象者に対する平均調査時間は2時間である） |
| | 現地調査 | 目的 | 20人の対象者の住宅の基本属性を把握し、近隣環境の現状を理解する。 |
| | | 調査対象 | 20人の中国帰国者・在日中国人高齢者の住宅とその近隣コミュニティ。 |
| | | 調査項目 | 住宅タイプ、面積、平面配置、構造、築年数、階数、バリアフリーの状況など。近隣の利便性（スーパー、病院、公園、駅、親戚と友人の家、コンビニなどの有無）、また、対象者は平日よく行く場所。 |
| | | 調査方法 | 撮影、測定、描画、記録など。 |
| | | 調査時間 | 2019.11-2021.08（1人の対象者に対する平均調査時間は2時間である） |
| 介護環境 | 郵送アンケート調査 | 目的 | 既存の中国語の対応が可能なデイサービスの運営状況、施設建築状況、利用者の基本的な特性を把握する。 |
| | | 調査対象 | 日本国内にある全ての中国語の対応が可能なデイサービス115ヶ所。(2020年06末まで) |
| | | 調査項目 | 設立年月、広さ、改修場所、建物構造、介護サービスの内容、定員、利用者数、スタッフ数、利用者属性、平均要介護度、スタッフ配置、介護の問題、現在困っていることなど。 |
| | | 調査方法 | 対象施設への郵送アンケート。 |
| | | 調査時間 | アンケート発送：2021年2月8日、回収締め切り：2021年3月1日。 |
| | 行動観察調査 | 目的 | 中国帰国者・中国人向けのデイサービスと日本人向けのデイサービスでの具体的な一日の生活の流れ、活動の種類、活動グループの規模、滞在場所、利用者同士･スタッフと利用者の交流様態の違いを把握する。 |
| | | 調査対象 | 大阪府にある2つのデイサービス（中国帰国者・中国人向けのデイサービスが1ヶ所、日本人向けのデイサービスが1ヶ所） |
| | | 調査項目 | 調査日利用者の属性、一日の生活の流れ、活動の種類、利用者の滞在場所、利用者同士･スタッフと利用者の交流様態、空間利用のパータン。 |
| | | 調査方法 | 通所事業時間において、1分毎に記録及び写真撮影を行う。 |
| | | 調査時間 | 調査の時間：2021年3月と2021年7月。 |

## 1.5　本研究の構成

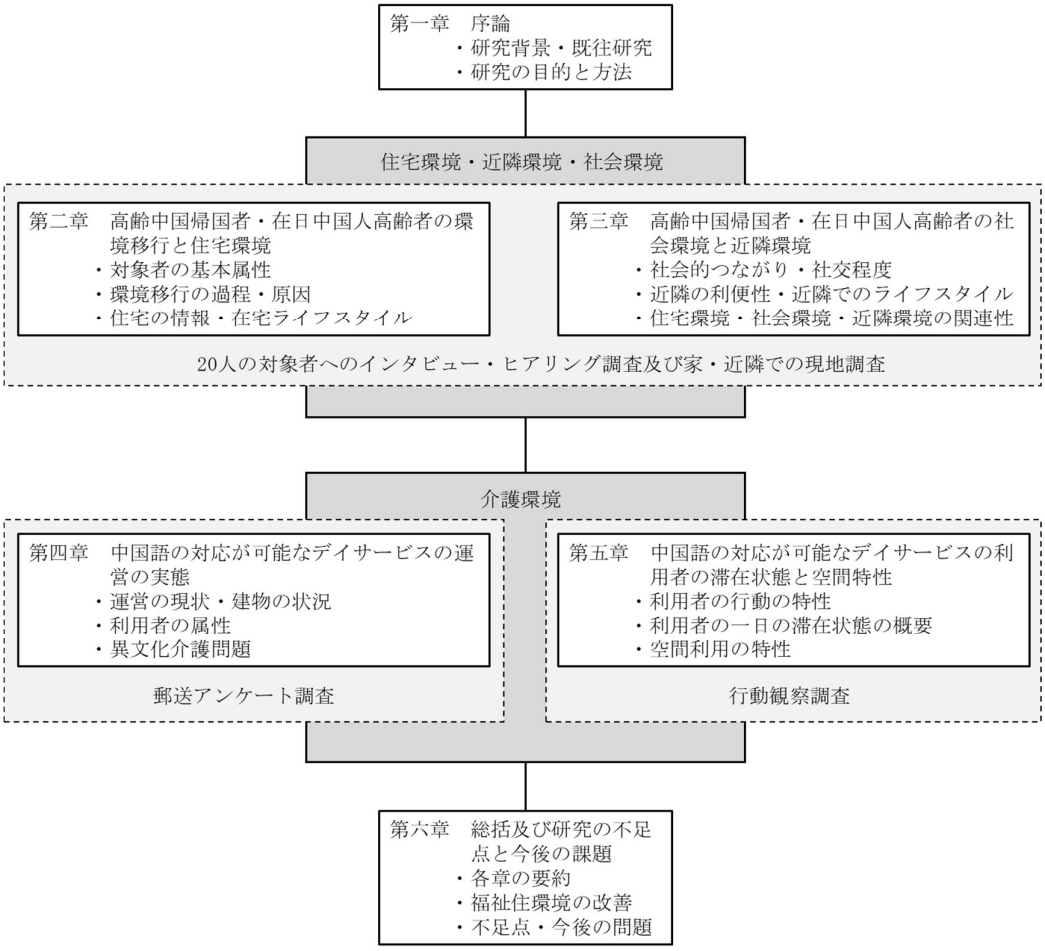



図 1.4 論文の構成

## 注記

注 1） 昭和 20 年 8 月 9 日時の年齢が 13 歳未満であった中国残留日本人は残留孤児と呼ばれる。昭和 20 年 8 月 9 日時の年齢が満 13 歳以上であった中国残留日本人は男女を含めて「残留婦人等」と呼ばれる。ほとんどが女性であるため「残留婦人」と称される場合もある[77]。

注 2） 永住帰国旅費（国費）の支給対象者は残留邦人本人とその配偶者、20 歳未満の実子又は身体等に障害のある実子。「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律(平成 6)」第 6 条、支援法施行規則第 10 条。

注 3） 帰国者数に関する正確な統計は行われていないが、帰国者 1 人当たりの日本在住の家族数は、国費同伴、呼び寄せ家族を含めて孤児が 9.4 人、婦人等が 11.8 人となっている[78]。

注 4） 新支援法は帰国者二世には一切適用されない。二世は普通の日本人と同じ、特別な支援政策がない。ただし、高齢になった二世の生活は経済的に困窮し、多くが生活保護に頼らざるをえない状況である。近年、日本各地の「中国帰国者二世連絡会」は、新支援法を改正し中国帰国者二世に対して支援給付金と老齢基礎年金を支給すること、自立支援通訳の派遣で医療・行政サービスや日本語学習が容易に受けられるようにすることなどを求めている。

注 5） 米国疾病予防管理センターは、エイジング・イン・プレイス（Aging in Place）を高齢者が年齢、収入、能力レベルにかかわらず、住み慣れた地域で安全かつ自立して快適に暮らすことと定義している[79]。

## 引用・参考文献

1） 藤沼 敏子：年表:中国帰国者問題の歴史と援護政策の展開，中国帰国者定着促進センター紀要 6 号，1998.5

2） 厚生労働省：中国残留邦人の状況（令和元年 8 月 31 日現在）（参照 2020.09.10）
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/bunya/engo/seido02/kojitoukei.html

3） 厚生労働省：中国残留邦人等実態調査結果の概要，2015

4） 公益財団法人，中国残留孤児援護基金，中国帰国者支援・交流センター：中国帰国者二三世質問紙調査の結果概要，2020.05

5） 出入国在留管理庁：在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表（参照 2021.02.10）
https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html

6） 在日中国人の人口は 105 万を超え、過去最高の記録　（参照 2020.09.15）
http://www.rbzwdb.com/xwsb/2020/03-30/14562.shtml

7） 丁 文磊，松原 茂樹，下田 元毅，木多 道宏：高齢中国帰国者の環境移行と住環境の実態に関する研究 － 中国残留邦人一世・二世とその配偶者を対象とした調査を通して，日本建築学会計画系論文集，第 81 巻，第 793 号，pp.487-498，2022.03

8） 精選版 日本国語大辞典「住環境」の解説（参照 2022.05.10）

https://kotobank.jp/word/%E4%BD%8F%E7%92%B0%E5%A2%83-526414

9) 小学館　デジタル大辞泉「福祉」の解説　(参照 2022.05.10)
https://kotobank.jp/word/%E7%A6%8F%E7%A5%89-617244

10) Tadashi Toyama: Identity and milieu: a study of relocation focusing on reciprocal changes in elderly people and their environment, Department for Building Function Analysis, the Royal Institute of Technology, pp. 13-15, 1988.01

11) Charles Walker, PhD, RN, C.: Relocation Stress Syndrome in Older Adults Transitioning from Home to a Long-Term Care Facility, Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services, 45(1), pp.38-45, 2007

12) Sandra C. Howell: Design for Aging. The MIT Press. 1980

13) Shigehiro Oishi: The Psychology of Residential Mobility: Implications for the Self, Social Relationships, and Well-Being. Perspectives on Psychological Science, pp. 5-21, 2010.05

14) Tadashi Toyama: Identity and milieu: a study of relocation focusing on reciprocal changes in elderly people and their environment, Department for Building Function Analysis, the Royal Institute of Technology, pp. 176-181, 1988.01

15) 足立　啓, 亀屋 恵三子, 赤木 徹也, 橋本 篤孝: 特別養護老人ホームの段階的建替えによる入居者の環境移行と性格が行動に及ぼす影響, 日本建築学会計画系論文集, 第 545 号, 143-149, 2001.07

16) 山口 健太郎, 三浦 研:高齢者居住施設と環境適応高齢者が適応しやすい施設計画の取り組みを通して, 日本生理人類学会誌, Vol.8, No.4, pp. 29-36, 2003.11

17) 厳 爽, 石井 敏, 長澤 泰: 生活環境の移行とターミナルケアの視点からみた痴呆性高齢者グループホームのあり方に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 第 557 号, pp.165-171, 2002.07

18) 橘 弘志、高橋 鷹志：一人暮らし高齢者の生活における住戸内外の関わりに関する考察,日本建築学会論文集, 第 64 巻, 第 515 号, pp.113-119, 1999

19) 井上 由起子, 小滝 一正, 大原 一興: 在宅サービスを活用する高齢者の住まいに関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 第67巻, 第556号, pp.137-143, 2002.06

20) 番場 美恵子, 竹田 喜美子：都市集合住宅居住の自立高齢者における「個」を中心とした住まい方の変容過程 ： シルバーステージからみた高齢期の居住環境に関する研究 その1, 日本建築学会論文集, 第70巻, 第592号, pp.25-31,2005.06

21) 外山 義：自宅でない在宅―高齢者の生活空間論, 医学書院, 2003.07

22) 加藤 田歌, 上野 純：生活スタイルと住まい方からみた団地居住高齢者の環境整備に関する考察 - 多摩ニュータウン団地高齢者の生活像と居住環境整備に関する研究　その2, 日本建築学会計画系論文集, 第72 巻, 第617号, pp.9-16, 2007.07

23) 村田 順子, 田中 智子, 安藤 元夫, 広原 盛明： 高齢者の住宅改善の実態と評価 - 在宅用介護高齢者の生活と住要求に関する研究　その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 68 巻, 第 573 号, pp.1-

8, 2003.11

24) 岡本 秀明：地域における高齢者のインフォーマルな社会的ットワーク形成に関連する要因友人・知人の獲得に着目して，社会福祉学，第 55 巻，第 2 号，pp.11-26，2014

25) 河野 保子，乗松 貞子，菅 啓子：在宅要援護高齢者の生活満足度と社会環境要因の関連性，日本看護科学会誌，第 16 巻，第 2 号，pp.230-231，1996.10

26) 清水 誠司，中井 誉，原田 健司，山村 和也，岩崎 義一：日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集，第 15 巻，pp.101-104，2017

27) 堀口 康太，大川 一郎：高齢者の社会参加活動への自律的動機づけと価値観及び生活史とのつながり，高齢者のケアと行動科学，第 23 巻，pp.62-74，2018

28) 室永 芳久，両角 光男：地区環境に応じた高齢者の外出行動の相違に関する事例研究 ： 熊本市における外出活発地区・非活発地区の比較分析,日本建築学会計画系論文集，第68巻，第566号，pp.63-70，2003.04

29) 室田 昌子：集合住宅団地の高齢者の孤立化に対する住民連携型ネットワークと住民意識変化－横浜市勝田団地を対象として，日本建築学会計画系論文集，第 79 巻，第 702 号，pp.1769-1775，2014.08

30) 上和 田茂，鳥飼 香代子，山田 英代，付　開楠：準近居の存在からみた老親世帯の自立と支援を止揚するサポート居住の動向親子の居住関係を軸とする高齢者のサポート構造に関する研究　その1，日本建築学会計画系論文集，第566号，pp.9-16，2003.04

31) 山岸 輝樹，鈴木 雅之，広田 直行，服部 岑生：住宅地の生活利便性の評価による高齢者の暮らしの比較研究 － ライフエリア法を用いた建築的市街地整備手法の基礎的研究 （２），日本建築学会論文集，第 78 巻，第 686 号，pp.801-806，2013.04

32) 森永 武男，有馬 隆文，萩島 哲，坂井 猛：生活利便施設の分布から見た生活環境に関する研究，都市計画論文集，第 35 巻，pp.991-996，2000

33) 曽根 陽子，香山 愛理：高齢者層の交流の場としての近隣型小売商店の役割 － 1960 年代のミニ開発住宅地における近隣コミュニケーションに関する研究　その２，日本建築学会計画系論文集，第74巻，第 635 号，pp.83-89，2009.01

34) 室永 芳久，両角 光男：高齢者の生活環境と外出行動の促進・抑制要因に関する研究 － 熊本市 6 事例の比較分析による考察，日本建築学会計画系論文集，第 584 号，pp.67-73，2004.10

35) 杉山 正晃，生田 英輔，岡崎 和伸，高井 逸史，森 一彦：ニュータウンと既成市街地における高齢者の外出活動環境の比較 － 高齢者のロコモティブシンドローム予防に向けた活動環境に関する研究　その 3，日本建築学会計画系論文集，第 83 巻，第 746 号，pp. 707-715，2018.04

36) 室崎 千重，重村 力，山崎 義人：一人暮らし高齢者の居住継続を支える近隣環境に関する研究－京都市都心部の旧富有小学校区を事例として，日本建築学会論文集，第 73 巻，第 631 号，pp.1907-1914，2008.09

37) 加藤悠介：インタビュー調査に基づく近隣環境における高齢者出愛着場面に関する研究，日本建築

学会計画系論文集，第７８券，第687号，pp.997-1002，2013.05

38）江 文菁，佃 悠，藤井 容子，岡本 和彦，西出 和彦： 富山型デイサービスにおける空間構成と利用者のかかわりに関する研究 －地域共生ケアホームに関する研究， 日本建築学会計画系論文集， 第77巻，第675号，pp.987-994，2012.05

39）江 文菁，岡本 和彦，西出 和彦:富山型デイサービスにおける利用者特性と姿勢の経年変化に関する考察－地域共生ケアホームに関する研究　その2， 日本建築学会計画系論文集， 第81巻， 第727号，pp. 1887-1894，2016.09

40）山口 健太郎，三浦 研，石井 敏：平面分析からみた建築的特徴に関する考察 － 小規模多機能サービス拠点の建築計画に関する研究（２）,日本建築学会計画系論文集，第75巻，第656号，pp. 2307-2314，2010.10

41）石井 敏，三浦 研，山口 健太郎：全国悉皆アンケート調査からみた建築的特徴に関する分析 － 小規模多機能サービス拠点の建築計画に関する研究(1),日本建築学会計画系論文集,第74巻,第635号，pp.17-24，2009.01

42）足立 啓，安岡 真由，品川 靖幸，林 悦子：全国悉皆アンケート調査による従来型特別養護老人ホームのユニットケア実施状況と効果，第73巻，第623号，pp.31-37，2008.01

43）神吉 優美，井上 由起子，石井 敏：悉皆アンケート調査からみた東日本大震災における高齢者施設の被災実態および復旧状況に関する考察，日本建築学会計画系論文集，第78巻，第691号，pp. 1891-1900，2013.09

44）島田 美和子，無漏田 芳信：従来型特別養護老人ホームにおけるユニット整備に関する研究 － 先駆的にユニットケアに取り組んだ従来型特別養護老人ホームへのアンケート調査より， 日本建築学会計画系論文集，第74巻，第640号，pp.1331-1338，2009.06

45）中園 眞人，三島 幸子，山本 幸子：食堂兼機能訓練室と和室一体的に構成された小規模高齢者通所施設の使われ方，日本建築学会計画系論文集，第86巻，第780号，pp. 403-412，2021.02

46）井村 理恵，山田 あすか，松本 真澄，上野 淳：通いと基本とする小規模高齢者介護の現状，利用者の滞在状態と空間構成に関する研究， 日本建築学会計画系論文集，第73巻，第632号，pp.2091-2098，2010.08

47）加藤 悠介，森 一彦：デイサービスセンターにおける場所ユニットからみた高齢者の場所移動分析，日本建築学会計画系論文集，第583号，pp. 17-22，2004.09

48）奥田 欣也，山口 健太郎:複合型福祉施設の利用実態と交流様態に関する研究，第79巻，第70号，pp. 2375-2385，2014.11

49）登張 絵夢，上野 淳，竹宮 健司，伊佐地 大輔，五十嵐 雄介：利用者の活動から見た通所型高齢者施設の空間構成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第556号，pp.161-168，2002.06

50）松原 茂樹，足立 啓，植野 知津子，舟橋 國男： 入居者に対する介護職員の関わりに関する考察 ：ユニットケア型高齢者福祉施設における介護職員のケアのあり方に関する研究， 日本建築学会計画系

論文集，第 561 号，pp.137-144，2002.11

51）赤澤 芳子，三浦 研：特別養護老人ホームにおけるユニット調理の効果と課題 － リビングルームの観察と調理職員の行動観察調査を通して，日本建築学会計画系論文集,第631号,pp.791-797，2009.04

52）木下康仁： 改革進むオーストラリアの高齢者ケア，52，東信堂，東京，2007

53）国立社会保障･人口問題研究所：地域包括ケア地域包括ケアシステム －「住み慣れた地域で老いる」社会をめざして，慶応義塾大学出版会，東京，2013.03

54）松岡　洋子：エイジング・イン・プレイス（地域居住）と高齢者住宅：日本とデンマークの実証的比較研究，新評論，2011.07

55）Laukkanen P，Leskinen E，Kauppinen M，et al.：Health and functional capacity as predictors of community dwelling among elderly people，Journal of Clinical Epidemiology，Vol.53，pp.257-265，2000

56）Miller ME，Longino CF Jr，Anderson RT，et al.：Functional status，assistance，and the risk of a community-based move. The Cerontologist，Vol.39：PP.187-200，1999

57）Silverstein M，Zablotsky DL：Health and social precursors of later life retirement-community migration. The Journals of Gerontology Series B：Psychological and Social Science，Vol.51，PP.150-156,1996.

58）Sommers DG，Rowell KR：Factors differentiating elderly residential movers and nonmovers；A longitudinal analysis. Population Research and Policy，Vol.11，PP.249-262，1992

59）Judith Davey："Aging in Place"：The Views of Older Homeowners on Maintenance，Renovation and Adaptation，Social Policy Journal of New Zealand，Vol.27,pp.128-141，2006.03

60）Sabia JJ：Theres No Place Like Home：A Hazard model analysis of aging in place among older homeowners in the PSID. Research on Aging，Vol.30，PP.3-35，2008

61）斎藤 民，甲斐 一郎，杉澤 秀博，柴田 博：高齢者の居住継続性とその関連要因 － 別荘地に移住した高齢者への 5 年間の追跡研究，老年社会科学，Vol.33. No.3. pp.385-394，2011

62）村田 伸,安田 直史,米田 香:軽度要介護高齢者における居宅生活の継続要因に関する前向き研究:5年後の追跡調査より，理学療法科学,Vol,23，pp.487-490，2008

63）番場 美恵子,竹田喜 美子:居住継続可能なシニアタウンのための居住環境条件の検討(茨城県Ｉ市Ａタウンの場合);別荘地から定住地に転換したシニアタウンにおける高齢者の居住環境に関する研究その 3,日本建築学会大会学術講演梗概集，E-2，PP. 203-204，2007

64）永田 千鶴，北村 育子：地域包括ケア体制下でエイジング・イン・プレイスを果たす地域密着型サービスの機能と課題，日本地域看護学会誌，Vol.17，　No.1，pp.23-31，2014

65）武井 民典，荒木 兵一郎，亀谷 義浩：入居者に対する介護職員の関わりに関する考察 ： ユニットケア型高齢者福祉施設における介護職員のケアのあり方に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系，pp，181-184，2001

66）筧 政憲，小松 尚：外国人居住者の居場所形成における空間的課題 － A 団地において自主建設されたものの，撤去された店舗群の分析，日本建築学会計画系論文集，Vol.79， No.704， pp.2165-2172，2014.10

67）北原 玲子，大月 敏雄：東京都北区のバングラデシュ国籍在留外国人の居住環境に関する研究 － 国際労働力移動による連鎖移民が受け入れ国の集住地に及ぼす影響，日本建築学会計画系論文集，第 79 巻，第 698 号，pp.873-882，2014.04

68）垣野 義典，初見 学：外国籍住民の郊外団地居住の実態 - 神奈川県いちょう団地を事例として，日本建築学会計画系論文集，第 75 巻，第 652 号，pp. 1355-1363，2010.06

69）マヒラ エゼズ，梅本 舞子，豊川 斎赫，小林 秀樹：在日ウイグル族の起居様式の変化を通した床上文化の考察 - 異なる住文化への環境移行に伴う住まい方の変容に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 85 巻，第 767 号，pp.11-21，2020.01

70）熊原 秀晃，西田 順一：中国帰国者における体力および生活の質 － 帰国者支援・交流センター通所者の現状，厚生の指標，第 61 巻，第 5 号，pp.31-138，2014.05

71） 王 榮，渋谷 努：中国帰国者の介護問題から見た在住外国人高齢者への介護支援の現状と課題，中京大学学術情報，社会科学研究，38(2)，pp.2-18　2018.03

72）辻村 真由子，石垣 和子，胡 秀英：中国帰国者１世・２世とその中国人配偶者に必要な看護支援の検討 － A 県在住者を対象とした健康状態と医療・看護・介護ニーズの実態調査から，文化看護学会誌，第 6 巻，第 1 号，pp.12-23，2014

73）厚生労働省政策統括官付社会保障担当参事官室:外国人滞在者への社会保障制度適用について,週刊社会保障，第2346号，p.62，2005.8.29

74）総務省：外国人住民に係る住民基本台帳制度（参照2021.5.10）
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/zairyu/

75）愛知県県民文化局県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室：愛知県外国人高齢者支援事業，外国人高齢者に関する実態調査報告書，2020.02

76）厚生労働省社会・援護局，援護企画課中国残留邦人等支援室：中国語の対応が可能な介護事業所一覧（令和２年９月３０日時点），2020.12

77）厚生労働省：中国残留孤児白書，1987

78）厚生労働省: 中国帰国者生活実態調査の結果，2005.03

79）U.S. Centers for Disease Control and Prevention: Public health terms for planners & planning terms for public health professionals.
https://www.cdc.gov/healthyplaces/terminology.htm ( 参照 2020.10.02)

# 第 2 章　高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の環境移行と住宅環境

## 2.1　本章の目的と調査方法

### 本章の目的

本章の目的は以下の 3 点である。1）20 人の調査対象者の年齢、性別、要介護度、来日原因、教育歴、日本語のレベル、中国にいた時の生活状況等の全体像を把握する。2）20 人の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者が中国から日本の現在の家への環境移行の具体的なプロセス、来日後の移行の原因等を明らかにする。3）20 人の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の住宅環境を調査し、住宅のタイプ、平面配置、面積等の基本情報、また、在日中国人高齢者が家によく使うもの、在宅の活動やライフスタイル等の実態を把握する。

### 調査方法

大阪府在住の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者 20 名を対象に対するアンケートとインタビューを行い、自宅で現地調査を実施した。調査者は訪問介護事業所のケアマネジャーの協力の下で調査を行い、ケアマネジャーと一緒に調査対象の家に訪問した。調査は、主に中国語を使用した。対象者の選定では、ケアマネージャーを通して協力を依頼したため、居住地域は同じではなく、20 名の対象者は大阪府の 6 市に居住している。そのことにより多様な住環境の結果が得られると考えられる。調査期間は 2019 年 11 月から 2020 年 08 月である。調査の概要を表 2.1 を示す。

表 2.1　本章の調査概要

| | | |
|---|---|---|
| 調査目的 | 20人の対象者の基本属性を把握し、日常生活の現状と過去の人生ストーリーを了解し、中国から日本の現在の家への移行プロセスや原因を明らかにし、また、住宅の基本属性を把握する | |
| 調査対象 | 大阪府に在住している20人の高齢中国帰国者・中国人高齢者とその家族。 | |
| 調査項目 | 対象者の基本属性 | 性別、年齢、要介護度、来日年数、国籍、アイデンティティ、日本語能力、教育背景、中国の生活状況など |
| | 対象者の環境移行 | 移行の具体的なプロセス、来日後の移行の原因、移行による環境の変化 |
| | 対象者の住宅環境 | 住宅タイプ、面積、平面配置、構造、築年数、階数、バリアフリーの状況などの基本情報 |
| 調査方法 | アンケートとインタビュー調査；現地調査：撮影、測定、描画、記録など。 | |
| 調査時間 | 2019.11-2021.08（1人の対象者に対する平均調査時間は2時間である） | |

## 2.2　調査対象の属性

20 人の対象者の属性を表 2.2 に示す。女性は 12 人、男性が 8 人であり、中国帰国者が 18 人、在日中国人が 2 人である。18 人の中国帰国者の中、一世が 5 人、一世の配偶者が 2 人、二世が 9 人、二世の配偶者が 2 人である。20 人のうち、日本国籍に変更した人は 2 人で、18 人は中国国籍を保留したまま日本の永住権または定住ビザを持っている。ナショナル・アイデンティティは 3 人のみが日本人で、17 人は自分が中国人だと思っている。

表 2.2　対象者の属性

| 調査対象の記号 | 性別 | 年齢 | 要介護度 | 国籍 | アイデンティティー | 来日原因 | 来日年数 | 今の家に住む年数 | 独居・同居 | 日本語能力 | 教育背景 | 中国にいる時の仕事 | 日本に来た後の仕事 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| [1] | 女性 | 97 | 要介護 5 | 日本 | 日本人 | 帰国者一世 | 25 | 18 | 独居 | 良い | 中学 | 農民 | 無職 |
| [2] | 男性 | 71 | 要介護 2 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世 | 23 | 8 | 妻と同居 | 挨拶程度 | 中学 | 医者 | 工場 |
| [3] | 女性 | 88 | 要介護 2 | 日本 | 日本人 | 帰国者一世 | 31 | 6 | 独居 | 日常簡単な対話程度 | 小学 | 農民 | 無職 |
| [4] | 女性 | 91 | 要介護 2 | 中国 | 日本人 | 帰国者一世 | 30 | 7 | 独居 | 日常簡単な対話程度 | 小学 | 会社員 | 無職 |
| [5] | 女性 | 71 | 要介護 3 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世 | 17 | 13 | 夫と同居 | 話せない | 文盲 | 農民 | 工場 |
| [6] | 女性 | 68 | 要介護 4 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世の配偶 | 10 | 9 | 夫と息子の家族と同居 | 話せない | 小学 | 農民 | 無職 |
| [7] | 女性 | 80 | 要介護 2 | 中国 | 中国人 | 帰国者一世 | 28 | 7 | 独居 | 挨拶程度 | 高校 | 会社員 | 無職 |
| [8] | 男性 | 73 | 要介護 3 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世 | 24 | 4 | 妻と同居 | 話せない | 文盲 | 農民 | 工場 |
| [9] | 男性 | 81 | 要介護 2 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世 | 12 | 2 | 独居 | 話せない | 文盲 | 農民 | 無職 |
| [10] | 男性 | 76 | 要介護 2 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世 | 25 | 3 | 妻と同居 | 挨拶程度 | 小学 | 農民 | 無職 |
| [11] | 男性 | 65 | 要介護 1 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世 | 18 | 8 | 妻と同居 | 話せない | 中学 | 会社員 | 工場 |
| [12] | 男性 | 80 | 要介護 3 | 中国 | 中国人 | 帰国者一世 | 24 | 24 | 妻と同居 | 話せない | 中学 | 会社員 | 無職 |
| [13] | 女性 | 80 | 要介護 3 | 中国 | 中国人 | 帰国者一世の配偶 | 25 | 25 | 独居 | 話せない | 小学 | 無職 | 無職 |
| [14] | 男性 | 71 | 要支援 2 | 中国 | 中国人 | 帰国者一世 | 23 | 6ヶ月 | 妻と同居 | 話せない | 小学 | 農民 | 工場 |
| [15] | 女性 | 86 | 要介護 2 | 中国 | 中国人 | 帰国者一世の配偶 | 30 | 7 | 息子と同居 | 日常簡単な対話程度 | 大学 | 教師 | 工場 |
| [16] | 女性 | 66 | 要介護 1 | 中国 | 中国人 | 帰国者二世の配偶 | 20 | 1 | 夫と同居 | 話せない | 文盲 | 農民 | 工場 |
| [17] | 女性 | 67 | 要介護 1 | 中国 | 中国人 | 帰国者一世 | 31 | 6 | 娘の家族と同居 | 日常簡単な対話程度 | 中学 | 会社員 | 工場 |
| [18] | 女性 | 76 | 要介護 2 | 中国 | 中国人 | 帰国者一世 | 19 | 11 | 独居 | 良い | 中学 | 無職 | 無職 |
| [19] | 男性 | 80 | 要支援 1 | 中国 | 中国人 | 日本に就職 | 37 | 3ヶ月 | 妻と同居 | 日常簡単な対話程度 | 大学 | 料理人 | 料理人 |
| [20] | 女性 | 67 | 要支援 1 | 中国 | 中国人 | 子供は日本に就職 | 10 | 8 | 夫と同居 | 良い | 中学 | 農民 | 工場 |

表 2.1 に示すように、年齢別みると、70～80 歳の対象者が一番多く 10 人で、90 歳以上の対象者が一番少なく 2 人である。要介護度別みると、要介護 2 の対象者一番多く 8 人で、要介護 4 と要介護度 5 の対象者が一番少なく、各 1 人である。日本在住の平均年数は 22.8 年であり、現在の家の居住平均年数は 8.8 年である。7 人がひとりで暮らし、それ以外の人が配偶者または子供の家族と同居している。

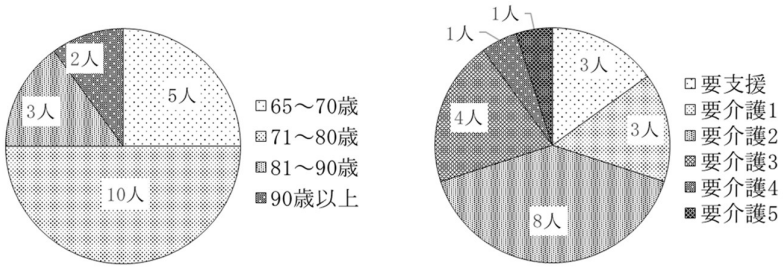



図 2.1 年齢と要介護度

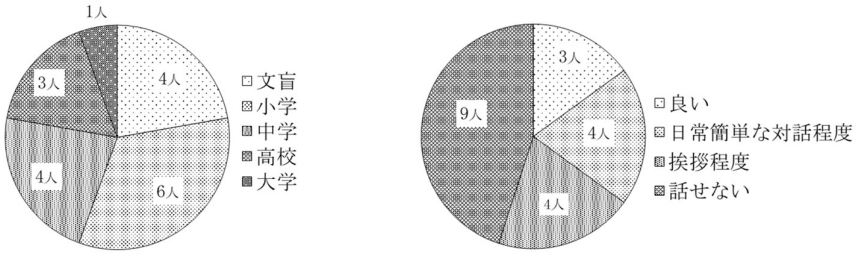



図 2.2 2 日本語レベルと教育歴

日本語能力について、図 2.2 に示すように、3 人は日常会話が問題ない程度で、それ以外はゆっくりであれば不自由なく会話が可能なレベルからできないレベルまでさまざまである。教育歴について、4 人は学校で教育を受けたことがなく、6 人が小学校卒業まで、8 人は中学校または高校卒業まで、大学卒業は 2 人であった。中国在住時、10 人が農民、2 人が無職であり、比較的低所得の人が多かった[注6)]。日本に来た後、10 人が仕事をしていなく、 9 人が工場で働いていた(図 2.3)。

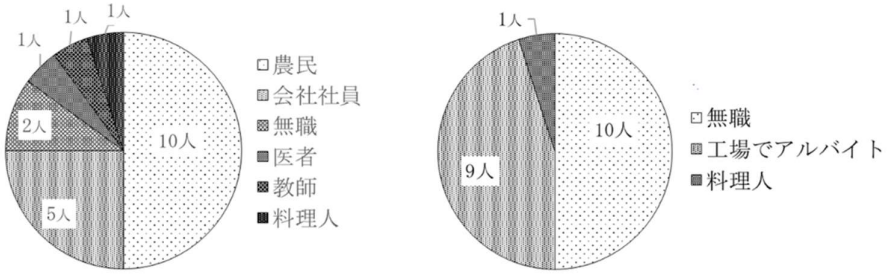



図 2.3 中国での仕事と日本に来た後の仕事

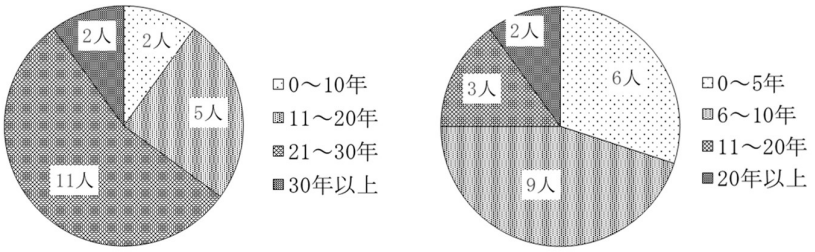



図 2.4 日本に居住年数と現在の居住年数

## 2.3　環境移行のプロセスと移行の原因

環境移行は居住地や生活拠点を変更することである。老化の特徴の一つとして適応力の低下があり、これには気温や温度などの物理的なものに対しても、社会・心理学的なものに対しても認められる。高齢者が長年住み慣れた場所から新しいところに移行することは、心身の適応力が低下しているので悪い影響をもたらすとされてきた。地域から施設へ、また農村から都市へ移動した高齢者が早期死亡するなどの事例が示されてきた[80)]。

図 2.4 に示すように、日本に住む年数をみると、半分以上の対象者は日本に 20 年間以上に住んでいて、日本での平均居住年数は 22.8 年で、日本での居住年数の最長の人が 37 年で、最短の人が 10 年である。現在の家の居住年数をみると、20 人のうち 15 人は今の家に 10 年間以内に住んでい

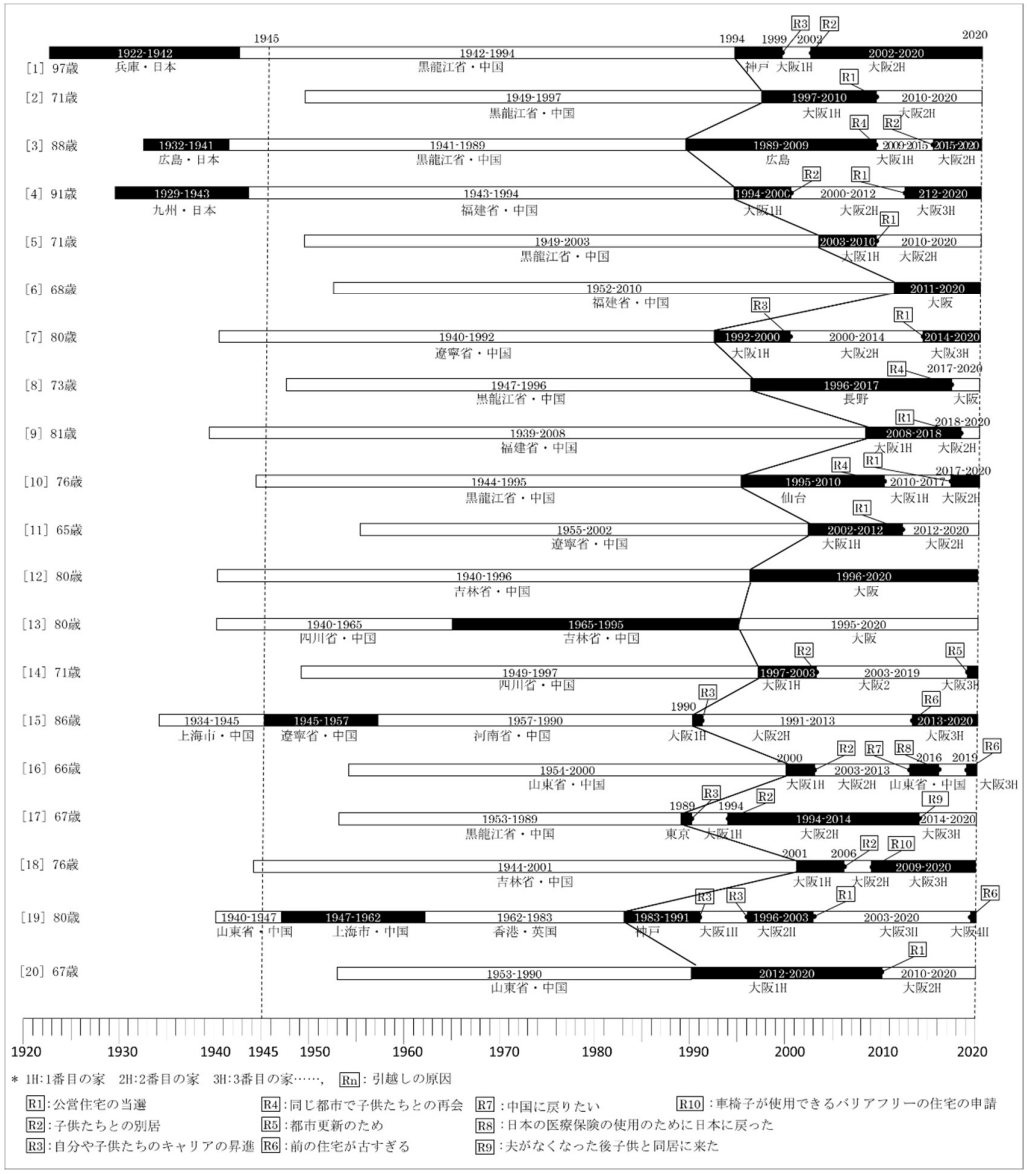



図 2.5 20 人対象者の現在までの環境移行のプロセスと環境移行の原因

て、現在の家の居住平均年数は 8.8 年で、最長の人が 25 年で、最短の人が 3 ヶ月である。日本に居住年数と現在の家に居住年数の違いにより、20 人の対象者が日本に来た後、頻繁に引っ越すことが分かった。

対象者の現在までの環境移行のプロセスと環境移行の原因を図 2.5 に示す。対象者のうち、3 人が日本で生まれ、9 人が中国東北部の省（黒竜江省、吉林省、遼寧省）、2 人が福建省、1 人が四川省、3 人が山東省、1 人が上海市で生まれた。全員が 1980 年代以降に来日した。20 人の対象者の来日時の平均年齢は 56 歳であった。日本に来た後、平均引っ越し回数は 2 回で、最多の人は 4 回であった。3 人のみが来日後に引っ越しがなかった。引っ越しをした理由の上位 3 つは、公営住宅の当選、子供たちとの別居、子供たちのキャリアの昇進であった(図 2.6)。公営住宅の当選について、前述のように新支援法は中国帰国者一世とその配偶者に対し公営住宅の優先入居の支援政策を実施しているが、二世は日本人と同じく低所得者向けの公営住宅の居住は抽選が原則である。子供たちとの別居について、多くの対象者は、来日後子供と同居していたが、生活が安定した後別居を選択した。また、小さい孫や孫娘を世話するため子供の家族と同居する対象者もいたが、孫や孫娘が中学生になると、子世帯と別居を選択した場合もあった。子供たちのキャリアの昇進とは、対象者は子供と同じ都市に住みたいため、子供が仕事のため他の都市に引っ越しする場合、彼らもその都市に引っ越しすることである。

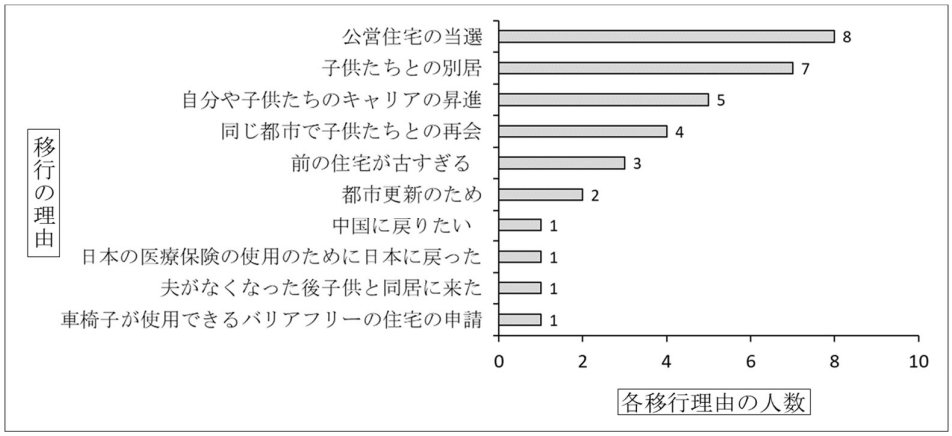



図 2.6 対象者の来日後引越しの原因

図 2.7～図 2.9 は 3 人の対象者の移行の事例である。対象者[3]は中国帰国者一世で、［16]は中国帰国者二世で、［19]は仕事のために来日した在日中国人である。図 2.7 に示すように、[3]は 88 歳の帰国者一世の女性である。彼女は日本の広島県に生まれ、1941 年 9 歳の時に両親と弟家族 4 人で満洲開拓団の農業移民として中国東北の黒龍江省に移住した。2 年後両親が相次いで亡くなって、彼女は弟と別の中国人農民夫婦の養子になった。その後、中国人と結婚して、ずっと中国に住んでいた。1989 年 57 歳の時に家族と一緒に出身地広島県に戻って、20 年間ぐらい広島県に住んでいた。この間、子どもたちは仕事のため相次いで大阪市に移住した。娘は彼女が一人で広島に暮らす

ことを心配し、2009 年 77 歳の時彼女は大阪市に移住して、長女と一緒に住み始めた。2015 年、生活習慣の違いがあって、1 人で暮らしたいため、長女の家の近くの賃貸住宅に引越した。彼女は日本語が良くて、アイデンティティが日本人であり、来日後日本の国籍に変更した。

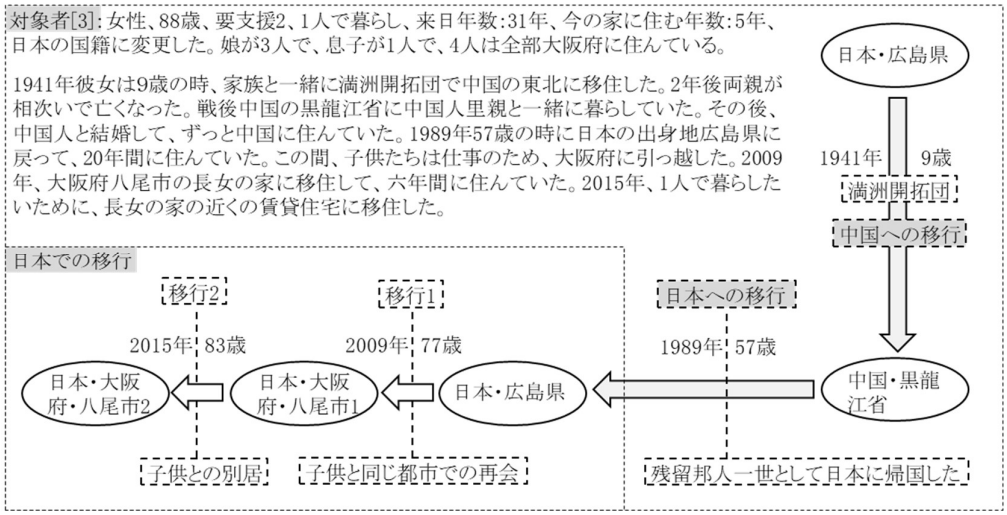



図 2.7　対象者[3]の人生移行のプロセスと原因

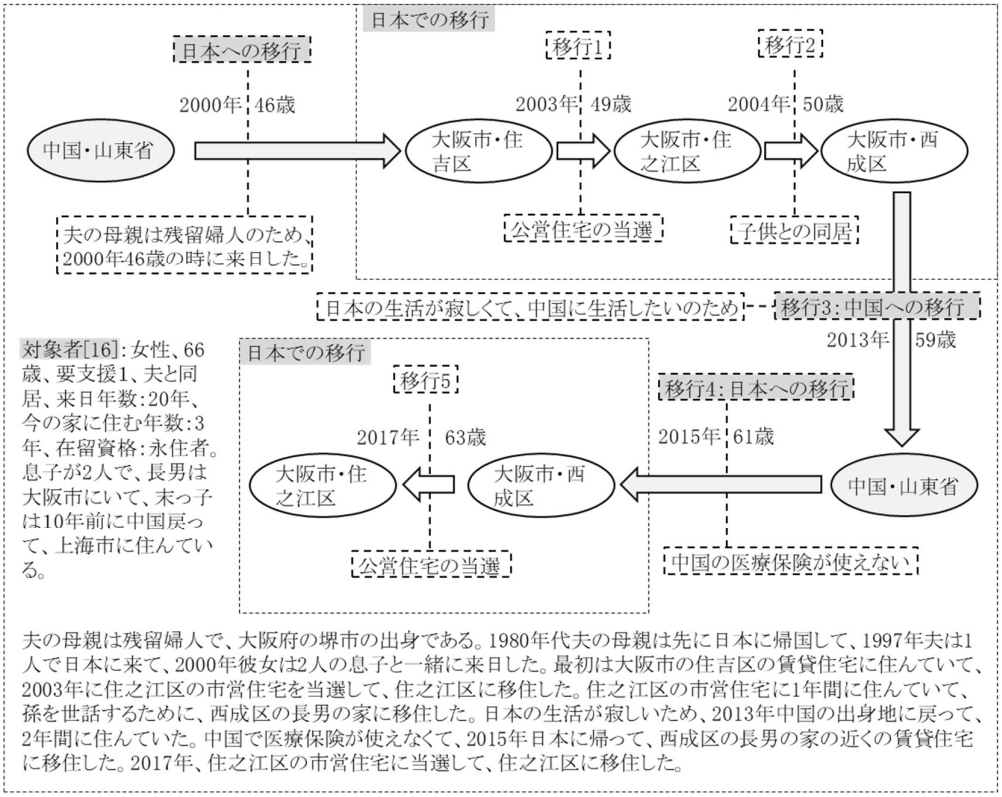



図 2.8　対象者[16]の人生移行のプロセスと原因

図 2.8 は対象者[16]の移行プロセスである。対象者[16]は 66 歳で、夫が帰国者二世である。夫の母親は残留婦人で、大阪の堺市の出身である。1980 年代末夫の母親は先に日本に帰国して、1997 年に夫が日本に来た。2000 年に彼女は 2 人の息子と一緒に来日して、大阪市の住吉区に住んでいた。3 年後大阪市の住之江区の市営住宅の抽選に当たって、その市営住宅に移住した。住之江区の市営に一年間住んでいて、孫の世話をするため、2004 年に西成区の長男の家に移住した。9 年後の 2013 年、日本に友達がいなく寂しくて、中国の出身地山東省に戻った。2 年後、中国の医療保険が使えないため、再び日本に来て長男の家の近くの賃貸住宅に住んでいた。2017 年、前に住んでいた住之江区の市営住宅に当選して、そこに移住した。

図 2.9 は対象者[19]の移行プロセスである。対象者[19]は 80 歳で、仕事のために 1983 年に香港から来日した。最初は神戸市の中国料理店で料理人として働いていた。1991 年に転勤して、大阪府の箕面市に移住した。1996 年に末っ子に良い教育を施したいために、大阪市に移住した。また、大阪で自分の中国料理店を経営し始めたが、経営に苦しんで 3 年後に閉店した。63 歳の時、大阪府松原市の公営住宅に当選して、そこに移住した。2020 年 80 歳の時、前の住宅が古すぎて、松原市の府営住宅の抽選に当たって移住した。彼の長男と次男は現在香港に在住し、末っ子のみ大阪府に住んでいる。しかし、夫婦は末っ子との関係が悪くて何年間も連絡していない。

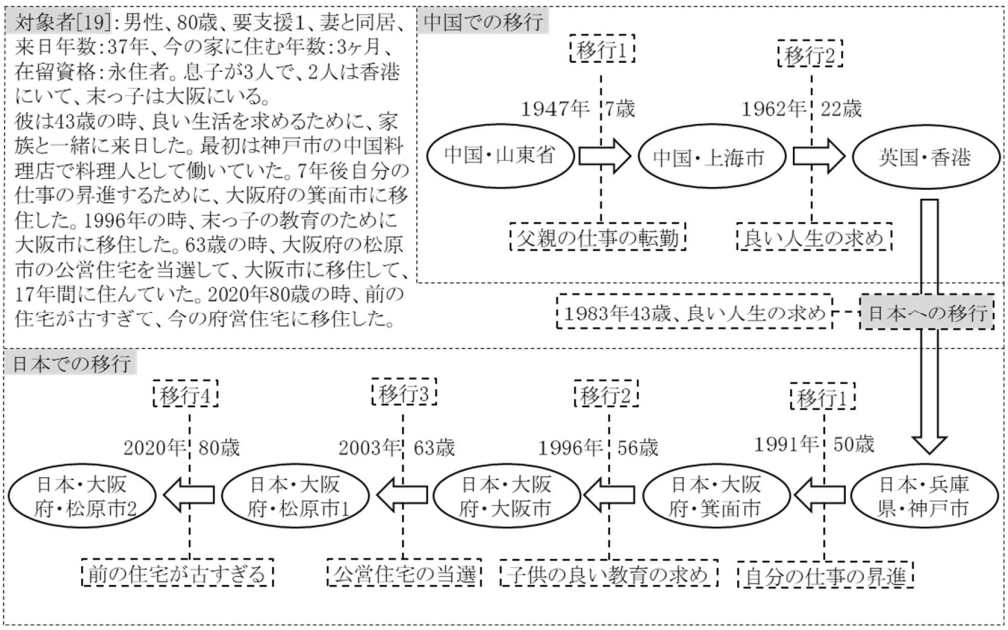



図 2.9　対象者[19]の人生移行のプロセスと原因

## 2.4　住宅環境

住宅環境は、高齢者が住み慣れた自宅に住み続けるというエイジング・イン・プレイスにとって、最も重要な要因である。高齢化とともに、体格や身体寸法が小さくなり作業領域が狭まって、脚力や筋力の身体的能力が低下し、感覚機能を始めとした生理的機能が減退するため、住宅環境への適応力が低下する。また、疾病や負傷の機会が多くなって、過去の記憶や物に対する執着が強まって、判断力の低下など精神面の弱化、特に認知症が発症した場合に深刻な影響を及ぼす[81)]。日本の住宅の特徴をあげれば、（1）段差が多い、（2）部屋面積が小さい、（3）和式の生活様式があげられ、特に、畳の部屋を中心とした座式の生活のため、立ち上がりの動作の負担が大きいなど、高齢者がそれまで住んできた住宅で老いることを困難にしている[82)]。介護保険の基本理念である要介護状態への予防や住まいにおける自立した日常生活の重視の実現は、住宅環境の整備が大きくかかわってきる[82)]。高齢中国帰国者・在日中国人高齢者にとって、現在の住宅の傾向及び在宅でのライフスタイルうを把握することは彼らの住宅環境の改善にとって有効だと考えられる。

### 2.4.1　住宅の基本情報

対象者の住宅情報を表 2.3 に示す。14 人の対象者は市営住宅や府営住宅の公営住宅に住んでいる。家賃が安い木質文化住宅や賃貸アパートに各 2 人が住み、2 人は子供世代と戸建住宅に住んでいる（図 2.10）。平面配置について、14 人はリビングルームがない 2K、2DK、3K などの類型であり、毎日の活動はすべて寝室やキッチン/ダイニングルームで行われる。

表 2.3　対象者の住宅情報

| 調査対象の記号 | 住宅の類型 | 平面配置 | 面積 | 住む階数／総階数 | エレベーターの有無 | 築年数 | バリアフリーの状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| [1] | 文化住宅 | 2K | 30㎡ | 1/2 | 無し | 不明 | あり |
| [2] | 文化住宅 | 2K | 37㎡ | 1/2 | 無し | 1970 | なし |
| [3] | 賃貸マンション | 2K | 39㎡ | 3/8 | 無し | 1989 | あり |
| [4] | 市営住宅 | 2DK | 48㎡ | 1/15 | あり | 1989 | あり |
| [5] | 府営住宅 | 2K | 36㎡ | 4/11 | あり | 1994 | なし |
| [6] | 一戸建て | 4LDK | 108㎡ | 1/4 | 無し | 不明 | なし |
| [7] | 市営住宅 | 3DK | 58㎡ | 4/15 | あり | 1995 | なし |
| [8] | 府営住宅 | 3DK | 62㎡ | 20/31 | あり | 1999 | なし |
| [9] | 市営住宅 | 3K | 39㎡ | 4/15 | あり | 1972 | なし |
| [10] | 府営住宅 | 2K | 36㎡ | 3/5 | 無し | 1977 | なし |
| [11] | 市営住宅 | 3K | 42㎡ | 8/12 | あり | 1998 | なし |
| [12] | 府営住宅 | 2DK | 38㎡ | 2/5 | 無し | 1977 | あり |
| [13] | 市営住宅 | 3DK | 62㎡ | 3/9 | あり | 1995 | あり |
| [14] | 賃貸マンション | 2LDK | 53㎡ | 1/3 | 無し | 1997 | なし |
| [15] | 市営住宅 | 3DK | 54㎡ | 8/14 | あり | 不明 | あり |
| [16] | 市営住宅 | 3DK | 48㎡ | 4/9 | あり | 1982 | なし |
| [17] | 一戸建て | 4LDK | 120㎡ | 1/2 | 無し | 2014 | なし |
| [18] | 市営住宅 | 2LDK | 59㎡ | 1/7 | 無し | 2010 | あり |
| [19] | 市営住宅 | 2DK | 43㎡ | 5/10 | あり | 1971 | あり |
| [20] | 府営住宅 | 2DK | 40㎡ | 2/5 | 無し | 1977 | なし |

住宅の平均面積は 53 ㎡で、半分の住宅の面積が 40～60 ㎡であり、40 ㎡以下の住宅が 7 軒で、60 ㎡以上の住宅が 3 軒である。住む階数は、9 人の対象者が 1 ～2 階に住み、8 人の対象者が 3-5

階に住み、10 階以上に住む人が 1 人だけである(図２.11)。そのうち、4 人の住宅が 1970 年代に建てられた。また、半分以上の対象者の住宅はバリアフリー設備がない。

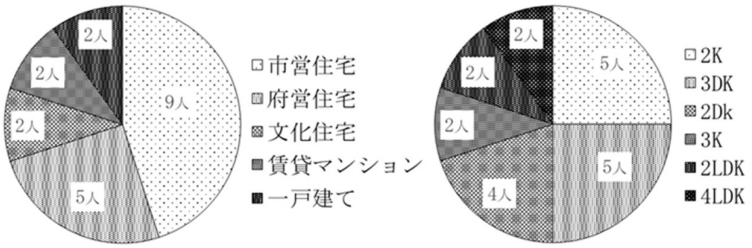



図 2.10　住宅の類型と平面配置

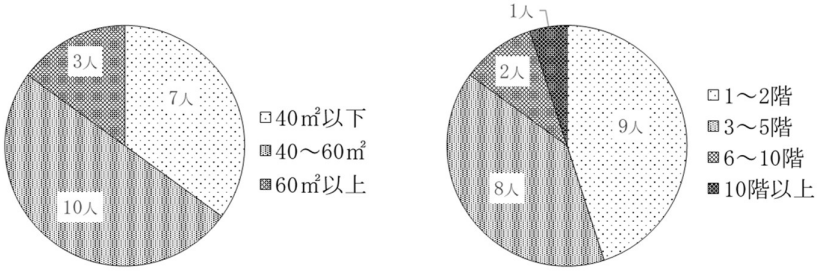



図 2.11　住宅の面積と彼らの居住階数

### 2.4.2　家でよく使っている生活用品と中国風の飾り物

#### 家でよく使っている生活用品

物品には「記号」として働く「付加価値」(自己提示的価値、関係性の象徴的価値、情緒的価値)が備わっており、物品は自己アイデンティティの確認や提示に役立つ[83)]。人の生活は物品を媒体として営まれることが多く、人と物品の間には相互の浸透関係があり、平常時において両者は安定した居住環境システムを構築している[83)]。高齢中国帰国者・高齢中国帰国者にとって、よく使っている生活用品は彼らの在宅生活の質を反映していると考えられ、表 2.3 に自宅で使用している家具・生活道具等を示す。

睡眠や食事などの生活必需品について、20 人のうち住宅の広さにかかわらず、19 人の対象者は毎日ベッドで寝ていて、畳で寝ている対象者が 1 人のみである。15 人の対象者は家にテーブルが一点のみあり、このテーブルは全て椅子座のテーブルで、主に食卓として使用されている。台所用品については、ほとんどの対象者の家に冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器などの調理家電があるが、要介護度の影響により、8 人が一部の調理家電を使わなく、訪問介護員または子供が利用している。また、すべての対象者が中国のカレンダーを使っている、その理由は主な中国の祝日が農暦（日本の旧暦）の祝日で、中国のカレンダーには農暦と西暦両方を記載しているからである。リラックス用品について、18 人はテレビがあり、11 人がテレビを寝室に置いている。そのうち 11 人が衛星放送のアンテナを設置し、中国のテレビ放送を視聴している。また、6 人がスマートフォンを所有し、

これを使って中国の新聞やビデオを見ている。

表 2.3　20 人の対象者の住宅の生活用品の種類

| 生活用品種類 | | [1] | [2] | [3] | [4] | [5] | [6] | [7] | [8] | [9] | [10] | [11] | [12] | [13] | [14] | [15] | [16] | [17] | [18] | [19] | [20] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 家具用品 | ベッド | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 畳 | × | — | × | × | — | × | × | × | × | — | × | — | × | ○ | × | — | × | — | × | ○ |
| | 食卓 | ○ | ○ | × | × | ○ | × | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | ○ |
| | テーブル | × | × | ○ | ○ | ○ | × | ○ | × | ○ | × | × | × | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 椅子 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ |
| | ソファー | × | × | × | × | ○ | × | × | × | × | × | × | × | ○ | × | × | × | ○ | × | ○ | ○ |
| | 中国のカレンダー | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 家電用品 | 冷蔵庫 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | クックトップ | — | — | ○ | ○ | ○ | — | ○ | — | — | — | ○ | — | ○ | — | — | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 電子レンジ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | — | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 炊飯器 | × | ○ | ○ | ○ | ○ | — | ○ | — | — | — | ○ | — | ○ | — | — | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 食器棚 | × | ○ | × | ○ | ○ | — | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 洗濯機 | × | ○ | ○ | ○ | ○ | — | ○ | — | — | — | ○ | — | ○ | — | — | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 浴槽 | × | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | — | ○ | — | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | シャワー | × | × | ○ | ○ | ○ | × | × | — | × | — | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 掃除道具 | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | — | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 電動ファン | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | ○ | ○ | × | × | × |
| | エアコン | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | × | ○ |
| レクリエーション用品 | スマートフォン | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ |
| | アンテナテレビ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ |
| | 中国語の本 | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | ○ | ○ | × | × | × | × |
| | 植栽 | × | × | × | × | × | × | × | ○ | × | × | ○ | × | × | ○ | × | × | ○ | ○ | ○ | × |
| | 編み針 | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | ○ | × | × |
| | 猫の砂 | ○ | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | ○ | × |
| | 麻雀 | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | ○ | × | × | × | × | × | × | × | × | ○ |

○：あり，×：なし，—：あるけど使わない

室内でよく使っている生活用品の量や種類別数と彼らの身体状況の間に明確な関係性がある、特に台所、掃除とリラックス用品である。よく使っている生活用品の量や種類別数が多いほど、彼らの自立度が高く、日常生活動作が他人への依頼性が低く、生活の質が高いことを反映している。また、敷布団ではなくベッドに寝ることや座布団ではなく椅子に座ることを選ぶこと、中国のカレンダーと中国のテレビを見ることから、彼らは今でも中国式の生活習慣を維持していると考えられる[注7)]。

### 中国風の飾り物

インテリアデザインや飾り物は、所有者の文化的背景を反映している。 本研究の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者のほとんどは、装飾が中国の背景とのつながりを表現する唯一の因子になる。対象者の家の中国式飾り物の種類は非常に単純であり、主な中国風の装飾は中国のカレンダー、中国の結び目、中国のカーペット、中国の絵画である（図 2.12）。

図 2.12　対象者の家の主な中国風装飾品

### 2.4.3　在宅の日常活動と在宅ライフスタイル

図 2.13 に自宅での活動を示す。対象者が家で最も多く行う活動は簡単な家事である。最も多く行う娯楽は中国のドラマを見ることである。家で簡単な運動をする対象者は 3 人、ペットを飼っている人は 2 人であった。

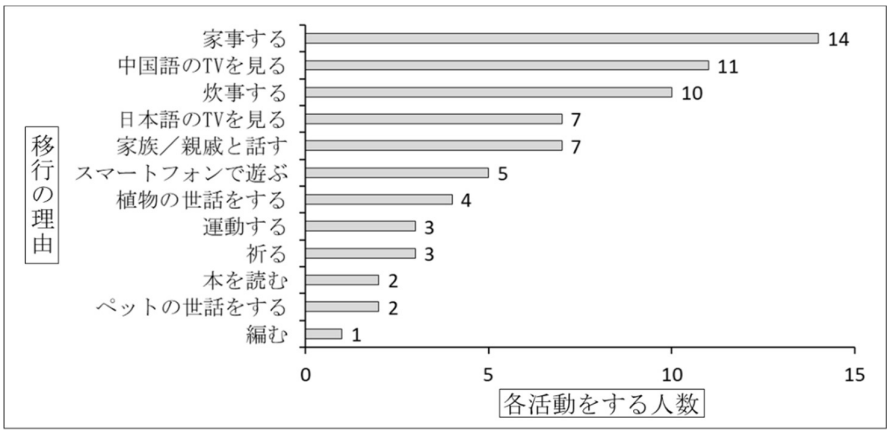



図 2.13　対象者の在宅の日常活動

室内の空間の使用状況と日常ライフスタイルを図 2.14～2.16 に示す。20 人の対象者の在宅ライフスタイルは、1 ベッドルーム中心(6 人)、2 ベッドルーム中心(4 人)、ベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在（10 人)の 3 タイプに分類できる。

1 ベッドルーム中心のライフスタイルを図 2.14 に示す。高齢者はほとんどの時間を一つのベッドルームで過ごし、睡眠、食事、リラックスなどの日常活動をベッドルームで行う。2 ベッドルーム中心のライフスタイルを図 2.15 に示す。彼らの日常活動を通常二つのベッドルームで行う。ベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在のライフスタイルを図 2.15 に示す。高齢者は通常ベッドルームで寝るが、それ以外の時間はリビング・ダイニングルームに滞在する。

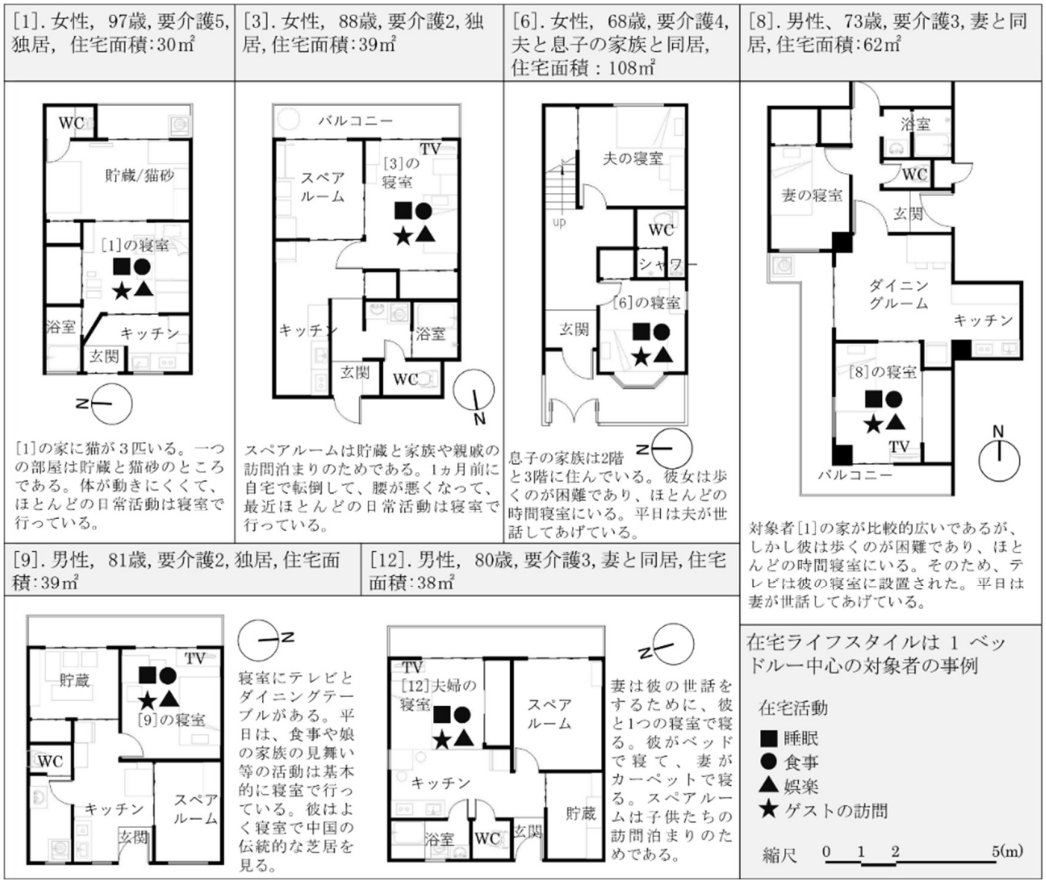



図 2.14 1 ベッドルーム中心のライフスタイル

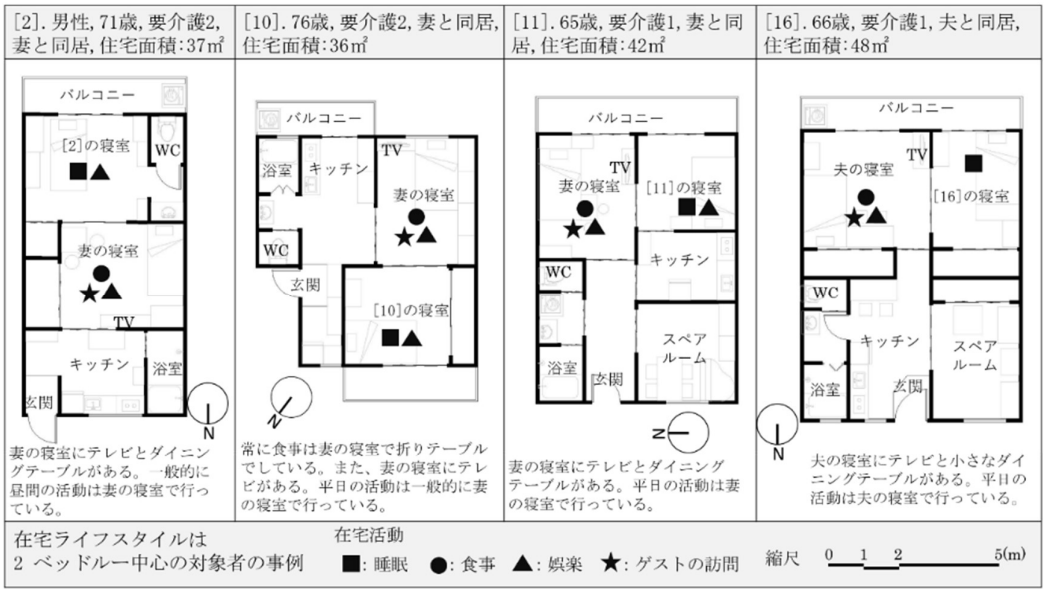



図 2.15 2 ベッドルーム中心のライフスタイル

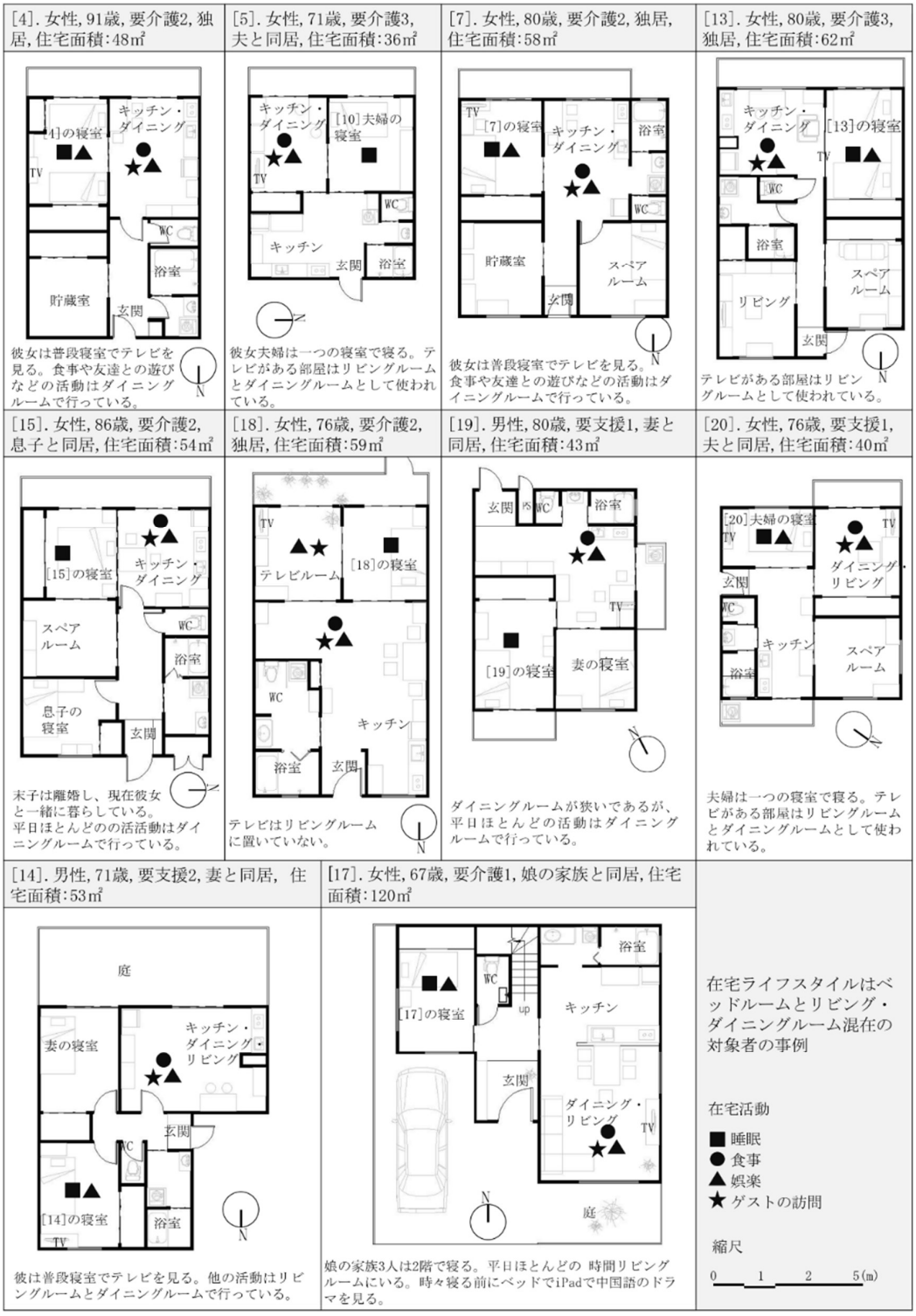



図 2.16 ベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在のライフスタイル

要介護度と在宅ライフスタイルの関係を見ると、要介護 4 以上の 2 人は 1 ベッドルーム中心のライフスタイルであり、要支援の対象者 3 人はベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在のライフスタイルである（図 2.17)。

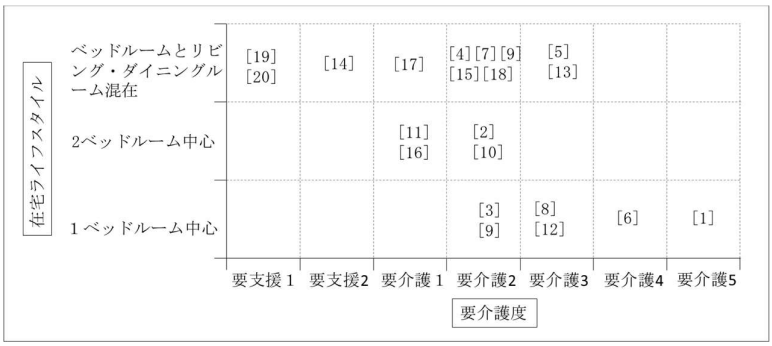



図 2.17 要介護度と在宅ライフスタイルの関係

図2.18は1ベッドルーム中心のライフスタイルの１事例である。対象者[12]は府営住宅に住み、妻と同居している。体が良くないから、妻が彼の世話をするために、夫婦が一つベッドルームに寝ている。平日の生活はほとんどの時間にこの部屋を中心として送っている。写真 2.1 は屋内区間の現状である。

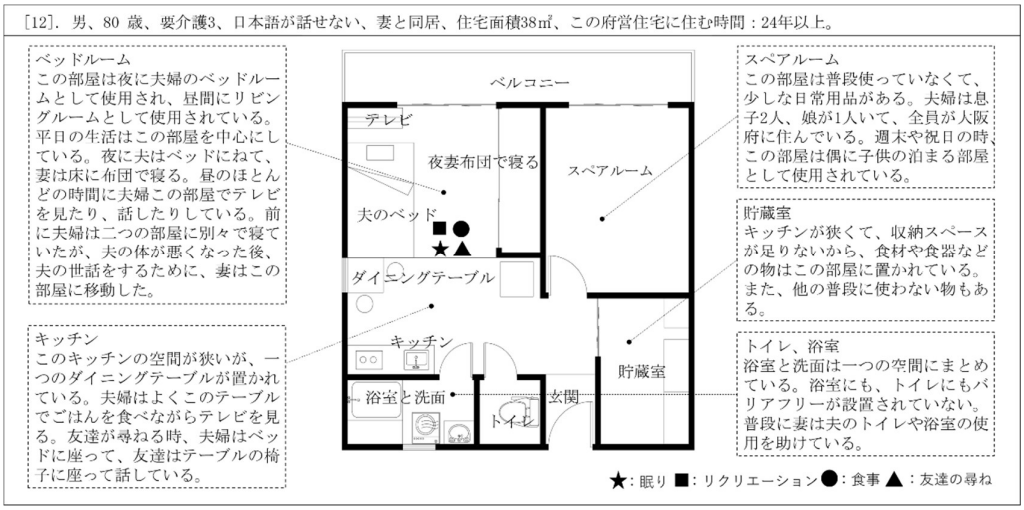



図 2.18　1 ベッドルーム中心のライフスタイルの事例（対象者[12]）

ベッドルーム　　キッチン　　スペアルーム

写真 2.1 対象者[12]の住宅の屋内の現状

図 2.19 は 2 ベッドルーム中心のライフスタイルの 1 事例である。対象者[11]は市営団地に住み、妻と同居している。夫婦は二つのベッドルームに分かれて寝る。普段の生活は彼のベッドルームと妻のベッドルームを中心に送っている。夜は自分のベッドルームに寝て、昼は妻のベッドルームで中国語のテレビを見たり、ご飯を食べたり、友達と話したりしている。しかし、脳卒中になった後、自分のベッドルームにいる時間が長くなっている。写真 2.2 は室内の様子である。

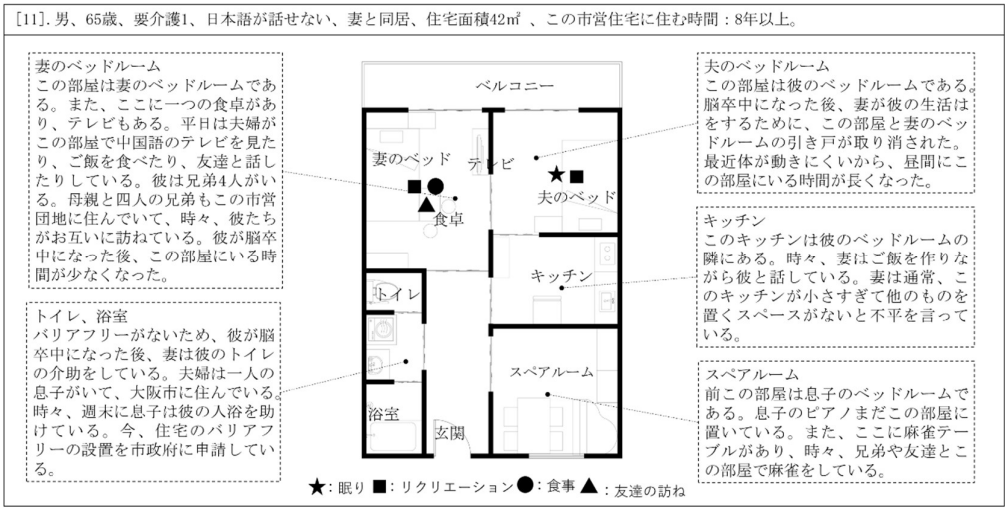



図 2.19　2 ベッドルーム中心のライフスタイルの事例（対象者[11]）

写真 2.2 対象者[11]の住宅の屋内の様子

図 2.20 はベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在のライフスタイルの 1 事例である。対象者[17]は一戸建てに娘の家族と同居している。彼女のベッドルームは一階にあって、娘夫婦と孫娘のベッドルームは二階にある。彼女は昼間のほとんどの時間にリビングルームに過ごしている。夜寝る前に時々 iPad で中国語のドラマを見ている。写真 2.3 は屋内の様子である。

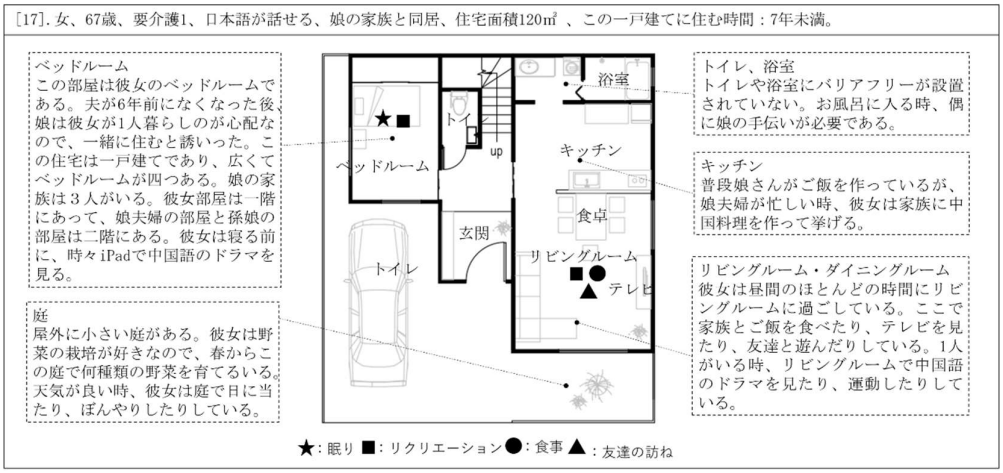



図 2.20 ベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在のライフスタイルの事例(対象者[17])

写真 2.3 対象者[11]と妻の二つのベッドルームの様子

### 2.4.4　住宅環境に対する満足度

住宅環境の満足度について、満足が 7 人、やや満足が 6 人、やや不満足が 4 人、不満足が 1 人の回答であった。その理由について、多くの対象者が生活水準や経済状況が低い当時の中国の住宅状況と現在の住宅状況を比べて良くなったことや家賃が低額であることを挙げている。

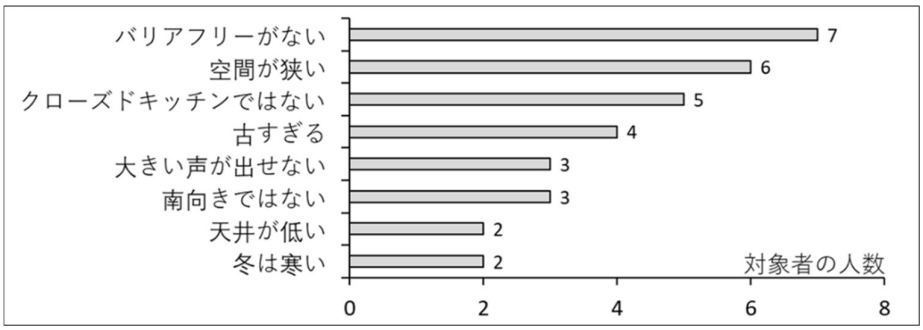



図 2.21　対象者は住宅環境に対する不満足または生活上の不便な点

不満足または生活上の不便な点を図 2.21 に示す。「バリアフリーでない」が最も多く、次いで、「空間が狭い・リビングルームがない」「クローズドキッチンではない」「古すぎる」「大きい声が出せない」の順である。「バリアフリーでない」については、対象者が介護に係るリフォームの助成について情報を知らないためである。介護保険や自治体の助成金制度により申請すれば住宅の改修にかかる費用が最大 20 万円まで、1 割の自己負担で利用できるが、この情報を把握していない。「クローズドキッチンではない」について、ほとんどの対象者は毎日中国料理を作っているので油煙が強く、換気性能が不足し、湯煙が部屋に充満するためである。

## 2.5　まとめ

本節では、20 名の在高齢中国帰国者・日中国人高齢者を対象に、インタビュー調査と現地調査を通して、彼らの基本属性、環境移行のプロセスと原因および住宅環境の現状を明らかにした。下記に結果をまとめる。

(1) 対象者の属性について

20 名の対象者のうち、中国帰国者が 18 人、在日中国人が 2 人である。平均年齢は 77 歳で、平均要介護度は要介護 2.1 である。日本国籍に変更した人は 2 人で、18 人は中国国籍を保留したまま日本の永住権または定住ビザを持っている。多くの対象者は、日本に来る前は経済状態が悪い農民であり、また教育水準が低かった。来日後、半数が日本で仕事をしておらず、工場でアルバイトをしていた。また日本語が話せない人が多かった。

(2) 対象者の環境移行について

対象者全員は 1980 年代以降来日し、来日後、平均引っ越し回数は 2 回であった。日本在住の平均年数は 22.8 年であり、現在の家の居住平均年数は 8.8 年である。 彼らが引っ越しする主な理由は公営住宅の当選、子供たちとの別居、そして自分や子供たちのキャリアの昇進である。

(3) 住宅環境について

12 人の対象者はバリアフリーがない市営や府営住宅などの公営住宅に住んでいる。平均面積は 53 ㎡で、半分以上の対象者の住宅はビングルームがない 2K、2DK、3K などの平面配置である。また、住宅環境に対する不満足点や生活上の不便な点は、「バリアフリーがない」が最も多く、バリアフリーの改修に関する情報を把握していなかった。

室内でよく使っている生活用品の量や種類別数と対象者の身体状況の間に明確な関係性がある、要介護度が高い対象者がよく使っている生活用品の量や種類別数は少なく、特に台所、掃除とリラックス用品を使用している。また、敷布団ではなくベッドに寝ることや座布団ではなく椅子に座ることを選ぶこと、中国のカレンダーと中国のテレビを見ることから、彼らは今でも中国式の生活習慣を維持していると考えられる。インテリアデザインや装飾は、所有者の文化的背景を反映している。対象者の家の主な中国風の装飾は中国のカレンダー、中国の結び目、中国のカーペット、中国の絵画である。

対象者が家で最も多く行う活動は簡単な家事である。最も多く行う娯楽は中国のドラマを見ることである。家で簡単な運動をする対象者は 3 人、ペットを飼っている人は 2 人である。対象者の在宅ライフスタイルは、図 6.2 に示すように、1 ベッドルーム中心(6 人)、2 ベッドルーム中心(4 人)、ベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在 (10 人)の 3 タイプに分類できる。要介護度との関係をみると、要介護 4 以上の 2 人は 1 ベッドルーム中心のライフスタイルである。

## 注記

注 6） 中国では、1955 年から、計画経済と配給制度を運営するため、全国の人口を農業人口と非農業人口に区別する戸籍制度が設定された。1990 年代前、農民は自由に都市に移行できず、収入又は福祉の面で都市の居民が大きく異なっていた。ほとんどの農民は低所得者であった。

注 7） 趙萍らは、中国帰国者が日本に来た後、まだベッドで寝ることと椅子座などの中国の起居様式を維持していると指摘している[84)]。

## 引用・参考文献

80） 柴田 博， 杉澤 秀博， 狩野 徹： 高齢者の生活の質と居住環境， 日本生気象学会雑誌， 34 巻 1 号 pp.31-35， 1997

81） 松本 正富： 高齢者の福祉住環境， 川崎医療福祉学会誌， 増刊号， pp.79-88， 2010

82） 公益財団法人東京都福祉保健財団：在宅生活と住宅改修：高齢者にとって住まいとは，
https://www.fukunavi.or.jp/fukunavi/contents/tokushu/jutakukaisyu/01_01.html（2022.06.05 参照）

83）山田 雅之，山口 健太郎，髙田 光雄：高齢者向け住宅の住戸空間における物品の種類および量と空間の関係性， 日本建築学会計画系論文集， 第 83 巻,第 751 号， pp.1623-1633， 2018.09

84）趙萍， 町田玲子：中国帰国者の住生活に関する研究－阪神・淡路大震災の被災地の居住者の場合：京都在住者と比較して， 日本家政学会誌， 第 49 巻， 第 7 号， pp. 811-820， 1998

# 第 3 章　高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会環境と近隣環境

## 3.1　本章の目的と調査方法

### 本章の目的

前章では高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の環境移行と住環境を注目し、移行の具体的なプロセスと原因及び住宅環境の現状実態を明らかにした。本章は高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会環境と近隣環境を注目する。高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会的なつながり、社交程度、近隣の利便性、近隣でのコミュニティーライフスタイル等の社会環境と近隣環境の現状を把握し、その実態を明らかにする。

### 調査方法

本章の研究方法は前章と同様の調査方法である。研究対象は前章と同じく大阪府在住の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の 20 名であり、彼らとその家族に対するアンケートとインタビューを行い、近隣での現地調査を実施した。調査者は訪問介護事業所のケアマネジャーの協力の下で調査を行い、ケアマネジャーと一緒に調査対象の家に訪問した。調査は、主に中国語を使用した。対象者の選定では、ケアマネージャーを通して協力を依頼したため、居住地域は同じではなく、20 名の対象者は大阪府の 6 市に居住している。そのことにより多様な住環境の結果が得られると考えられる。調査期間は 2019 年 11 月から 2020 年 08 月である。表 3.1 は調査の概要を示す。

表 3.1 本章の調査の概要

| | | |
|---|---|---|
| アンケートとインタビュー調査 | 目的 | 20人の対象者の社会的つながりの現状、近隣での活動やコミュニティーライフスタイルを明らかにする。 |
| | 調査対象 | 大阪府に在住している20人の高齢中国帰国者・中国人高齢者とその家族 |
| | 調査項目 | 在日家族人数と交流現状、親戚の人数と交流現状、友人の人数と交流現状、訪問介護の利用現状、通所施設の利用現状、外出の頻度、近隣での活動等。 |
| | 調査方法 | アンケートとインタビュー |
| | 調査時間 | 2019.11-2021.08（1人の対象者に対する平均調査時間は1時間である） |
| 現地調査 | 目的 | 20人の対象者の近隣環境の現状を把握する。 |
| | 調査対象 | 20人の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の近隣の生活施設。 |
| | 調査項目 | 近隣の利便性（スーパー、病院、公園、駅、コンビニなどの有無と通達性）、対象者は平日よく行く場所。 |
| | 調査方法 | 撮影、測定、描画、記録、Googlemapで標記など。 |
| | 調査時間 | 2019.11-2021.08（1人の対象者に対する平均調査時間は2時間である） |

## 3.2　社会環境

社会環境とは、高齢者の社会的つながりと参加する社会活動を指す。Bekhet, A. K.の研究によると、社会活動に参加し、社会的つながりを維持または増やしている高齢者は、孤立した高齢者よりも健康レベルの低下の進行が遅いことが明らかにされた[85]。社会的資源との接触を失ったり、社会活動に参加する意欲を失ったりすることは「社会的孤立」と定義できる。社会的孤立に苦しむ人々は通常健康状態が悪い。社会的孤立がメンタルヘルス、身心の苦痛、認知症、自殺、早死と関連している可能性があるとの研究結果も得られている[86]。本研究は高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会環境を彼らの社会的なつながりと社交程度に注目する。

### 3.2.1　対象者の社会的つながり

表 3.2 は、20 人の対象者の全ての社会的つながりを示している。対象者の社会的つながりにおいてはスーパーや飲食店の店員の一部を除き中国語でコミュニケーションしている。高齢中国帰国者・在日中国人高齢者は日本人の友達がつくれず、日本人の隣人と交流がない。中国人や中国帰国者の隣人との社会的つながりを持つ人が 8 人いる。3 人の対象者がかつて日本人向けのデイサービスに行っていたが、日本語の環境に適応できず、最終的に中国帰国者向けのデイサービスに行くようになった[注8)]。

表 3.2　対象者の社会的つながり

| 社会的つながり | [1] | [2] | [3] | [4] | [5] | [6] | [7] | [8] | [9] | [10] | [11] | [12] | [13] | [14] | [15] | [16] | [17] | [18] | [19] | [20] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 家族 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 中国人親戚 | X | X | X | ○ | X | X | X | X | X | X | ○ | X | X | X | X | X | ○ | ○ | X | ○ |
| 中国人友達 | X | ○ | X | ○ | X | X | X | X | X | ○ | ○ | ○ | X | X | X | X | X | ○ | X | ○ |
| 日本人友達 | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | ○ |
| 中国人隣人 | X | ○ | ○ | ○ | X | X | X | X | X | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | X | X | ○ | X | ○ |
| 日本人隣人 | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X |
| 中国人ヘルパー | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | ○ | ○ | X | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | X | ○ | ○ | X |
| 社会団体 | X | ○ | X | ○ | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | ○ | X | X |
| 中国人向けのデイ | X | ○ | X | ○ | X | X | X | ○ | X | ○ | X | X | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | X | X |
| 店員など | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | X | X | X | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

＊○ あり，X なし.

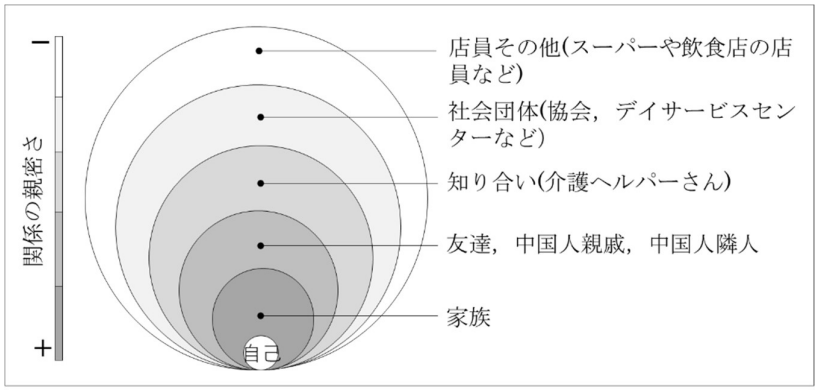



図 3.1　対象者の社会的つながりの五つの次元

Mari Smith[87]の研究によると、対象者の社会的つながりは親密さに基づいて 5 つの次元に分けることができ、これを参考に 20 人の対象者の社会的次元を図 3.1 に示す。対象者の社会的つながりのうち、家族が最も近い関係である。最も遠い関係である買い物する時の営業員や飲食店の店員などの見知らない人との交流は、日本社会への参加度を表している。表 3.1 に示すように、20 人の対象者の中で最も多い社会的なつながりは家族であり、全員が該当する。最も少ない社会的なつながりはアソシエーション（日本語クラス、教会）での社会的つながりであり、3 人であった。

### 3.2.2　対象者の社交程度

図 3.2 に示すように、社会的つながりの次元と種類を組み合わて、20 人の対象者の社交程度を強い、やや強い、やや弱い、弱いの 4 つのレベルに分類した。より多くの次元と種類の社会的つながりを持っている高齢者は、より強い社交程度を持っている。

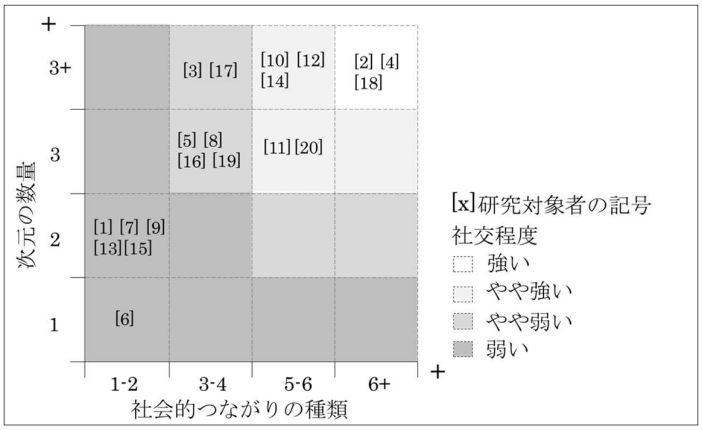



図 3.2　20 人の対象者の社交程度の判定基準

社交程度が弱い対象者は 6 人いて、家族と中国語を話すヘルパーの 2 次元までであり、家族や中国語を話すヘルパー以外の社会的つながりがない。6 人の対象者の社交程度はやや弱いであり、彼らの社会的つながりの次元は 3 以上であるが、6 人とも介護に関して、中国語を話すヘルパーか中国帰国者向けのデイサービスの一方か、もしくは両方に社会的つながりを持っている。それ以外の社会的つながりが少ない。3 人の対象者の社交程度は強く、親戚はいないが、家族や友人、アソシエーション、デイサービスや見知らない人と社会的つながりがある。6 人の対象者の社交程度はやや強く、家族、親戚、友人、隣人、アソシエーション等社会的つながりを持っている。

図 3.3～3.6 は 4 種類の社交程度の対象者の事例説明である。図 3.3 は強い社交程度の対象者[2]の事例説明である。対象者[2]は 71 歳の男性であり、要介護 2 である。彼は五つの社会的なつながりの次元を持っている。家族について、彼は妻と同居していて、夫婦関係が良くて、妻の体が悪くなる前に、何でも一緒にしている。息子 2 人の家族もこの近くに住んでいて、息子や孫さんが平日よく彼の家に訪ねている。また、末っ子の妻は週何回彼の家に来て、家事を手伝ってあげている。

親友等について、彼は日本で何人かの中国人の友人を作って、時に友人の家へ遊びに行っている。この地域に他の中国人もいて、天気がいい日、皆は家の近くの公園で集まって会話したり、運動したりしている。知り合いについて、彼は週二回家の近くの日本語教室に通っている。日本語教室で何人かの知り合いがいる。また、ヘルパーさんは週二回妻の身体の介護のために来ている。社会団体について、彼は週二回家の近くの日本語教室に通っている。時に、日本語教室が主催する活動に参加する。また、他の中国人と交流するために、夫婦は週二回一緒に中国人向けのデイサービスに通所している。店員その他について、彼は時々家の近くのスーパーへ買い物に行き、店員と必要最低限の話をする。月何回自分が好きな料理店へ中華料理を食べに行っている。他の類型の店にあまり行かなくて、子供たちはよく服を買ってあげている。

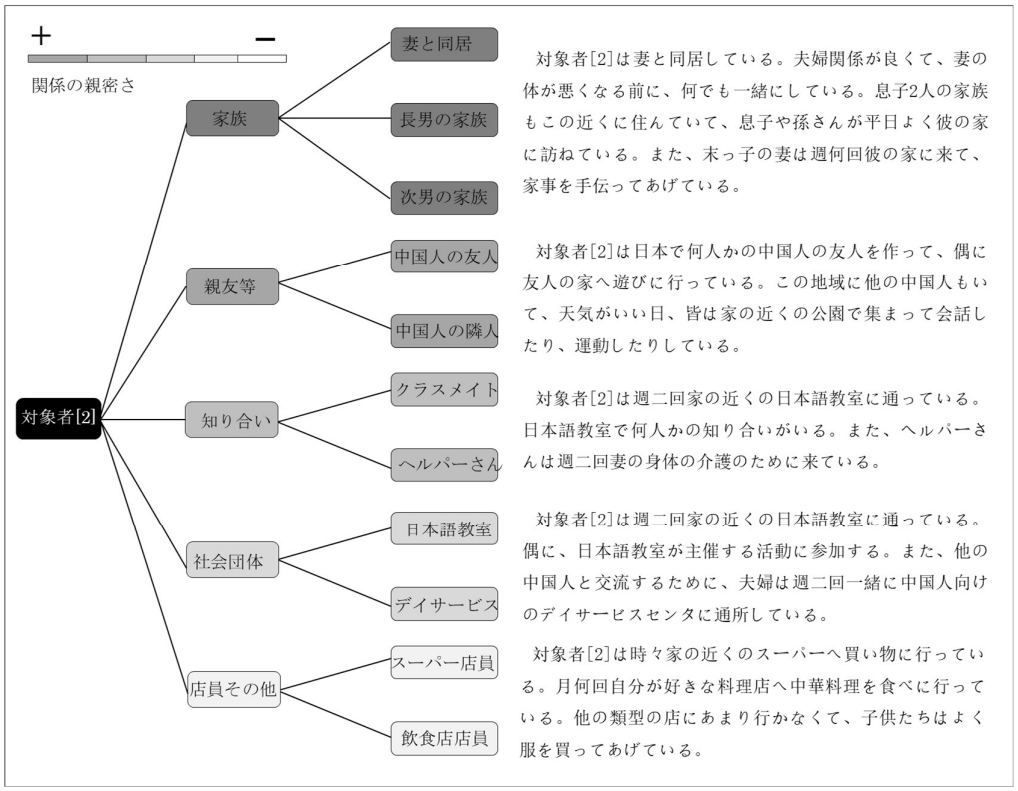



図 3.3　強い社交程度の対象者の[2]社交程度

図 3. 4はやや強い社交程度の対象者[20]の事例説明である。対象者[20]は 67 歳の女性であり、要支援１である。彼女は三つの社会的なつながりの次元を持っている。家族について、彼女は夫と同居している。夫婦は旅行が好きなので、常に一緒に日本の各地へ旅行に行っている。娘は１人で、大阪市に住んでいる。週末や祝日に夫婦をよく訪ねている。親友等について、彼女は兄弟３人も大阪に住んでいて、中国の祝日によく集まって一緒に中華料理を食べる。彼女は日本で何人かの中国人の友達を作って、皆はよく一緒にカラオケをしたり、ショッピングしたりしている。また、何年

前に 2 人の中国語を勉強したい日本人に出会って、友達になって、平日よくお互いに自分の国の言語の勉強を助けてあげている。さらに、彼女の隣人は中国人であり、皆よくお互いに家に訪ねている。知らない人について、彼女は週 3 回家の近くのスーパーに買い物をしている。偶に夫婦は外食をしている。彼女の日本語は普通のコミュニケーションが大丈夫なので、何か必要な買い物があれば、夫婦は自分で買いに行っている。

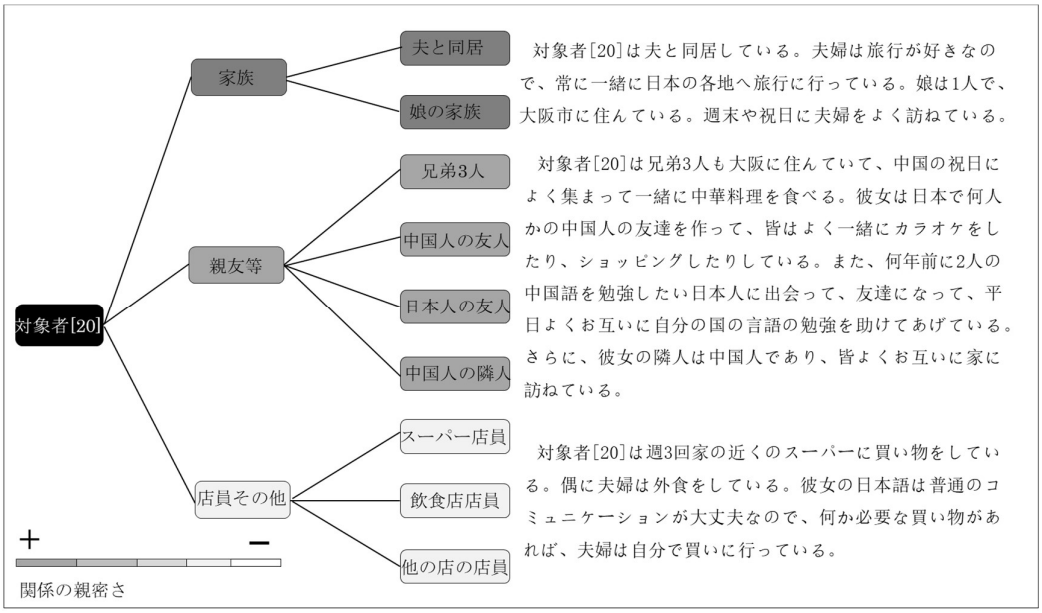



図 3.4　やや強い社交程度の対象者[20]の社交程度

図 3.5 はやや弱い社交程度の対象者[8]の事例説明である。対象者[8]は 67 歳の男性であり、要介護 3 である。彼は三つの社会的なつながりの次元を持っている。家族について、彼は妻と同居している。平日妻は彼の世話をしている。息子は大阪市で働いているため、4 年前に夫婦は長野県から大阪市に引越した。娘は 3 人で、長野県に住んでいて、年間 2、3 回夫婦を見舞いに来ている。

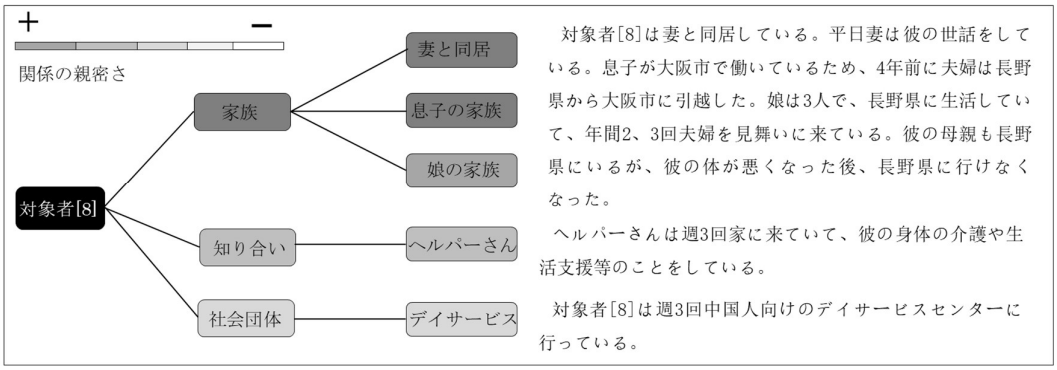



図 3.5　やや弱い社交程度の対象者[8]の社交程度

彼の母親も長野県にいるが、彼の体が悪くになった後、長野県に行けなかった。知り合いについて、ヘルパーさんは週 3 回家に来ていて、彼のの身体介護や生活支援等をしている。社会団体について、彼は週 3 回中国人向けのデイサービスに行っている。

図 3.6 は弱い社交程度の対象者［1］の事例説明である。対象者［1］は 97 歳の女性であり、要支援 5 である。彼女は二つの社会的なつながりの次元を持っている。家族について、彼女は今 1 人暮らしである。娘 1 人がいるが、別の県に住んでいて、1 年間 2、3 回ぐらい彼女の家に訪ねている。1 人の孫娘は大阪市に住んでいて、週末や祝日によく彼女を見舞いに来ている。知り合いについて、ヘルパーさんは週五回彼女の家に来ている。身体の介護や入浴の介助や生活援助等の仕事をしている。

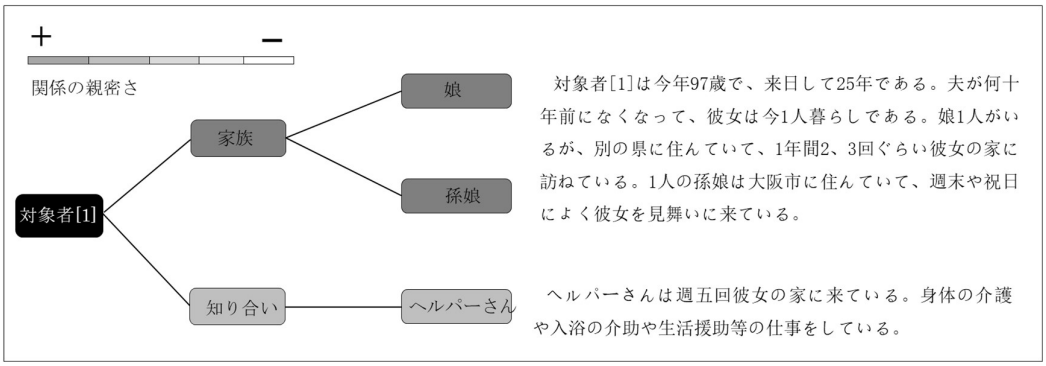



図 3.6　弱い社交程度の対象者［1］の社交程度

## 3.3　近隣環境

近隣とは、日常生活における買物や余暇を含め、その人が最も日常的に曝露する空間的範囲を指すものといえ、操作的には町丁目や自宅からの一定距離内で定義されることが多い[88)]。近年、多くの研究者が場所の重要性に着目する必要性を主張しており、特に、身近な空間である近隣環境が住民の健康に与える影響に注目が集まっている。本研究は高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の近隣環境を近隣での利便性とコミュニティーライフスタイルに注目し、高齢者の要介護度、社交程度及び近隣の利便性は近隣でのコミュニティーライフスタイルとの関連性を明らかにする。

### 3.3.1　近隣環境の生活利便性

近隣環境の範囲を高齢者の身体機能に配して、彼らの自宅から半径 500m で、徒歩 10 分程度のエリアと定義し、調査対象者の近隣環境での活動状況を示す。「エイジング・イン・プレイス」を実現するために高齢中国帰国者・在日中国人高齢者にとって、身体機能が低下していっても、近隣環境の生活利便性が充実し、アクセスできることが重要である。

公共交通、買い物、医療・福祉施設、交友・レクリエーションの公園[注 9)] 等の生活利便性について評価する。グーグルマップ（Google map）という地理的情報ならびに現地調査を用いて、20 人の対象者の家から半径 500m 範囲内の生活利便施設を調査した結果を表 3.3 に示す。

近隣の生活施設の数量をみると、18 人の対象者のうち、対象者［2］［3］［11］［13］［18］の近隣環境の生活利便性が高く、対象者［10］［12］［17］［19］［20］の生活利便性が低い。

表 3.3　対象者の近隣での生活利便施設と利便性

| 生活利便施設 | [1] | [2] | [3] | [4] | [5] | [6] | [7] | [8] | [9] | [10] | [11] | [12] | [13] | [14] | [15] | [16] | [17] | [18] | [19] | [20] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 電車駅 | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | X | X | ○ | X | ○ | X | X | ○ | X | X | X | X |
| バス停 | ○ | X | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X |
| コンビニ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ |
| スーパー | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | X |
| 中華物産店 | X | ○ | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | ○ | X | X | X | ○ | X | X |
| 飲食店 | ○ | ○ | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | ○ | X | ○ | ○ | ○ |
| 病院 | ○ | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | ○ | X | X | X | X | X |
| クリニック | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ |
| 街区公園 | X | ○ | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | ○ | ○ |
| 近隣公園/地区公園 | X | ○ | ○ | X | X | X | X | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ | X | X | ○ | ○ | ○ | X | X |
| 友人の家 | X | ○ | ○ | ○ | X | X | X | X | X | ○ | ○ | ○ | X | X | X | X | ○ | ○ | ○ | X |
| 子供や親戚の家 | X | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | X | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | X | X | ○ | ○ | X | X |
| 利便施設の数量 | 7 | 9 | 9 | 6 | 7 | 8 | 7 | 7 | 7 | 5 | 10 | 4 | 9 | 6 | 7 | 8 | 4 | 9 | 4 | 4 |
| 近隣の利便性 | M | H | H | M | M | M | M | M | M | L | H | L | H | M | M | M | L | H | L | L |

* ○ あり，X なし，H: 高い，M:中くらい，L: 低い.

### 3.3.2　外出頻度、近隣での活動と近隣でのコミュニティーライフスタイル

対象者の近隣での主な行動と 1 週間の外出頻度を表 3.4 に示す。8 人の対象者が週に 5 回以上出かけ、7 人が週に 3 回未満の外出である。最も多い外出が散歩であり、隣人への訪問は 9 人、子どもや親戚への訪問が 10 人、友人と遊ぶ外出が 8 人であった。外出の頻度と近隣の行動の多様性に

基づいて、近隣のコミュニティライフスタイルを、アクティブ(4 人)、ややアクティブ(4 人)、ややパッシブ(5 人)、パッシブ(7 人)の 4 つのタイプに分類した（図 3.7)。

「アクティブ」タイプとは、高齢者がよく出かけて、他の人と中国語でコミュニケーションをとり、積極的に活動に参加するというタイプである。「ややアクティブ」タイプとは、高齢者が出かけることや他の人とのコミュニケーションが好きであるが、近隣での行動の多様性や外出の頻度が「アクティブ」タイプより少なくなるタイプである。「ややパッシブ」タイプとは、高齢者が買い物や病院に行くことなど生活に必要な行動以外、外出や他の人とのコミュニケーションをしないタイプである。「パッシブ」タイプとは、高齢者がほとんど外出しなく、他の人とのコミュニケーションがあまりないタイプである。

表 3.4　対象者の近隣での活動種類と外出頻度

| 近隣での活動 | [1] | [2] | [3] | [4] | [5] | [6] | [7] | [8] | [9] | [10] | [11] | [12] | [13] | [14] | [15] | [16] | [17] | [18] | [19] | [20] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 散歩する | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 運動する | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | ○ | X | X | X | X | ○ | X | ○ | X | X |
| 買い物する | X | ○ | X | ○ | ○ | X | ○ | X | X | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 隣人を訪ねる | X | ○ | ○ | ○ | X | X | X | X | X | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | X | X | ○ | X | ○ |
| 子供や親戚の家を訪問する | X | ○ | ○ | ○ | ○ | X | X | X | X | X | ○ | X | ○ | ○ | X | X | ○ | ○ | X | ○ |
| 友達と遊ぶ | X | ○ | X | ○ | X | X | X | X | X | ○ | ○ | ○ | X | ○ | X | X | X | ○ | X | ○ |
| 社会活動に参加する | X | ○ | X | ○ | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | X | ○ | X | X |
| R-cに行く／近くのD-s-cで入浴する | ○ | ○ | ○ | X | X | ○ | X | X | ○ | X | X | X | ○ | X | X | X | X | X | X | X |
| 活動の種類 | 2- | 5+ | 4-5 | 5+ | 2-3 | 2- | 2-3 | 2- | 2-3 | 4-5 | 5+ | 4-5 | 2-3 | 4-5 | 2- | 2-3 | 2-3 | 5+ | 2-3 | 4-5 |
| 外出頻度 | 2-3 | 5+ | 5+ | 5+ | 2-3 | 2-3 | 2-3 | 2- | 2-3 | 4-5 | 5+ | 4-5 | 4-5 | 4-5 | 2- | 5+ | 5+ | 5+ | 4-5 | 5+ |

＊○ あり，X なし．　R-c:リハビリテーションセンター. D-s-c: デイサービスセンター

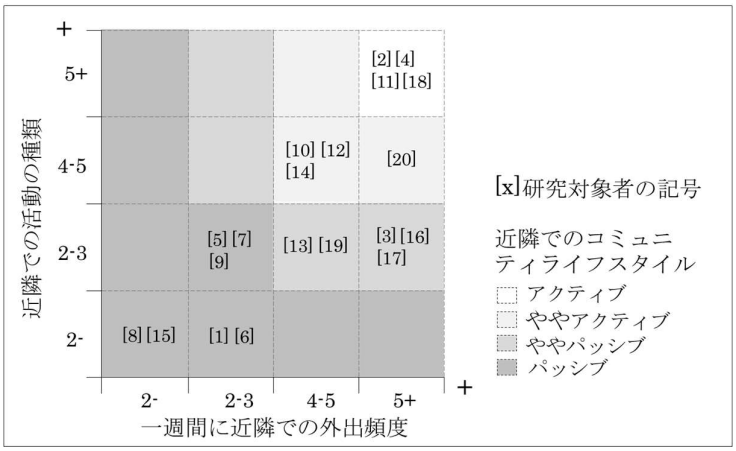



図 3.7　対象者の近隣でのコミュニティーライフスタイルの判定基準

近隣でのライフスタイルと要介護度、近隣の利便性と対象者の社交程度の関連性を図 3.8～図 3.10 に示す。図 3.8 に示すように、対象者の近隣でのライフスタイルは要介護度との関連性は高くない。要介護度 4 以上の対象者 2 人はパッシブなライフスタイルを持っていて、要介護度 3 以下

の対象者の近隣でのライフスタイルは個別性が強い。図 3.9 に示すように、近隣でのライフスタイルは近隣の利便性との関連性はほとんどない。すなわち、近隣の利便性は高齢者の外出頻度と近隣の活動に影響していない。図 3.10 に示すように、対象者の社交程度と近隣でのライフスタイルの関連性は高い。すなわち、高齢者の社会的なつながりは外出頻度と近隣の活動に強く影響している。社交程度が高い高齢者の近隣でのライフスタイルがアクティブである。

対象者［2］［3］［4］らのように、近隣環境に中国語でコミュニケーションが取れる友達や家族が住んでいることが外出頻度に影響している。［1］［6］は要介護度が 4 以上であり、実質外出は困難であり、介護を受けるためにリハビリテーションやデイサービスを利用している。［8］［15］は近隣に外出をしていない。近隣に家族や友人が住んでいないことや、近隣に購買施設があり、歩行能力もあるが日本語が話せず同居する家族が買い物を行っている。社会的つながりは家族および中国語を話すヘルパーや高齢中国帰国者・在日中国人高齢者向けのデイサービスだけである。［5］［7］［9］はあまり近隣に外出せず、時々家族と一緒に外で散歩や買い物をしている。彼らの社会的つながりは家族及び中国語を話すヘルパーや近隣のデイサービスである。

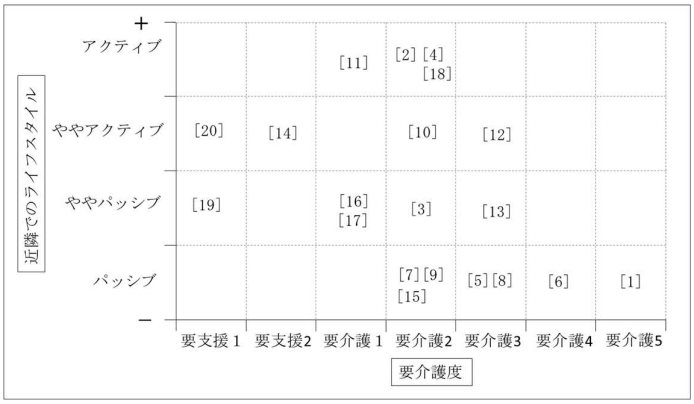



図 3.8　近隣でのライフスタイルと要介護度の関連性

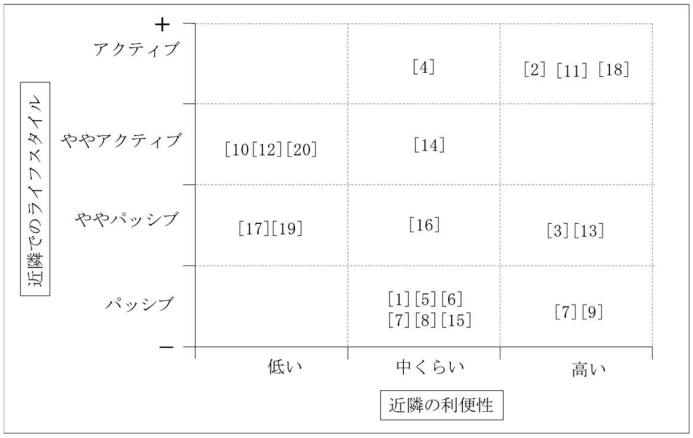



図 3.9　近隣でのライフスタイルと近隣利便性の関連性

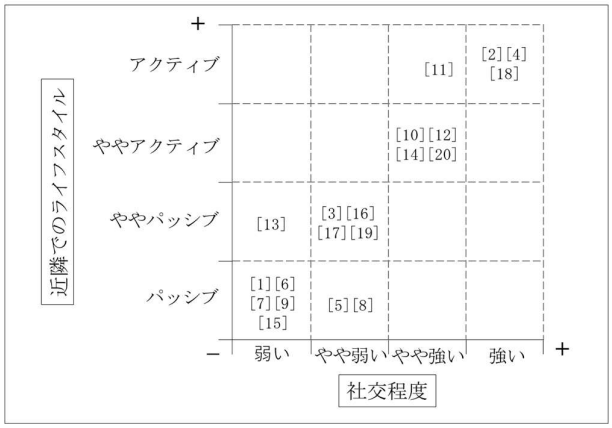



図 3.10　近隣でのライフスタイルと近隣の関連性

図 3.11 と図 3.12 は近隣でのコミュニティーライフスタイルがアクティブなタイプの二事例である。図 3.11 は 76 歳の中国帰国者二世の女性であり、ひとりで暮らしている対象者[18]の事例である。彼女は 19 年前の 56 歳で来日し、この地域に 11 年間住んでいる。息子 3 人もこの近くに住んでいる。日本語能力は「良い」である。平日、息子の家族はよく彼女を訪ねている。毎日、彼女は末子の家で晩ご飯を食べている。一週間に数回、家の近くの公園で簡単な運動している。この地域に、中国帰国者や在日中国人の数世帯が住んでおり、高齢者たちがよく公園で集まって、中国語でお喋りしたり、遊んだりしている。彼女は週二回友達や末子の嫁と一緒に家の近くのスーパーへ買い物に行っている。また、家の近くには中国語でコミュニケーションができる中華物産店があり、彼女は時々この中華物産店へ買い物やお喋りに行っている。現在、毎週の火曜日と金曜日に家の近くの外国人向けの日本語教室で日本語を勉強している。時々、日本語教室が主催する旅行や中国伝統芸術公演などの活動に参加している。

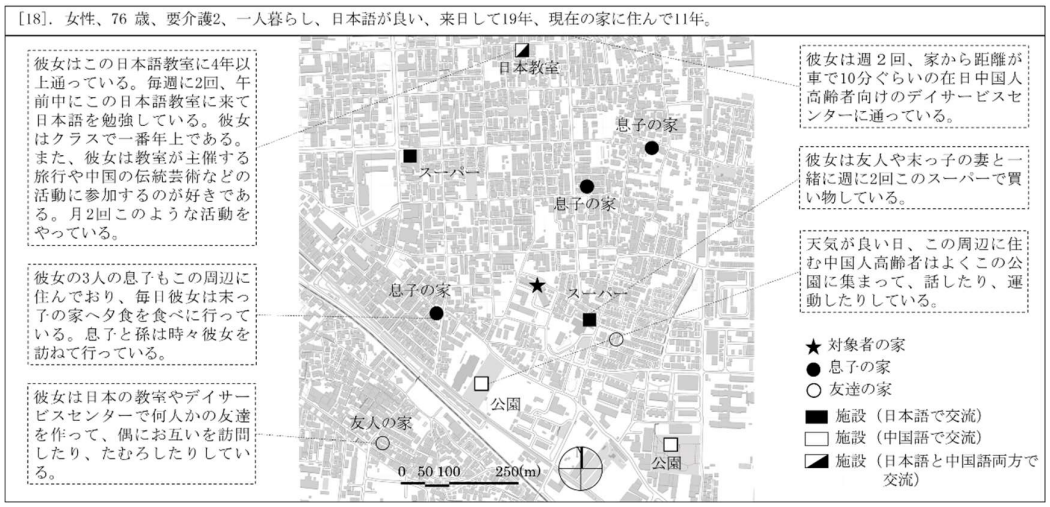



図 3.11　近隣でのコミュニティーライフスタイルがアクティブなタイプの事例（対象者[18]）

図 3.12 は 65 歳の中国帰国者二世の男性であり、妻と同居している対象者[11]の事例である。日本語能力は「話せない」である。彼は 18 年前の 47 歳で来日し、大阪市の賃貸住宅に 10 年間に住んでいた。8 年前に市営住宅を当選して、この地域に住み始めた。息子 1 人がいて、大阪市に住んでいる。彼の母親もこの団地に住んでいて、時々、彼は母親の家を訪ねている。彼の 3 人の兄弟もこの団地に住んでいて、偶に彼の家へ麻雀をしに来ている。この団地に何人かの中国人の友人も住んでいて、彼は週二、三回友人の家へ中国のお酒を飲みに行っている。天気がいい時、偶に友人と一緒に周辺で遊んでいる。妻は週二、三回家の近くスーパーで買い物をしていて、時々、彼と一緒に行っている。また、彼と妻は毎朝家の周辺の自動販売機のごみ箱から缶とボトルを集めていて、月一回売って、約２万円になる。家の近くに近隣公園があって、彼は平日よくこの公園で散歩したり、運動したりしている。しかし、去年脳卒中になった後、体が動きにくくなって、最近この公園にあまり来ていない。

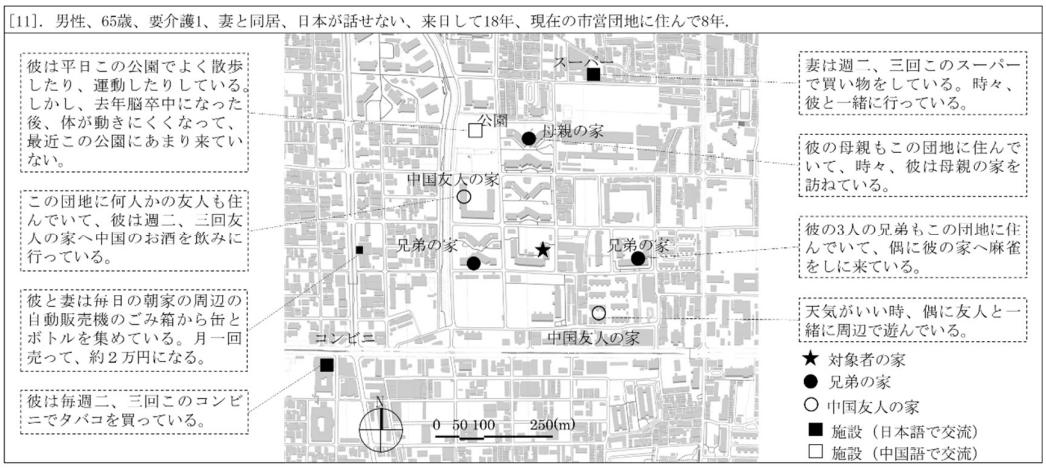



図 3.12　　近隣でのコミュニティーライフスタイルがアクティブなタイプの事例(対象者[11])

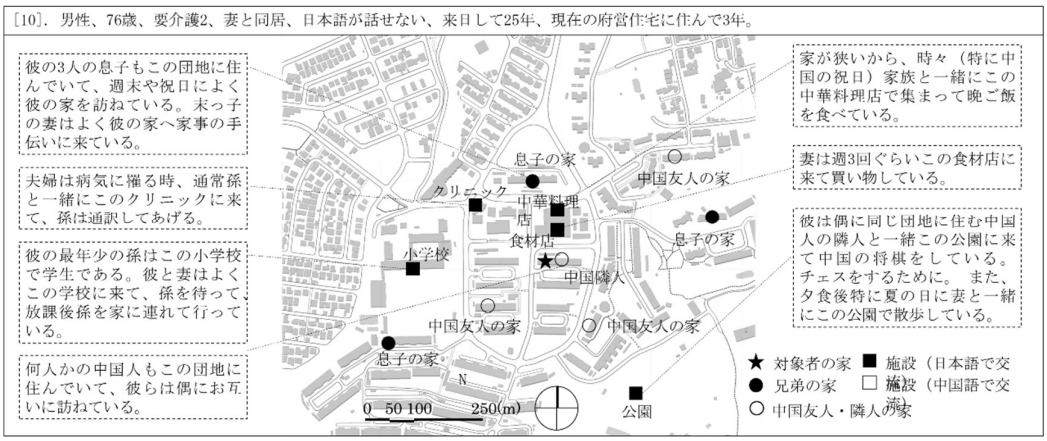



図 3.13　近隣でのコミュニティーライフスタイルがややアクティブなタイプの事例(対象者[10])

図 3.13 はややアクティブタイプの 1 例である。[10]は 76 歳の中国帰国者二世の男性であり、妻と同居している。日本語能力は「話せない」である。彼は 25 年前の 51 歳で来日し、来日後の 15 年間一世の母親と仙台に住んでいた。息子 3 人が大阪で働いているため、母親が亡くなった後大阪に引っ越した。3 年前、息子が住んでいる団地に引っ越した。平日息子の家族はよく彼の家に訪ねている。祝日の時、家族は近くの中華料理店で一緒に食事し、祝日を慶祝する。末子の妻はよく彼の家に訪問し、家事を助けてあげている。この団地にはたくさんの中国帰国者が住んでいる、彼には数名の帰国者友達ができて、時々皆が近くの公園で集まって、一緒に将棋をしている。また、彼の隣家も中国帰国者であり、隣人がよく彼の家に訪問し、一緒に食事したり、喋ったりしている。この団地の近くにはスーパーがなく、小さい食品商店があって、彼と妻は週二～三回ここで買い物している。

### 3.3.3　近隣環境に関する重要視するポイント

対象者の全員は現在の近隣環境に満足している。対象者が近隣環境において重要視するポイントに関するアンケート結果を図 3.14 に示す。「隣人との関係」の回答が最も多く、次いで、「買い物の利便性」「家族が近くに住むこと」「公園の有無」「中国語が対応できるデイサービス」の順である。日本の安全性、清潔性、交通の利便性が高いため、これらの項目を選択する対象者は少ない。近隣環境では隣人との関係を最も重要視しているが、実際には隣人との関係を持っていないことが明らかになった。

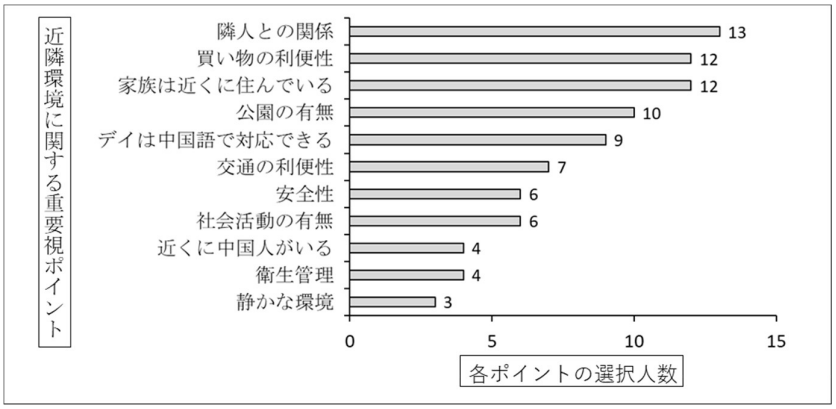



図 3.14　近隣環境に関する重要視するポイント

## 3.4　住宅環境・社会環境・近隣環境の関係性および中国から日本への移行による環境変化

### 3.4.1　住宅環境・社会環境・近隣環境の関係性

住宅でのライフスタイル・近隣でのコミュニティライフスタイル・社会的つながりの程度の関係性を図 3.15 に示す。住宅でのライフスタイルは社会環境や近隣環境との関連性は低いが、社会環境と近隣環境の関連性は高い。1 ベッドルーム中心の在宅ライフスタイルの 6 人のうち 3 人は、パッシブなコミュニティライフスタイルと弱い社会的つながりの程度であった。2 ベッドルーム中心やベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在の在宅ライフスタイルの対象者は、コミュニティライフスタイルと社会的つながりの程度がさまざまである。また、近隣での生活利便性と近隣でのコミュニティライフスタイルの関係性について、アクティブタイプの 4 人の対象者の中、3 人の対象者の近隣での生活利便性が高い、パッシブタイプのすべての 7 人の対象者の近隣での生活利便性が中等度である。ややアクティブタイプとややパッシブタイプの対象者について、近隣での生活利便性はさまざまである。また、近隣での生活利便性と社会的つながりの関連性は低いと考えられる。

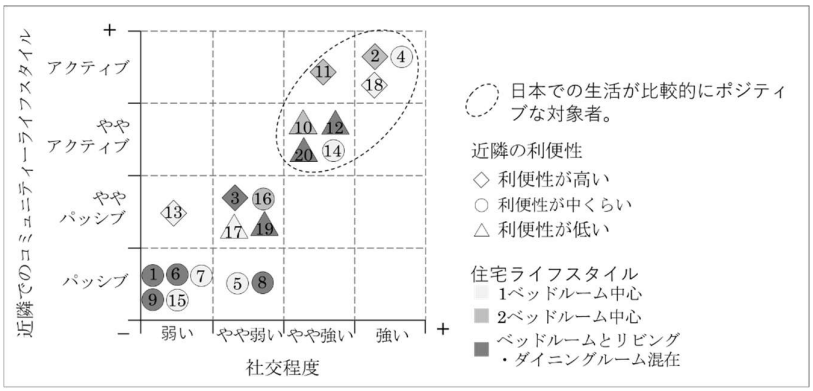



図 3.15　住宅環境・社会環境・近隣環境の関係性

[2] [4] [18] のように近隣環境に中国語でコミュニケーションを取ることができる家族や隣人・友人がいることがアクティブな外出となり、強い社会的つながりを持っている結果になったと考えられる。一方で [1] [6] [7] [9] [15] のように近隣環境に家族や隣人・友人がいない場合、外出に結び付かず、社会的つながりは中国語で話すヘルパーや中国帰国者向けのデイサービスの介護に関する社会的つながりにとどまっている。また要介護度に注目すると、要介護度 4 以上の [1] [6] は実質 1 人で外出することが困難であるのでパッシブなコミュニティライフスタイルであり、中国語でコミュニケーションが取れる訪問ヘルパーあるいは同居する家族だけの社交であり、弱い社交程度である。弱い社交程度かつパッシブなコミュニティライフスタイルである他の 3 人について、[7] は一人で暮らし、時々訪れる家族と一緒に外で散歩や買い物している。[9] は一人で暮らし、時々訪れる家族と一緒に外で散歩や近隣のデイサービスへ入浴に行っている。[15] は 56 歳の脳梗

塞の息子と同居し、平日全く外出していない。彼らの社交程度は家族と中国語でコミュニケーションが取れる訪問ヘルパーまたはデイサービスでの入浴する介護員である。

また、対象者の全体的な現状については、[2]、[4]、[18]が最も良く、[10]、[11]、[12]、[14]、[20]は２番目に良い。それ以外は比較的ネガティブな状況にあり、高齢中国帰国者のほとんどが日本でポジティブな生活現状を送っていないことを示している。

### 3.4.2　対象者が中国から日本への移行による環境変化

20 人の対象者へのアンケートとインタビューによって、日本に来る前の中国での住環境と現在の日本の住環境を比較し、移行による環境の変化に関する本人の評価を表 3.5 に示す。

住宅環境の項目で、住宅タイプ、平面レイアウト、住宅設備、プライベートスペースは全体的にポジティブな変化を示している。近隣環境に関しては、ほぼすべての項目がポジティブな変化を示している。住宅環境と近隣環境のポジティブに評価をした理由は、中国と日本の経済発展レベルが大きく異な点である。来日前までの中国での生活水準や経済は日本より良くなく、特に半分以上の対象者が中国の農村出身であり、都市部に比べてさらにそれらが良くなかった。来日後、政府からのサポートもあり生活水準や経済状況が大きく改善した。しかし、家族や経済状況を除き社会環境に関してほとんどの対象者がネガティブな評価をしている。日本語が不得手なことと、引っ越しを繰り返したことが影響していると考えられる[注 10)]。

表 3.5　対象者の中国から日本への移行による環境変化

| 住環境 | 副因子 | [1] | [2] | [3] | [4] | [5] | [6] | [7] | [8] | [9] | [10] | [11] | [12] | [13] | [14] | [15] | [16] | [17] | [18] | [19] | [20] | ＋の人数 | ―の人数 | ○の人数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 住宅環境 | 住宅タイプ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ― | ○ | ＋ | ― | ― | ＋ | ― | ○ | ＋ | ○ | ― | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | 10 | 5 | 5 |
| | 平面配置 | ― | ― | ＋ | ＋ | ― | ― | ○ | ＋ | ○ | ○ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ― | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | 10 | 5 | 5 |
| | 家用電気 | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | 18 | 0 | 2 |
| | 日常用品 | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ＋ | ― | ― | ○ | 1 | 15 | 4 |
| | 中国飾り | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ＋ | ○ | ＋ | ― | ― | ― | ― | ― | 2 | 16 | 2 |
| | レクリエーション | ○ | ― | ○ | ○ | ○ | ― | ― | ― | ― | ○ | ○ | ○ | ― | ― | ― | ― | ＋ | ＋ | ― | ○ | 2 | 10 | 8 |
| | 個人空間 | ○ | ― | ＋ | ○ | ― | ＋ | ＋ | ○ | ○ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ○ | ○ | ＋ | ○ | 9 | 2 | 9 |
| 近隣環境 | 在宅ライフスタイル | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ○ | ― | ○ | ○ | ― | ○ | 0 | 14 | 6 |
| | 交通状況 | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ○ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ○ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ○ | ○ | ＋ | 10 | 0 | 10 |
| | 衛生状況 | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | 20 | 0 | 0 |
| | 買い物の利便性 | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ＋ | 13 | 0 | 7 |
| | 公園 | ○ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ○ | 13 | 0 | 7 |
| | クリニック・病院 | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ○ | ＋ | ＋ | 18 | 0 | 2 |
| | 公共活動 | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ○ | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ○ | ― | 0 | 14 | 6 |
| 社会環境 | 配偶者 | ― | ○ | ― | ○ | ○ | ○ | ― | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ― | ○ | ― | ○ | ― | ― | ○ | ○ | 0 | 7 | 13 |
| | 子供 | ― | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ― | ― | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ― | ― | ＋ | ― | ― | ＋ | 2 | 7 | 11 |
| | 親戚 | ― | ― | ＋ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ○ | 1 | 16 | 3 |
| | 隣人 | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | 0 | 19 | 1 |
| | 友人 | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ○ | 0 | 16 | 4 |
| | 仕事 | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ○ | ＋ | ― | ○ | ○ | ＋ | 2 | 13 | 5 |
| | 社会団体 | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | 0 | 15 | 5 |
| | 言語 | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | 0 | 17 | 3 |
| | 経済状況 | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ○ | ＋ | ＋ | ＋ | ○ | ○ | ＋ | ＋ | ○ | ＋ | ＋ | ― | ＋ | ＋ | 14 | 1 | 5 |

＊ ＋:ポジティブな変化　　― :ネガティブな変化　○：変化がなし

## 3.6　まとめ

アンケート調査と現地調査を通して、20 名の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の現在の社会環境と近隣環境の現状を明らかにした。下記に結果をまとめる。

(1) 対象者の多くは日本人の友人がなく、中国人の友人も少ない。また社会活動に参加していなかった。対象者が持っている社会的つながりの次元数と種類数に基き、20 人の対象者の社交程度を 4 段階評価（強い、やや強い、やや弱い、弱い）を行った。社会的つながりの程度がやや弱い（5 人）、弱い（6 人）の人の多くは、家族・親戚や、中国語を話すことができるヘルパー・デイサービスに限定されていた。日本語が話せないことや頻繁な引っ越しは主な要因と考えられる。

(2) 近隣環境について、20 人の近隣での公共交通、買い物、医療・福祉施設、交友・レクリエーションの公園等の生活利便性について評価した。また、外出の頻度と近隣の行動の多様性に基づいて、近隣のコミュニティライフスタイルを、アクティブ(4 人)、ややアクティブ(4 人)、ややパッシブ(5 人)、パッシブ(7 人)の 4 つのタイプに分類した。近隣でのコミュニティーライフスタイルは対象者の要介護度と近隣の利便性との関連性が低く、社交程度との関連性が高い。「アクティブ」「ややアクティブ」タイプは、家族や隣人や友人との交流で外出している割合が高かったが、「パッシブ」「ややパッシブ」はそれらが見られなかった。アンケートによる主な近隣環境に関する重要視するポイントは「隣人との関係」を挙げる人が最も多かった。

(3) 中国から日本への移行による環境変化について、近隣環境がポジティブな変化を示し、社会環境がネガティブな変化を示し、一部の対象者は住宅環境がネガティブな変化を示している。

(4) 以上から、20 人の対象者のうち、7 人は日本で比較的ポジティブな状況にいるが、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者のなかには中国語環境の中で生活しており、日本で非常に孤立的に生活し、日本社会にうまく適応できていないことが分かった。

## 注記

注 8）厚生労働省の統計により、令和２年９月 30 日まで、日本全国には、中国語対応が可能な介護事業所数が 374 か所ある。大阪府は 34 か所がある。多くの介護事業所は中国帰国者又は在日中国人向けの事業所である[89]。

注 9） 国土交通省により、日本の都市住区基幹公園の種類を街区公園、近隣公園、地区公園と分類する[90]。

注 10）Shigehiro Oishi は、人間の幸福感が頻繁な引っ越しで低下する傾向があると指摘している。頻繁な引っ越しは人間の社会関係に大きく影響を与え、それ故、幸福感が社会関係に大きい影響を受けていると考えられる[91]。

## 引用・参考文献

85）Bekhet, A. K., Zauszniewski, J. A., and Nakhla, W. E.：Reasons for relocation to retirement communities: A qualitative study. Western Journal of Nursing Research, 31, pp.462-479, 2009

86）Berth, D. Danermark and Mats, E. Ekstrom.：Effects of residential relocation on mortality and morbidity among elderly people. European Journal of Public Health, Volume 6, Issue 3, pp.212-217, 1996.09

87） Mari Smith.： The New Relationship Marketing: How to Build a Large, Loyal, Profitable Network Using the Social Web. Hardcover – Illustrated, pp.75-79, 2011.10

88） 埴淵 知哉， 中谷 友樹， 竹上 未紗: 近隣環境と健康関連 QOL- 日本版総合的社会調査を用いた分析，地理学評論,88-6, pp.591-606, 2015

89）厚生労働省：中国語の対応が可能な介護事業所一覧，2020.09.30

90） 国土交通省，都市局：都市公園の種類
https://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/p_toshi/syurui/（参照 2020.10.15）

91）Shigehiro Oishi.：The Psychology of Residential Mobility: Implications for the Self, Social Relationships, and Well-Being. Perspectives on Psychological Science, pp. 5-21, 2010.05

# 第４章　中国語の対応が可能なデイサービスの運営と利用の実態

## 4.1　本章の目的と調査の方法

第二、三章は在日中国人高齢者の住宅環境、近隣環境と社会環境の実態を述べた。本章から高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の介護環境を注目する。

多くの高齢中国帰国者・在日中国人高齢者は日本語が話せないため、日本政府は彼らの介護ニーズを考慮し、中国語の対応が可能な介護施設を紹介・支援している。厚生労働省の統計によると、2020 年 9 月末の時点で、日本には中国語の対応が可能な介護事業所が 374 ヶ所あり、そのうち 115 ヶ所はデイサービス、100 ヶ所は訪問介護または居宅介護支援事業所、74 ヶ所は特別養護老人ホーム、それ以外はグループホーム、小規模多機能型居宅介護、有料老人ホームなどの介護施設である[71)]。図 4.1 は都道府県における中国語の対応が可能な介護施設の種類である。

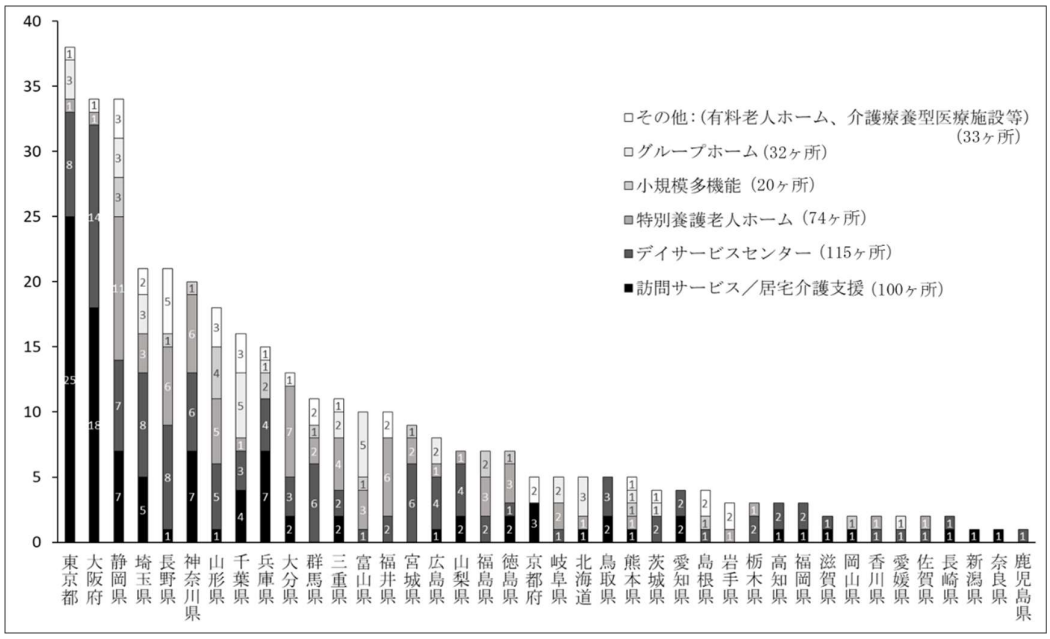



図 4.1　都道府県別の中国語の対応が可能な介護施設の種類

### 本章の目的と調査の方法

本章は日本において中国語の対応が可能な施設として最も多いデイサービス（以下、デイと表記）に注目する。日本における中国語の対応が可能なデイの実態は把握されていない。中国語の対応が可能なデイはどのように運営され利用されているのか、利用者はどのように利用しているか、これらが明らかにされていないので、本章の目的は日本において中国語の対応が可能なデイへのアンケート調査によりその運営と利用の実態の全国的な傾向を把握し、その全体像を明らかにする。

調査の方法は郵送アンケート調査である。調査対象は厚生労働省社会・援護局がまとめた「中国語の対応が可能な介護事業所一覧　（令和 2 年 9 月 30 日時点）」[注 11)] に掲載されている全ての 115 ヶ所のデイである。表 4.1 はアンケート調査の概要である。

表 4.1　アンケート調査の概要

| | | |
|---|---|---|
| 目的 | 既存の中国語の対応が可能なデイサービスセンターの運営状況、施設建築状況、利用者の基本的な特性を把握する。 | |
| 調査対象 | 日本国内にある全ての中国語の対応が可能なデイ115ヶ所。（2020年06末まで） | |
| 調査項目 | 運営の状況 | 設立年月、立地、定員、運営主体、併設機能の有無、スタッフの人数、介護サービスの内容等 |
| | 建物の状況 | 面積、平面配置、使用階数、構造、空間のパーティションの種類、キッチンの種類、使い方で不便な点等 |
| | 利用者の属性 | 人数、年齢、要介護度、利用者の一日の主な行動等 |
| | 異文化介護の問題 | 言語の問題、生活習慣の違い、文化背景と価値観の違い等の問題 |
| 調査方法 | 対象施設への郵送アンケート。 | |
| 調査時間 | アンケート発送：2021年2月8日、回収締め切り：2021年3月1日。 | |

## アンケートの回収の結果

115 ヶ所の中国語の対応が可能なデイへの郵送アンケートのうち有効回答数は 35 であり、有効回収率は 30.4%である[注 12)]。図 4.2 に示すように、都道府県別にみたアンケートの回答数は大阪府（8 ヶ所）、東京都（5 ヶ所）と神奈川県（3 ヶ所）が上位 3 位である。

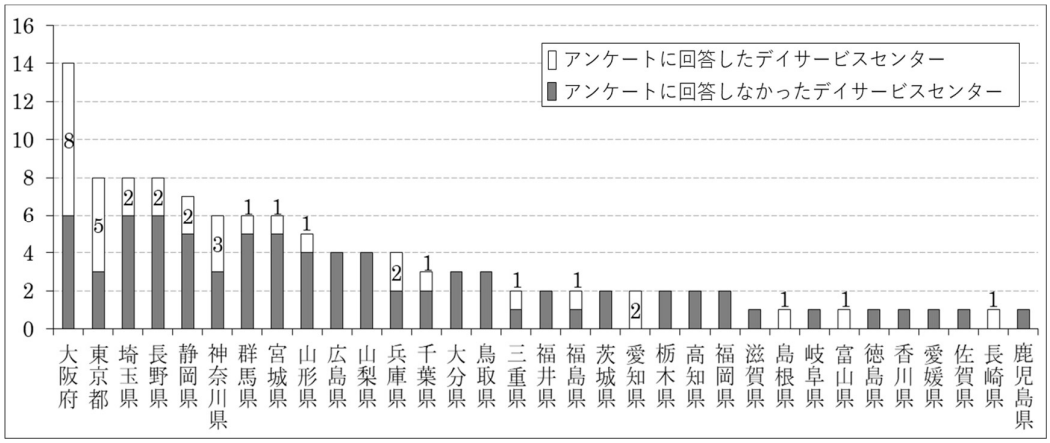



図 4.2　都道府県における中国語の対応が可能なデイへのアンケートの回収状況

## 4.2　施設の運営状況と在日中国人利用者の特性

### 4.2.1　施設の運営状況

有効回答の 35 ヶ所の中国語の対応が可能のデイの運営状況の全体像を表 4.2 に示す。施設運営の概要とスタッフの人数を図 4.3 に示す。半分以上の中国語の対応が可能なデイが 2010 年以降の 10 年間に設置された。運営主体は、営利法人の 26 ヶ所が最も多い。ほとんどの施設は併設機能がない独立型である。1 日の定員は 11～20 人のデイが最も多く 19 ヶ所で、定員が 10 人以内のデイが最も少なく 4 ヶ所である。17 ヶ所のデイは機能訓練のサービスを提供している。

スタッフの人数は、35 ヵ所のうち 21 ヶ所のデイは常勤スタッフが 5 人以内である。非常勤スタッフを含むと、スタッフの総人数が 5 人以内のデイは 6 ヶ所であり、15 ヶ所のデイは 10 人以上のスタッフがいる。また、中国語が話せるスタッフの人数は、常勤と非常勤の合計が 2 人以内のデイが最も多く 20 ヶ所である。

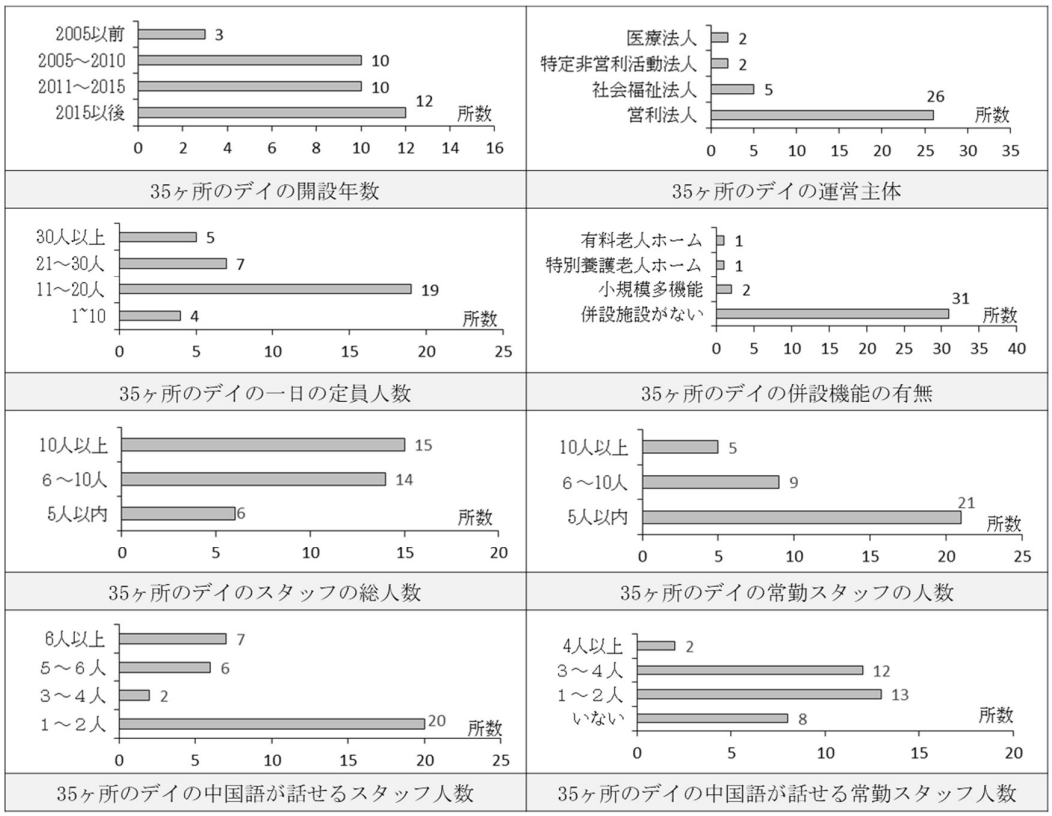



図 4.3 35 ヶ所のデイの運営の概要とスタッフの人数

表 4.2 35 ヶ所の中国語の対応が可能のデイの運営状況と中国帰国者・在日中国人利用者の特性の全体像

| 調査対象施設の記号 | 所在地 | 開設年月 | 運営主体 | 併設施設 | 一日の定員人数 | 登録人数 | 登録日本人利用者の人数 | 登録中国帰国利用者の人数 | 登録在日中国人利用者の人数 | 日本人利用者の平均年齢 | 中国帰国利用者の平均年齢 | 在日中国人利用者の平均年齢 | 日本人利用者の平均要介護度 | 中国帰国利用者の平均要介護度 | 在日中国人利用者の平均要介護度 | スタッフの総人数 | 常勤スタッフの人数 | 中国語が話せるスタッフの人数 | サビース言語 | 食事の種類 | 機能訓練 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| [1] | 大阪府 | 2014.01 | 営利法人 | 無し | 20 | 62 | 0 | 54 | 8 | 該当なし | 76 | 81 | 該当なし | 要介護 2.4 | 要介護 2.2 | 10 | 3 | 10 | 中国語 | 中国料理 | あり |
| [2] | 大阪府 | 2016.04 | 営利法人 | 無し | 20 | 41 | 0 | 35 | 6 | 該当なし | 76 | 80 | 該当なし | 要介護 1.9 | 要介護 1.5 | 6 | 3 | 6 | 中国語 | 中国料理と日本料理 | 無し |
| [3] | 大阪府 | 2014.06 | 営利法人 | 無し | 10 | 17 | 0 | 17 | 0 | 該当なし | 75 | 該当なし | 該当なし | 要介護 1.9 | 該当なし | 4 | 2 | 2 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | 無し |
| [4] | 大阪府 | 2017.08 | 営利法人 | 無し | 18 | 30 | 0 | 27 | 3 | 該当なし | 74 | 78 | 該当なし | 要介護 2.0 | 要介護 1.3 | 6 | 4 | 2 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | 無し |
| [5] | 大阪府 | 2014.08 | 営利法人 | 無し | 20 | 56 | 4 | 50 | 2 | 81 | 77 | 74 | 要介護2.4 | 要介護 2.2 | 要介護 1.5 | 10 | 4 | 9 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | 無し |
| [6] | 大阪府 | 2008.07 | 特別非営利活動法人 | 無し | 20 | 63 | 54 | 8 | 1 | 80 | 81 | 65 | 要介護2.7 | 要介護 3.0 | 要介護 2.0 | 15 | 4 | 2 | 日本語 | 日本料理 | 無し |
| [7] | 大阪府 | 2017.06 | 営利法人 | 無し | 23 | 35 | 0 | 34 | 1 | 該当なし | 78 | 81 | 該当なし | 要介護 2.8 | 要介護 1.0 | 9 | 3 | 7 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | 無し |
| [8] | 大阪府 | 2020.03 | 営利法人 | 無し | 15 | 19 | 2 | 17 | 0 | 79 | 75 | 該当なし | 要介護2.1 | 要介護 1.9 | 該当なし | 4 | 3 | 4 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | 無し |
| [9] | 東京都 | 2013.11 | 営利法人 | 無し | 20 | 68 | 65 | 2 | 1 | 80 | 70 | 79 | 要介護2.8 | 要介護 1.5 | 要介護 1.0 | 8 | 4 | 2 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [10] | 東京都 | 2015.08 | 営利法人 | 無し | 12 | 32 | 24 | 7 | 1 | 84 | 77 | 70 | 要介護3.3 | 要介護 1.6 | 要介護 4.0 | 7 | 3 | 1 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | あり |
| [11] | 東京都 | 2007.12 | 営利法人 | 無し | 30 | 160 | 153 | 4 | 3 | 82 | 78 | 77 | 要介護2.9 | 要介護 1.8 | 要支援1 | 21 | 6 | 2 | 中国語と日本語 | 日本料理 | 無し |
| [12] | 東京都 | 2017.12 | 営利法人 | 無し | 18 | 45 | 0 | 40 | 5 | 該当なし | 78 | 70 | 該当なし | 要介護 2.8 | 要介護 1.3 | 8 | 4 | 8 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | あり |
| [13] | 東京都 | 2011.06 | 営利法人 | 無し | 12 | 20 | 0 | 17 | 3 | 該当なし | 83 | 86 | 該当なし | 要介護 2.7 | 要介護 2.0 | 10 | 2 | 6 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | あり |
| [14] | 神奈川県 | 2014.08 | 営利法人 | 無し | 12 | 20 | 15 | 0 | 5 | 83 | 該当なし | 77 | 要介護3.0 | 該当なし | 要介護 2.6 | 7 | 3 | 3 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | あり |
| [15] | 神奈川県 | 2013.04 | 営利法人 | 無し | 10 | 25 | 2 | 15 | 8 | 78 | 76 | 80 | 要介護1.8 | 要介護 2.2 | 要介護 2.1 | 4 | 4 | 4 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | 無し |
| [16] | 神奈川県 | 1993.07 | 社会福祉法人 | 無し | 30 | 134 | 134 | 0 | 0 | 85 | 該当なし | 該当なし | 要介護2.8 | 該当なし | 該当なし | 12 | 5 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [17] | 兵庫県 | 2006.01 | 医療法人 | 小規模多機能 | 20 | 60 | 59 | 5 | 0 | 79 | 83 | 該当なし | 要介護2.6 | 要介護 2.1 | 該当なし | 12 | 7 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [18] | 兵庫県 | 2019.03 | 営利法人 | 無し | 20 | 18 | 0 | 18 | 0 | 該当なし | 73 | 該当なし | 該当なし | 要介護 1.7 | 該当なし | 6 | 4 | 6 | 中国語と日本語 | 中国料理 | あり |
| [19] | 埼玉県 | 2010.06 | 営利法人 | 無し | 30 | 120 | 117 | 0 | 3 | 81 | 該当なし | 72 | 要介護1.9 | 該当なし | 要介護 0.3 | 6 | 5 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [20] | 埼玉県 | 2018.07 | 営利法人 | 無し | 10 | 31 | 3 | 21 | 7 | 83 | 76 | 79 | 要介護2.3 | 要介護 2.1 | 要介護 1.4 | 7 | 3 | 7 | 中国語と日本語 | 中国料理と日本料理 | あり |
| [21] | 愛知県 | 2015.01 | 営利法人 | 無し | 18 | 22 | 0 | 15 | 7 | 該当なし | 80 | 80 | 該当なし | 要介護 2.2 | 要介護 2.4 | 9 | 4 | 6 | 中国語と日本語 | 中国料理 | あり |
| [22] | 愛知県 | 2007.11 | 営利法人 | 小規模多機能 | 25 | 29 | 28 | 1 | 0 | 84 | 82 | 該当なし | 要介護2.9 | 要介護 2.0 | 該当なし | 12 | 5 | 2 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [23] | 静岡県 | 2016.07 | 営利法人 | 無し | 10 | 24 | 22 | 0 | 2 | 79 | 該当なし | 78 | 要介護1.6 |  | 要介護 1.5 | 5 | 2 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [24] | 静岡県 | 1996.04 | 社会福祉法人 | 無し | 30 | 70 | 68 | 0 | 2 | 82 | 該当なし | 75 | 要介護1.7 |  | 要介護 1.0 | 22 | 6 | 2 | 中国語と日本語 | 日本料理 | 無し |
| [25] | 長野県 | 2015.07 | 特別非営利活動法人 | 無し | 12 | 15 | 9 | 6 | 0 | 86 | 80 | 該当なし | 要介護3.0 | 要介護 1.5 | 該当なし | 4 | 2 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | 無し |
| [26] | 長野県 | 2007.01 | 医療法人 | 無し | 40 | 110 | 118 | 0 | 2 | 88 | 77 | 該当なし | 要介護2.9 | 要介護 1.5 | 該当なし | 14 | 6 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [27] | 福島県 | 2005.12 | 営利法人 | 小規模多機能 | 26 | 66 | 65 | 1 | 0 | 85 | 81 | 該当なし | 要介護3.1 | 要介護 2.0 | 該当なし | 22 | 15 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [28] | 山梨県 | 2008.09 | 営利法人 | 無し | 18 | 21 | 19 | 3 | 0 | 87 | 79 | 該当なし | 要介護2.7 | 要介護 1.0 | 該当なし | 10 | 2 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | 無し |
| [29] | 島根県 | 2004.02 | 営利法人 | 無し | 35 | 87 | 87 | 0 | 0 | 85 | 該当なし | 該当なし | 要介護2.2 | 該当なし | 該当なし | 16 | 8 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [30] | 群馬県 | 2014.09 | 営利法人 | 有料老人ホーム | 30 | 38 | 38 | 0 | 0 | 81 | 該当なし | 該当なし | 要介護2.9 | 該当なし | 該当なし | 22 | 11 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [31] | 千葉県 | 2009.12 | 社会福祉法人 | 無し | 30 | 61 | 61 | 0 | 0 | 87 | 該当なし | 該当なし | 要介護2.7 | 該当なし | 該当なし | 9 | 5 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [32] | 三重県 | 1993.05 | 社会福祉法人 | 特別養護老人ホーム | 30 | 130 | 130 | 0 | 0 | 84 | 該当なし | 該当なし | 要介護2.4 | 該当なし | 該当なし | 7 | 4 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [33] | 長崎県 | 2009.03 | 社会福祉法人 | 無し | 35 | 90 | 89 | 1 | 0 | 85 | 80 | 該当なし | 要介護2.1 | 要介護 1.0 | 該当なし | 14 | 5 | 2 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [34] | 富山県 | 2005.09 | 営利法人 | 無し | 15 | 42 | 42 | 0 | 0 | 83 | 該当なし | 該当なし | 要介護1.5 | 該当なし | 該当なし | 11 | 4 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |
| [35] | 宮城県 | 2009.09 | 社会福祉法人 | 無し | 18 | 40 | 40 | 0 | 0 | 87 | 該当なし | 該当なし | 要介護2.4 | 該当なし | 該当なし | 8 | 3 | 1 | 中国語と日本語 | 日本料理 | あり |

### 4.2.2　高齢中国帰国者・在日中国人利用者の属性

図 4.3 に示すように、35 ヶ所のデイのうち中国帰国利用者または在日中国人利用者がいるデイは 26 ヶ所である。そのうち、4 ヶ所には中国帰国利用者のみがいて、7 ヶ所には中国帰国利用者と在日中国人利用者の両方がいる。それ以外の 15 ヶ所には中国帰国利用者または在日中国人利用者が日本人利用者と混在している（図 4.4）。

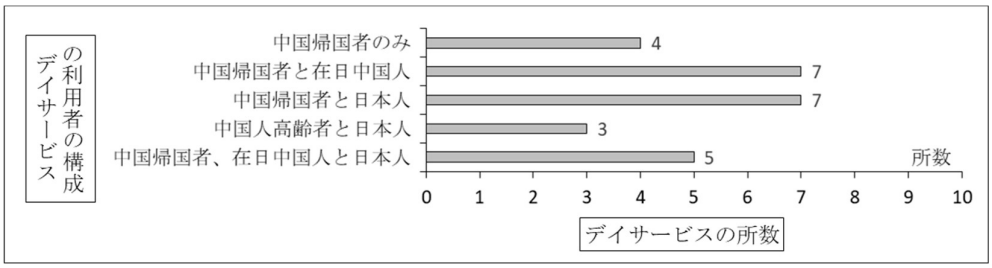



図 4.4 中国帰国利用者または在日中国人利用者がいる 26 ヶ所のデイの組み合わせ

#### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の人数、年齢と要介護度

26 ヶ所のデイの中国帰国利用者の人数は合計 365 人であり、在日中国人利用者は合計 61 人である。図 4.5 に示すように、利用者の人数規模について、26 ヶ所のうち、13 ヶ所は中国帰国利用者と在日中国人利用者の人数が 10 人以内であり、この 13 ヶ所は主に日本人向けのデイであり、中国帰国利用者と在日中国人利用者が少ない。中国帰国利用者と在日中国人利用者の人数が 20～30 人のデイは 3 ヶ所で、30 人以上のデイは 5 ヶ所、この 8 ヶ所のデイは主に中国帰国利用者向けのデイであり、日本人利用者がいないまたは少ない。26 ヶ所のデイのうち 15 ヵ所は在日中国人利用者がいる。この 15 ヵ所の在日中国人利用者人数は 10 人以下である。中国帰国利用者がいるデイは 23 ヵ所である。そのうち、中国帰国利用者の人数が 1～10 人のデイは 10 ヶ所、11～20 人のデイは 6 ヶ所、20～30 人のデイは 2 ヶ所、30 人以上のデイは 5 ヶ所である。つまり、現在中国語の対応が可能なデイには在日中国人が少なく、中国帰国利用者が比較的多い。

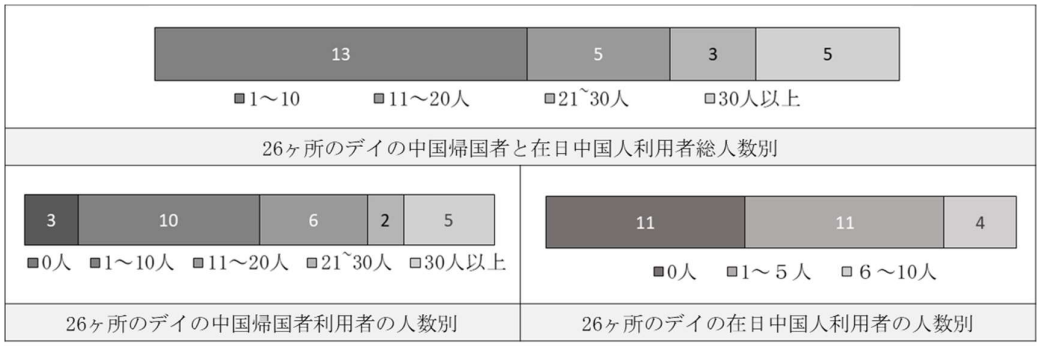



図 4.5 26 ヶ所のデイの中国帰国利用者と在日中国人利用者の人数別

利用者の年齢と要介護度を図 4.6 に示すように、26 ヶ所のデイの中国帰国利用者と在日中国人利用者は主に 76～80 歳である。利用者の平均要介護度について、全てのデイの 365 人の中国帰国利用者の平均要介護度は 2.2 であり、61 人の在日中国人の要介護度は 1.8 である。1 ヶ所当たりの平均要介護度を見ると、中国帰国利用者の平均要介護度が 1～1.9 のデイは 11 ヶ所、2～2.9 のデイは 9 ヶ所である。在日中国人利用者の平均要介護度が 1～1.9 のデイは 6 ヶ所、2～2.9 のデイは 7 ヶ所である。

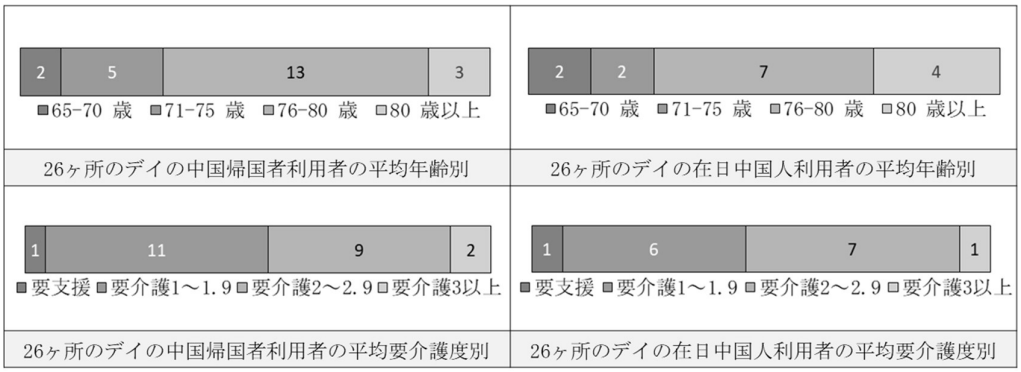



図 4.6　26 ヶ所のデイの中国帰国利用者と在日中国人利用者の年齢と要介護度

### 利用者の一日の主な行動

食事、おやつ、体操などの全員参加の行動を除き、利用者の一日の主な行動について図 4.7 に示す、中国帰国利用者と在日中国人利用者の行動の種類の上位 5 位は中国語テレビ観賞、麻雀、カラオケ、中国将棋、トランプゲームであり、それ以外に日本語テレビ観賞、卓球などの行動をする人も多い。日本人利用者の行動の種類の上位 5 位は日本語テレビ観賞、脳トレ、カラオケ、手芸、読書であり、それ以外、トランプゲーム、将棋する人も多い。日本人利用者と比べ、麻雀、中国将棋、卓球をすることが多いことが中国帰国利用者と在日中国人利用者の行動の特徴と考えられる。

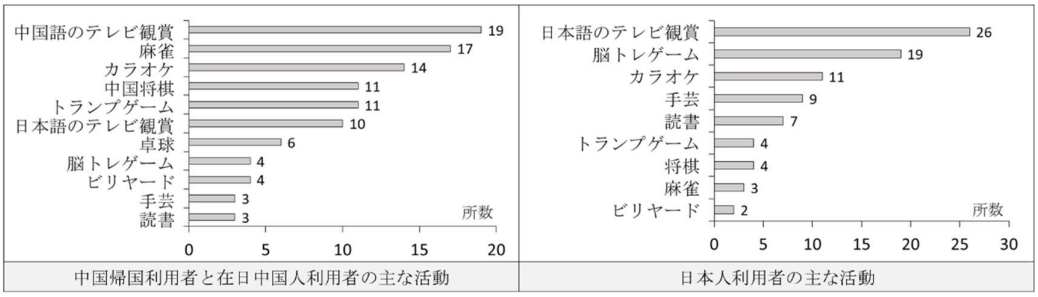



図 4.7　中国帰国者と在日中国人利用者の主な活動と日本人利用者の主な活動

## 4.3　施設建物の状況

### 4.3.1　建物の概要

35 ヶ所の中国語の対応が可能のデイの建築形態の全体像を表 4.3 に示す。建築形態の概要は図 4.8 に示す。35 ヶ所の中国語の対応が可能のデイのうち、22 ヶ所のデイは民家、オフィス、ホテル

表 4.3　35 ヶ所の中国語の対応が可能のデイの建築形態の全体像

| 調査対象施設の記号 | 面積（㎡） | 建築形態 | 改修前の形態 | 建物の総層数 | 施設の使用階数 | 建築構造 | 静養室とデイルームのパーティション種類 | 戸外空間 | キッチンの種類 | 浴槽種類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| [1] | 125 | 改修 | オフィス | 8 | 1 | 鉄骨コンクリート造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [2] | 130 | 改修 | 教育施設 | 3 | 1 | 鉄骨造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [3] | 121.5 | 改修 | ホテル | 14 | 2 | 鉄骨コンクリート造 | カーテンで | あり | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [4] | 107 | 改修 | 民家 | 1 | 1 | 木造 | カーテンで | あり | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [5] | 110 | 改修 | オフィス | 4 | 1 | 鉄骨コンクリート造 | カーテンで | 無し | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [6] | 98 | 改修 | 民家 | 8 | 2 | 鉄骨コンクリート造 | 引き戸で | 無し | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [7] | 120 | 改修 | 民家 | 11 | 1 | 鉄骨コンクリート造 | カーテンで | 無し | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [8] | 110 | 改修 | オフィス | 10 | 7 | 鉄骨コンクリート造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [9] | 137 | 改修 | オフィス | 8 | 1 | 鉄骨造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [10] | 90 | 改修 | 民家 | 2 | 1 | 木造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [11] | 108 | 改修 | 不明 | 5 | 1 | 鉄骨コンクリート造 | 引き戸で | 無し | オープンキッチン | 一般浴槽、個別浴槽 |
| [12] | 65 | 増築 | 該当なし | 2 | 1 | 木造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [13] | 64 | 改修 | 民家 | 5 | 1 | 鉄骨造 | カーテンで | あり | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [14] | 72 | 改修 | クリニック | 4 | 1 | 鉄骨コンクリート造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [15] | 80 | 改修 | オフィス | 12 | 1 | 鉄骨コンクリート造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [16] | 174 | 改修 | ホテル | 6 | 2 | 鉄骨コンクリート造 | 引き戸で | 無し | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [17] | 720 | 新築 | 該当なし | 3 | 1 | 鉄骨造 | 壁で | あり | オープンキッチン | 一般浴槽、機械浴槽 |
| [18] | 110 | 改修 | 商店 | 3 | 1 | 鉄骨造 | カーテンで | あり | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [19] | 168 | 不明 | 該当なし | 3 | 1 | 不明 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [20] | 33 | 改修 | 民家 | 6 | 1 | 鉄骨造 | カーテンで | 無し | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [21] | 60 | 改修 | クリニック | 2 | 1 | 木造 | 壁で | Yes | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [22] | 600 | 不明 | 該当なし | 2 | 1 | 鉄骨造 | 引き戸で | 無し | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [23] | 98 | 改修 | 民家 | 2 | 1 | 木造 | カーテンで | あり | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [24] | 650 | 増築 | 該当なし | 1 | 1 | 鉄骨造 | 引き戸で | あり | クローズドキッチン | 一般浴槽、個別浴槽、機械浴槽 |
| [25] | 95 | 改修 | 倉庫 | 2 | 1 | 鉄骨造 | 引き戸で | あり | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [26] | 195 | 新築 | 該当なし | 3 | 1 | 鉄骨造 | カーテンで | あり | オープンキッチン | 一般浴槽 |
| [27] | 450 | 増築 | 該当なし | 2 | 1 | 鉄骨造 | 引き戸で | あり | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [28] | 95 | 改修 | 教育施設 | 2 | 1 | 鉄骨造 | 引き戸で | あり | クローズドキッチン | 一般浴槽、機械浴槽 |
| [29] | 147 | 新築 | 該当なし | 1 | 1 | 木造 | 壁で | あり | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [30] | 942 | 新築 | 該当なし | 1 | 1 | 木造 | 壁で | あり | クローズドキッチン | 一般浴槽、機械浴槽 |
| [31] | 152 | 改修 | 不明 | 3 | 1 | 鉄骨造 | カーテンで | あり | オープンキッチン | 一般浴槽、個別浴槽、機械浴槽 |
| [32] | 390 | 不明 | 該当なし | 2 | 1 | 不明 | 引き戸で | あり | クローズドキッチン | 大浴槽 |
| [33] | 333 | 新築 | 該当なし | 8 | 4 | 鉄骨コンクリート造 | 引き戸で | 無し | クローズドキッチン | 個別浴槽 |
| [34] | 110 | 新築 | 該当なし | 1 | 1 | 木造 | カーテンで | あり | オープンキッチン | 個別浴槽 |
| [35] | 205 | 新築 | 該当なし | 1 | 1 | 木造 | カーテンで | あり | クローズドキッチン | 一般浴槽、機械浴槽 |

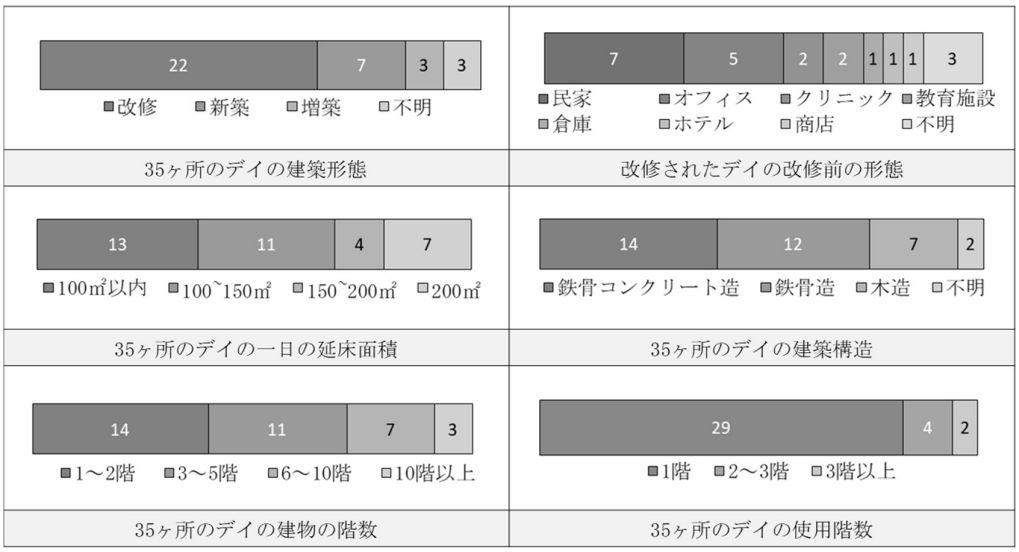



図 4.8 35 ヶ所のデイの建築形態

などの別用途から転用された。延床面積は、100 ㎡以下のデイが最も多く、13 ヶ所である。使用階数は 1 階のみの低層階が最も多く、29 ヶ所である。

建築空間は、18 ヶ所は戸外空間（テラス、中庭、前庭、菜園など）がなく、利用者が主に室内で活動している。キッチンの種類は、食堂と一体のオープンキッチンが 20 ヶ所、壁で周囲と仕切っているクローズドキッチンは 15 ヶ所である。また、静養室とデイルーム・食堂といった共用空間のパーティションの種類は図 4.9 に示す。24 ヶ所のデイはカーテンで仕切り、7 ヶ所が引き戸で仕切り、4 ヶ所が壁で仕切る。

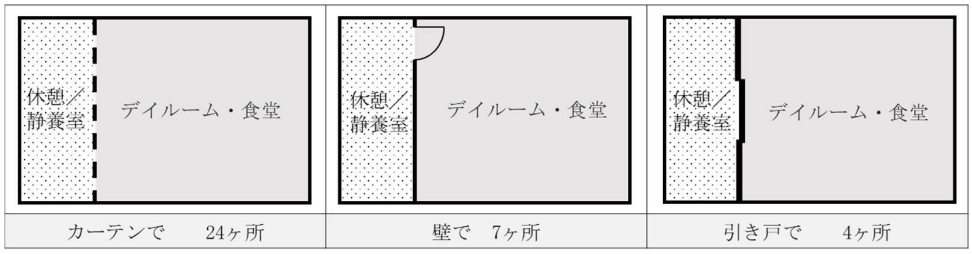



図 4.9 35 ヶ所のデイの静養室とデイルーム・食堂といった公共空間のパーティション

### 4.3.2　現在施設建物の使い方の不便な点

現在建物の使い方で困っていることを図 4.10 に示す。「日中過ごす場所が 1 室しかない、静かな環境が確保できない」が最も多く、次いで、「周囲に公園等の施設が少ない」「立地の交通が不便」「空間が狭い／収納場所が足りない」「クローズドキッチンではない」の順である。「日中過ごす場所が 1 室しかない、静かな環境が確保できない」について、アンケート調査によって、多くの中国語の対応が可能なデイは休憩／静養空間とデイルーム・食堂などの共用空間を 1 室で共有していて、高齢者が休憩する時安静な環境が確保できないということである。「クローズドキッチンではない」について、中国料理を作っている時油煙または香辛料の匂いが強く、換気性能が不足な場合、油煙と香辛料の匂いが部屋に充満するためである。

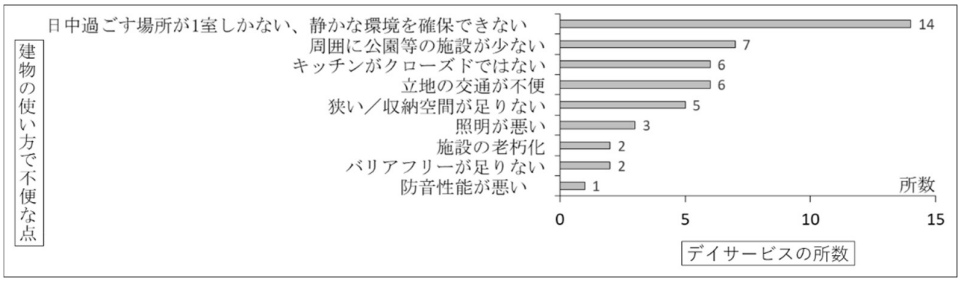



図 4.10　現在施設建物の使い方で不便な点

## 4.4　在日中国人高齢者を受け入れるきっかけ

「施設の所在地区（町）には在日中国人又は中国帰国者が比較的多いですか？」というアンケート質問について、「はい」と回答するデイが 11 ヶ所であり、「いいえ」が 10 ヶ所、「分からない」が最も多く 14 ヶ所である。

中国帰国者または在日中国人を受け入れるきっかけを図 4.11 に示す。最多の理由は「以前から中国帰国者の支援をしてきて、高齢化の問題が出てきた」であり、次いで、「困っている高齢者が身近にいた」「以前から中国人の支援をしてきて高齢化の問題が出てきた」「中国人または中国語が話せるスタッフがいるため」「市役所残留孤児支援課と共に支援活動をしてきた」の順である。

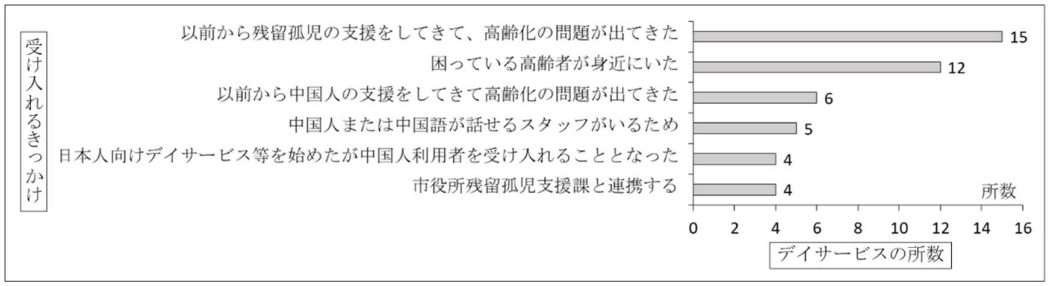



図 4.11　中国帰国者または在日中国人を受け入れるきっかけ

中国帰国者または在日中国人利用者が施設を選んだ理由を図 4.12 に示す。上位の三つの理由は「ケアマネジャーの情報」、「利用者の口コミ」、「地域包括支援センターの情報」であり、次いでに「市役所の宣伝」、「日本人向けの施設に行っていたが、馴染まなかった」「知人を介しての紹介」であり、最も少ない理由は「ウェブサイトや新聞からの情報」、「相談員が中国人」である。

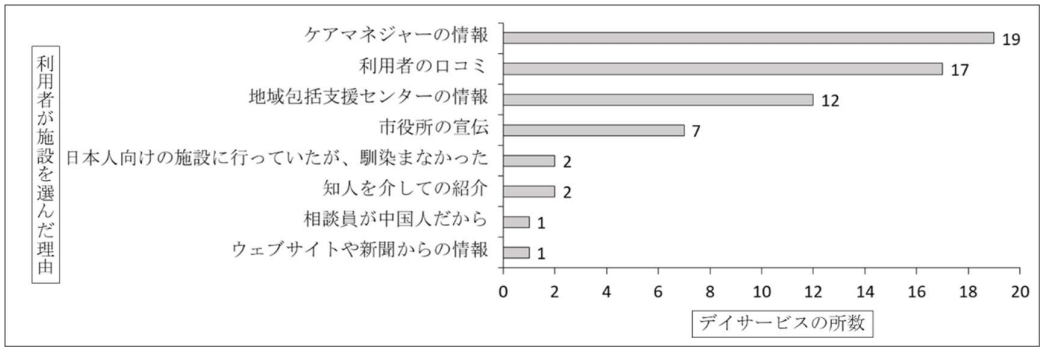



図 4.12　中国帰国者または在日中国人利用者が施設を選んだ理由

## 4.5　異文化介護における問題

言語の問題、生活習慣の違い、文化背景と価値観の違いについて高齢中国帰国利用者・在日中国人高齢者にとって介護で困っていることをアンケートで尋ねた。

### 言語の問題

言語の問題について、多くの高齢中国帰国利用者または在日中国人利用者は日本語が話せない、日本語と中国語両方が読めない、さらに、中国の方言しか話せない高齢者もいる（図 4.13）。中国には方言が多く、中国帰国利用者と在日中国人利用者が中国のさまざまな地域から来日し、彼らの多くは標準中国語が話せなく、方言のみ話せることが影響していると考えられる。

また、人は高齢になるにつれて、後で習得した第二言語を忘れてしまい、母語を使うようになる傾向があることが多くの実例で明らかになっている。この現象は「母語回帰」または「母語がえり」と言われ、特に認知症になった人に多くみられている[注 13)]。その可能性も考えられる。

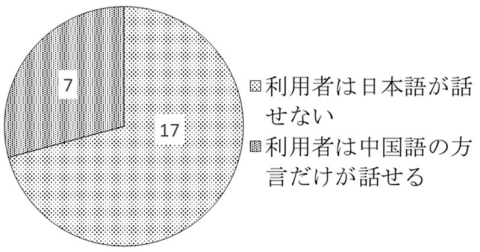



図 4.13　異文化介護の言語の問題

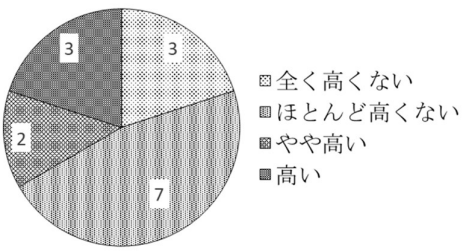



図 4.14　中国帰国利用者・在日中国人利用者は日本人利用者との交流頻度

すべてのデイは日本語と中国語両方の言語のサービスを提供している。しかし、多くのデイには中国語が話せるスタッフが少ないため、彼らが在勤しない時、他の日本人スタッフと中国帰国利用者または在日中国人利用者は交流できなくなり、困ることが生じる。また、日本人利用者と中国帰国利用者または在日中国人利用者が混在しているデイの半分以上は中国帰国利用者または在日中国人利用者が日本人利用者との交流頻度が高くない（図 4.14）。施設内で出会う日本人利用者とのコミュニケーションが上手く図れないため、利用者の輪のなかに入れずに、介護施設のなかでかえって孤立してしまい、サービスの利用を拒否してしまうケースも生じている[注 14)]。

### 生活習慣の違い

生活習慣の違いについて図 4.15 に示すように「食事の問題」が最も重要な点であり、それ以外は「喋り方の違い」「入浴習慣の違い」である。「食事の問題」は、人にとって家庭の味、暮らしている地域の味、民族の味など、生まれ育ったところの気候や環境によって、食習慣や味覚はそれぞれ異なる。特に、味覚に関してはその傾向が強く見られている。王らの研究により、多くの中国帰国高齢

利用者は淡白で薄味の日本料理よりもしっかりと味付けされた中華料理のほうが美味しく、そのような料理を希望する[92]。調査によると、ほとんどのデイは日本料理と中国料理をともに提供している。「喋り方の違い」について、高齢者中国帰国利用者と在日中国人利用者は声が高いと指摘されている。

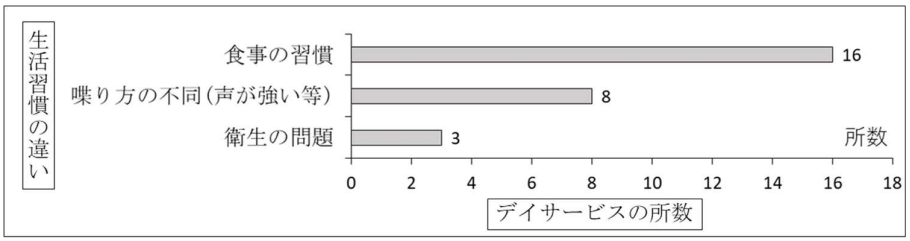



図 4.15　生活習慣の違いの介護問題

**文化背景と価値観の違い**

文化背景と価値観の違いを図 4.16 に示す。「サービスへの理解の違い」が最も多く、次いで、「プライバシーへの態度の違い」「娯楽文化の違い」「祝日の違い」「人間関係文化の違い」「お風呂文化の違い」の順である。

「サービスへの理解の違い」について、異なる文化背景で育った人々は、介護サービスへの理解が異なっている[注 15]。例えば、日本人利用者と比べ、中国帰国利用者または在日中国人利用者は介護サービスを超えるサービスを求める傾向がある。「プライバシーへの態度の違い」は、中国帰国利用者または在日中国人利用者が日本人利用者と比べ、プライバシーの重視程度が低い[注 16]。娯楽文化の違いは、中国帰国利用者または在日中国人利用者にとって「普通」であっても日本人利用者にとってそれは全くの異文化である[注 17]。例えば麻雀は中国帰国利用者または在日中国人利用者にとってなじみがあるが、日本人利用者にはなじみがないと考えられる。

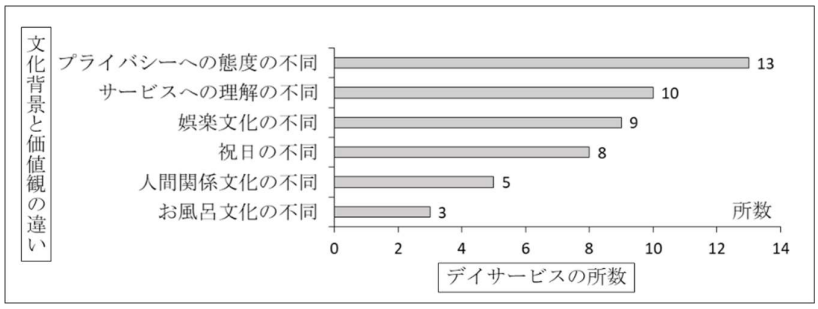



図 4.16 文化背景と価値観の違いの介護問題

## 4.6　まとめ

本章では、郵送アンケートによって日本における中国語の対応が可能なデイサービスの運営と利用の実態の全国的な傾向を把握した。以下、本章で得られたまとめを示す。

(1) 35 ヶ所の中国語の対応が可能なデイの多くは 2010 年以後に設置され、運営主体が営利法人である。ほとんどの施設は併設機能がない独立型で、日定員が 11～20 人のデイが最多である。また、半分以上のデイは常勤と非常勤スタッフのうち中国語が話せるスタッフの人数が 2 人以内である。

(2) 35 ヶ所のデイの 26 ヶ所には、中国帰国利用者と在日中国人利用者がいる。そのうち、11 ヶ所には中国帰国利用者と在日中国人利用者のみがいる。すべてのデイは在日中国人利用者が少なく、中国帰国利用者が比較的多い。また、中国帰国利用者と在日中国人利用者は主に 76～80 歳の高齢者である。平均要介護度は中国帰国利用者利用者が 2.2 であり、在日中国人が 1.8 である。

(3) 35 ヶ所のデイの 22 ヶ所は民家、オフィス、ホテルなどの別用途から転用された。延床面積が 100 ㎡以下のデイが最も多く、13 ヶ所である。24 ヶ所が静養室とデイルーム・食堂といった共用空間をカーテンで仕切りをしている。現在施設建物の使い方で不便な点について、「日中過ごす場所が 1 室しかない、静かな環境が確保できない」が最も多く、次いで、「周囲に公園等の施設が少ない」「立地の交通が不便」「空間が狭い／収納場所が足りない」「クローズドキッチンではない」の順である。

(4) 異文化介護の問題について、言語問題（日本語が話せないまたは中国の方言しか話せない）、生活習慣の違い（「食事の問題」が最重要、それ以外に「喋り方の違い」「入浴習慣の違い」）、文化背景と価値観の違い（「サービスへの理解の違い」「プライバシーへの態度の違い」「娯楽文化の違い」）は高齢中国帰国利用者と在日中国人高齢者にとって介護で困っている問題である。

## 注記

注 11）この一覧に掲載している情報は事業所名・サービスの種類・住所・電話番号・中国語を話すスタッフの勤務形態のみである。

注 12）有効回収率が 30.4％で、あまり高くない。その主な理由は 115 ヶ所のデイの多くが中国帰国利用者または在日中国人利用者がまだ利用していないため、経営者が答える傾向が高くないと考えられ

注 13）高齢に伴う記憶力の低下によって、後から習得した第二言語による意思疎通が困難になり、認知症などによる「母語がえり」によって母語しか話せなくなることもある[93]。

注 14）行動観察のデイでのインタービュー調査により、3 人の中国帰国利用者は日本人向けの施設に行っていたが、言語のため、馴染まなくて退所した。

注 15）協力が得られた４事業所へのヒアリングにより、スタッフと一緒に遊ぶ要求、自分が好きな食品の特配の要求といった「サービスへの理解の違い」に関するコメントがあった。

注 16）協力が得られた 4 事業所へのヒアリングにより、一部の中国帰国利用者または在日中国人利用者が他人の収入や家庭関係や病気などのプライバシーに対する意識が日本人と異なるといった「プライバシーへの態度の違い」に関するコメントがあった。

注 17）協力が得られた 4 事業所へのヒアリングにより、麻雀は中国帰国利用者または在日中国人利用者にとってなじみがあるが、日本人利用者にはなじみがないという「娯楽文化の違い」に関するコメントがあった。

## 引用・参考文献

92）王榮，渋谷努：中国帰国者の介護問題から見た在住外国人高齢者への介護支援の現状と課題，中京大学学術情報，社会科学研究，38(2)，pp.2-18，2018.03

93）Sophia A. Tipping and Mary Whiteside: Language Reversion among People with Dementia from Culturally and Linguistically Diverse Backgrounds: The Family Experience. Australian Social Work, Vol.68 No.2, pp.184-197, 2014.10

# 第 5 章　中国語の対応が可能なデイサービスの利用者の滞在状態と空間利用の特性

## 5.1　本章の目的と調査の方法

### 本章の目的

前章では日本において中国語の対応が可能なデイサービスへのアンケート調査によりその運営と利用の実態の全国的な傾向を把握し、その全体像を明らかにした。本章はアンケート調査では明らかにできない利用者の滞在様態、施設の空間利用特性について、中国語の対応が可能なデイサービスと日本人高齢者向けのデイサービスでの行動観察調査を通して比較考察し、中国語の対応が可能なデイサービスに関する建築計画に関する知見を得る。

### 調査の方法

本章では行動観察調査を通して、中国語の対応が可能なデイサービス（以下、デイ）と日本人高齢者向けのデイの利用者の滞在状態と空間利用特性の違いを把握する。調査対象施設は大阪府にある 2 つのデイ（中国語の対応が可能なデイが 1 ヶ所、日本人高齢者向けのデイが 1 ヶ所である。2 ヶ所のデイにおける行動観察調査を大阪府の新型コロナウィルス感染症緊急事態宣言が解除された 2021 年 3 月と 7 月に行った。本調査前に予備調査を行い、DS－A の本調査を 3 月 4 日と 8 日に実施し、DS－B の本調査を 7 月 19 日と 21 日に実施した[注18)]。観察において、利用者の施設滞在中、その滞在場所、行動、利用者同士･スタッフと利用者の交流様態及び周囲の状況を記録紙に 1 分毎に記録し、利用者の 2 分間以上持続する行動に注目した。また利用者の行動を解釈するために本人及びスタッフへのインタビュー調査を適宜行った。調査概要を表 5.1 に示す。

表 5.1　行動観察調査の概要

| | | |
|---|---|---|
| 行動観察調査 | 目的 | 中国帰国者・中国人向けのデイと日本人向けのデイでの具体的な一日の生活の流れ、活動の種類、活動グループの規模、滞在場所、利用者同士･スタッフと利用者の交流様態の違いを把握する。 |
| | 調査対象 | 大阪府にある2つのデイサービス（中国帰国者・中国人向けのデイが1ヶ所、日本人高齢者向けのデイが1ヶ所） |
| | 調査項目 | 調査日利用者の属性、一日の生活の流れ、活動の種類、利用者の滞在場所、利用者同士･スタッフと利用者の交流様態、空間利用のパータン。 |
| | 調査方法 | 通所事業時間において、1分毎に記録及び写真撮影を行う。 |
| | 調査時間 | 調査の時間：2021年3月と2021年7月。 |

## 5.2　調査対象施設の概要

本研究の調査対象施設は、規模、定員と利用者の平均年齢や平均要介護度が比較的類似している大阪市内の中国帰国者・在日中国人向けのデイ１ヶ所（以下、DS－A）と日本人向けのデイ１ヶ所（以下、DS－B）である[注19)]。DS－A と DS－B の基本概要を表 5.2 に示す。

表 5.2　調査対象施設 DS－A と DS－B の基本概要

| 調査対象施設の記号 | | DS-A | DS-B |
|---|---|---|---|
| 開設年数 | | 2014.08 | 2012.12 |
| 一週間の営業日 | | 日曜日～金曜日 | 日曜日～土曜日 |
| 併設施設の有無 | | なし | 小規模多機能と有料老人ホーム |
| 一日の定員 | | 20人 | 20人 |
| 利用者の人数 | | 45（男性25人，女性20人） | 33（男性9人,女性24人） |
| 利用者の属性 | | 高齢中国帰国者と在日中国人高齢者 | 日本人 |
| 利用者の年齢別 | 65歳以下 | 2.22%（1人） | 3.03%（1人） |
| | 65-74歳 | 6.67%（3人） | 3.03%（1人） |
| | 75-84歳 | 84.44%（38人） | 51.52%（17人） |
| | 85-94歳 | 6.67%（3人） | 36.36%（12人） |
| | 94歳以上 | 0 | 6.06%（2人） |
| 平均要介護度 | | 要介護2.3 | 要介護2.4 |
| スタッフ人数 | | 9人(常勤4人、非常勤5人) | 18(常勤人、非常勤15人) |
| サービス言語 | | 中国語・日本語 | 日本語 |
| 利用者の居住エリア | | 大阪府全域 | 近くの2つの区 |
| 送迎サービス | | ある | ある |
| 建物形態 | | オーフィスから改修 | 新築 |
| 建築構造 | | 鉄骨コンクリート | 鉄骨コンクリート |
| 使用階数 | | 1階 | 1階 |
| 延床面積 | | 115㎡ | 137㎡ |
| パーテイション種類 | | カーテンで | カーテンで |
| キッチンの種類 | | オープンキッチン | クローズドキッチン |

表 5.2 に示すように、2 つのデイは１日の定員が同じ 20 人であり、調査時の利用登録者は DS－A が 45 人、DS-B が 33 人である。利用者の年齢層は、DS－A と DS－B が同じく 75～84 歳の利用者が最も多い。平均要介護度は、DS－A が 2.3、DS－B が 2.4 である。利用者の居住エリアについて、DS－A の利用者は大阪府の全域であり、DS－B の利用者は大阪市の立地する区と隣の区である[注20)]。また、DS－A は併設施設がなく、DS－B は小規模多機能型居宅介護を併設している。

施設の建築形態について、DS－A はオフィスから転用され、DS－B は新築である。建築面積は DS－A が 115 ㎡で、DS－AB が 137 ㎡である。両施設の平面配置図を図 5.2 に示し、室内の様子を写真 5.1 を示す。静養室とデイルーム・食堂といった共有空間のパーティションは、DS－A と DS-B は同じく、カーテンである。DS－A は浴室が二つあり、DS-B は機械浴槽、盤浴と足湯の浴室を含め四つある。テーブルについて、DS-A は麻雀専用テーブル１点、8 人掛けテーブル１点、4 人掛けテーブル２点、3 人掛けテーブル１点を設置しており、利用者の固定席がない。DS-B は 4 人掛けテーブル 6 点を設置しており、利用者には各自の固定席が設置されている。

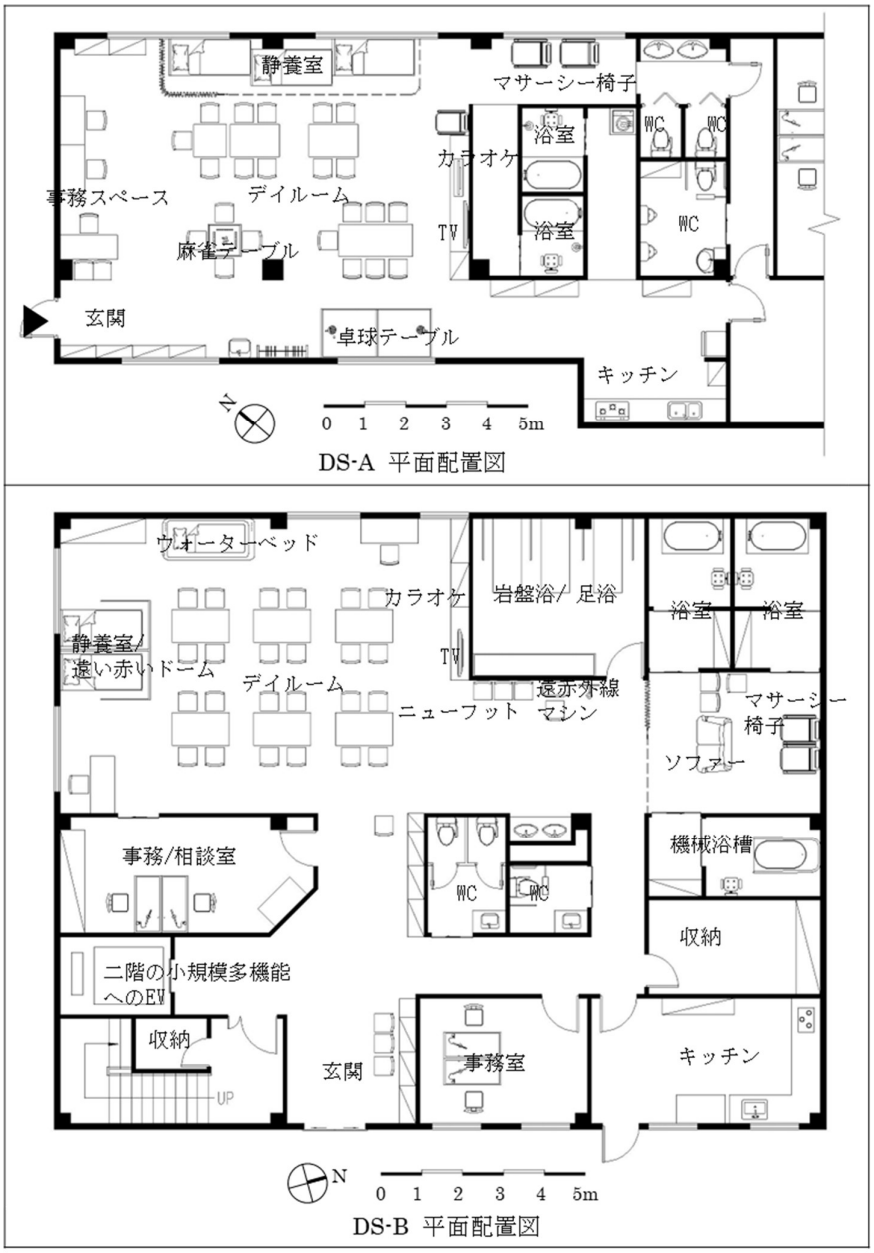



図 5.2　DS-A と DS-B の平面配置図

写真 5.1　DS-A と DS-B の室内の様子

## 5.3　調査日両施設の概要と一日のプログラム

### 5.3.1　調査日両施設の概要

調査日の両施設のスタッフ数と利用者数・属性を表 5.3 に示す。2 日の調査日の DS-A の利用者は 21 人であり、そのうち、2 人が中国帰国者一世、14 人が中国帰国者二世、5 人が在日中国人高齢者である。ほとんどの利用者は日本語が話せなく、スタッフと中国語で交流している。DS-A の 21 人の利用者の平均年齢は 77.5 歳で、平均要介護度は 2.25 である。日の調査日の DS-B の利用者は 19 人であり、全員が日本人である。DS-B の 19 人の利用者の平均年齢は 82.1 歳で、平均要介護度は 2.44 である。また、DS-A はスタッフのうち男性スタッフがいて、DS-B は男性スタッフがいない。

表 5.3　調査日の両施設の概要

| 調査対象施設 | DS-A | | | | DS-B | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 調査日 | 2021.03.04 | | 2021.03.08 | | 2021.07.19 | 2021.07.21 |
| 現地調査の時間 | 9:00～15:30 | | 9:00～15:30 | | 9:00～16:00 | 9:00～16:00 |
| 調査日利用者の人数 | 12人<br>(女:5人、男:7人) | | 9人<br>(女:4人、男:5人) | | 10人<br>(女:7人、男:3人) | 9人<br>(女人:6、男:3人) |
| 利用者の属性 | 在日中国人高齢者 | 高齢中国帰国者 | 在日中国人高齢者 | 高齢中国帰国者 | 日本人高齢者 | 日本人高齢者 |
| | 3人 | 9人 | 2人 | 7人 | | |
| 調査日利用者の平均年齢 | 78.1歳 | | 76.8歳 | | 79.5歳 | 85.1歳 |
| 調査日利用者の平均要介護度 | 2.2 | | 2.3 | | 2.2 | 2.7 |
| 調査日利スタッフの人数 | 5人<br>(女:2人、男:3人) | | 4人<br>(女:2人、男:2人) | | 5人<br>(女:5人、男:0人) | 4人<br>(女:4人、男:0人) |
| 調査日のサービス言語 | 中国語 | | 中国語 | | 日本語 | 日本語 |

### 5.3.2　調査日両施設の一日のプログラム

調査日の両施設の一日のプログラムを図 5.3 に示す。DS-A の運営時間は 9:00～15:30 であり、DS-B は 9:00～16:00 である。DS-A では、11:40 頃まで自由時間と利用者の入浴や健康検査の時間であり、11:40 頃からの利用者の 15 分間のビデオ体操の後に昼食の時間である。午後は 20 分程度のおやつの時間を除き自由時間である。DS-B では、10 時からの 20 分間のビデオ体操、昼食前の腕体操及び入浴時間と健康検査の時間を除き、自由時間である。午後はおやつの時間とおやつの時間の前後に行う首や口の体操を除き自由時間である。

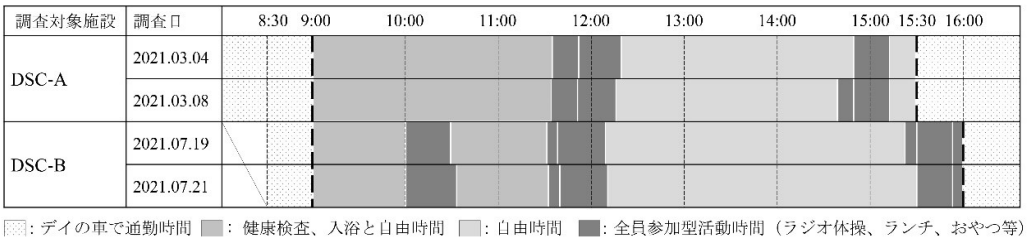



図 5.3　査日の両施設の一日のプログラム

## 5.4　調査日 2 つの施設における利用者の行動

### 5.4.1　利用者または利用者同士間の行動

2 分間以上続いた行動のうち、トイレ及び体操、食事、おやつなどの全員参加の行動を除き、両施設の利用者の行動の種類に注目する。各行動の総人数と総時間数を図 5.4～図 5.7 に示す。

調査日 2 日間において DS-A の利用者の総人数は 21 人であり、DS-B は 19 人である。行動の種類を見ると、DS-A と DS-B の行動の種類数はほぼ同じであるが、娯楽行動の種類が大きく異なっている。各施設でしか見られない行動に注目すると、DS-A の主な娯楽行動は中国語のテレビ観賞、麻雀、麻雀の観戦、トランプゲーム、カラオケ、中国の将棋、卓球の行動であり、DS-B は主に日本語のテレビ観賞、機能訓練の一環としての手芸及び絵描き（マイカレンダーの作成）、計算、間違い探しなどの脳トレである。また DS-B はウオーターベット、遠赤外線ドーム、マッサージなどの多種類の筋力低下予防のマシンが設置されており、これらのマシンを使用する利用者もいる。各行動の総人数をみると、DS-A において上位３位の行動は中国語のテレビ観賞、麻雀、入浴である。DS-B の上位３位の行動は日本語のテレビ観賞、入浴、絵描きである。

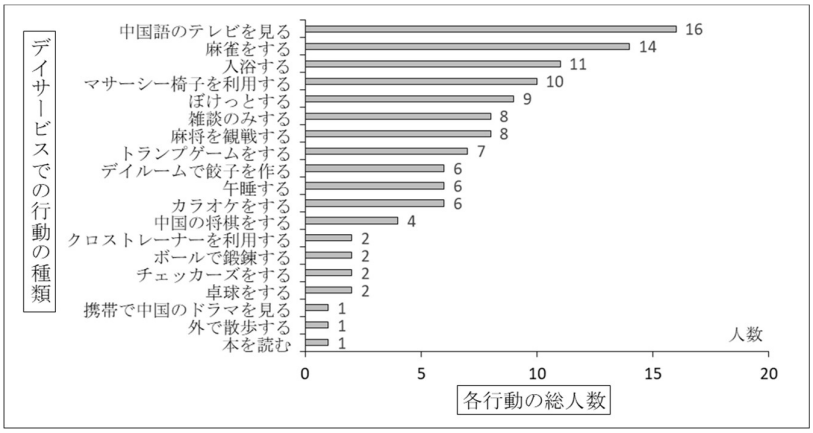



図 5.4　2 日間の DS-A での利用者の各行動の総人数

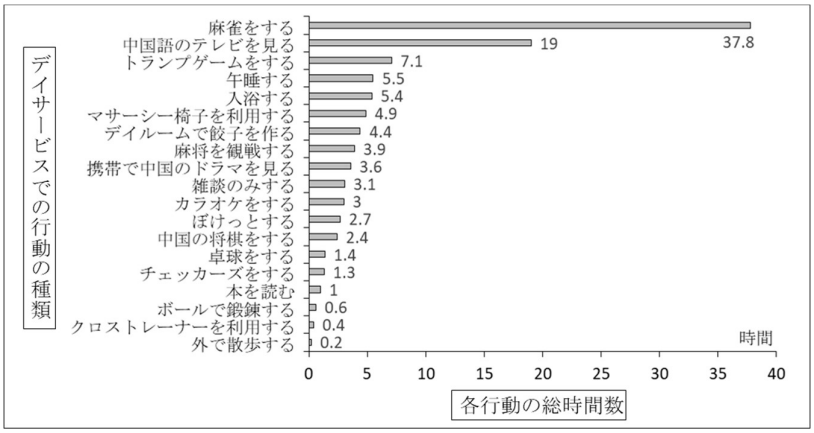



図 5.5　2 日間の DS-A での利用者の各行動の総時間

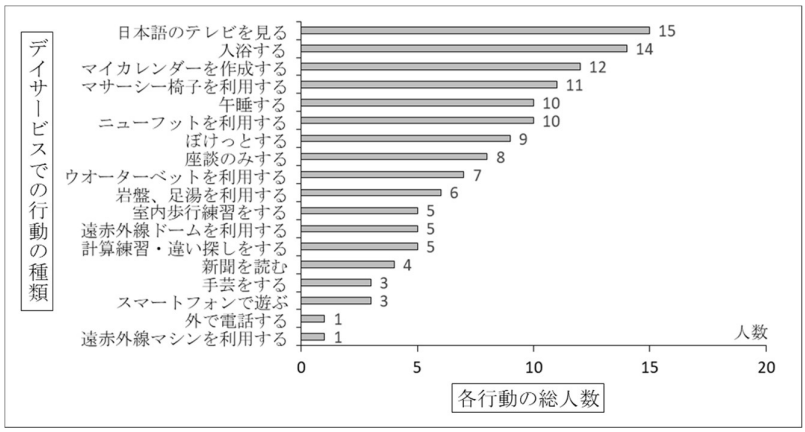



図 5.6　2 日間の DS-B での利用者の各行動の総人数

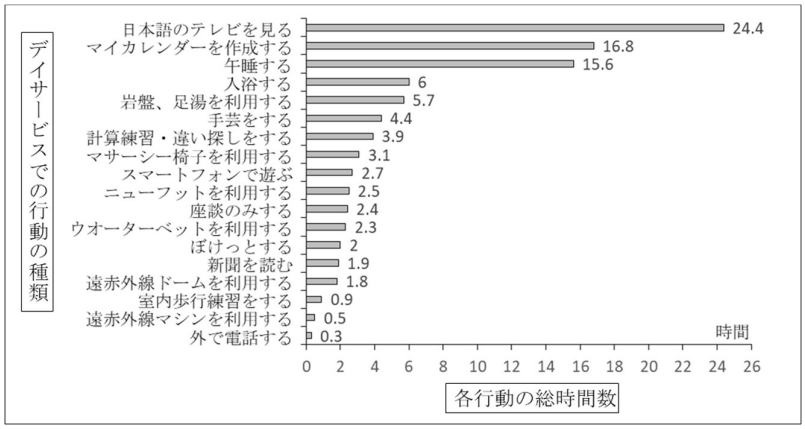



図 5.7　2 日間の DS-B での利用者の各行動の総時間

各行動の総時間数をみると、DS-A の上位 3 位の行動は麻雀、中国のテレビ観賞、トランプゲームである。DS-B の上位３位の行動は日本語のテレビ観賞、絵描き、午睡である。DS-A において総人数が最大の行動が中国語のテレビ観賞であるが、総時間数最長の行動が麻雀であり、麻雀の総時間数はテレビ観賞のほぼ 2 倍の 37.8 時間である。DS-B においては総人数が最大の行動と総時間数最長の行動が同じく、日本語のテレビ観賞である。

### 5.4.2　利用者とスタッフ間の行動

両施設の利用者とスタッフ間の行動の種類を表 5.4 に示す。利用者とスタッフ間の行動は介護行動、娯楽行動、リハビリ行動、その他一般的な行動の四種類に分類した。介護行動は、両施設でほぼ共通し、入浴の介助、トイレの介助、午睡の介助などの行動である。リハビリ行動は、体操の模倣、各種筋力低下予防のマシンの使用、脳トレゲームの結果のチェックの行動である。その他一般的行動は、会話、お茶注ぎなどの行動以外にも、DS-A の２日目にデイルームでスタッフと利用者が一緒に餃子を作っていた。

表 5.4　両施設の利用者とスタッフ間の行動の種類

| 対象施設 | 行動の分類 | 種類数 | 行動の内容 |
|---|---|---|---|
| DS-A | 介助行動 | 7 | 入浴の介助，トイレの介助、午睡の介助、薬の介助、送迎の介助室内移動の介助、健康管理の介助。 |
| | レクリエーション行動 | 7 | 中国語のテレビ視聴、 麻雀、 麻雀の指導、トランプゲーム、卓球、カラオケ、チェッカーズ。 |
| | リハビリ行動 | 1 | ラジオ体操の模倣 |
| | その他の行動 | 4 | 雑談、お茶注ぎ、餃子の作り、配膳/食後の片付け。 |
| DS-B | 介助行動 | 8 | 入浴の介助，トイレの介助、午睡の介助、薬の介助、送迎の介助室内移動の介助、健康管理の介助、歩行訓練の介助。 |
| | レクリエーション行動 | 1 | 日本語のテレビ視聴 |
| | リハビリ行動 | 3 | ラジオ体操の模倣、各種筋力低下予防のマシンの使用、脳トレの結果の研究のチェック。 |
| | その他の行動 | 3 | 雑談、お茶を注ぎ、配膳/食後の片付け。 |

利用者とスタッフの間の娯楽行動とリハビリ行動をみると、表 5.5 に示すように、DS-A と DS-B は大きく異なっている。娯楽行動の種類をみると、DS-A のスタッフは利用者と一緒に麻雀、卓球、カラオケ、トランプゲームと中国のチェッカーの 7 種類を行っている。それに対して、DS-B のスタッフは利用者とテレビ観賞以外に一緒に行う娯楽行動がない。継続時間の回数と総継続時間に注目すると、DS-A では２日間に利用者とスタッフ間の娯楽行動の総時間は 5.6 時間であり、DS-B は 0.5 時間である。例えば DS-A では、麻雀が 1 日目の 14 時前後の 30 分と、2 日目の 14 時前後の 18 分の 2 回継続して行われ、継続時間は 48 分（0.8 時間）であった。また DS-A の利用者とスタッフの間の娯楽行動を行うきっかけは、利用者が一緒に遊ぶようスタッフを誘うことである。例えば、麻雀は４人で行うので人数が足りない時に、スタッフが誘われることや、1 人のスタッフは歌が上手なのでカラオケの時に彼が誘われて利用者と歌うことがあった。

リハビリ行動について、DS-B は体操の模倣、各種筋力低下予防のマシンの使用、脳トレゲームの結果のチェックの 3 種類があるが、DS-A は体操の模倣のみである。総継続時間は、DS-B は 2.5 時間であり、DS-A は 0.7 時間である。

表 5.5　両施設の利用者とスタッフの間の娯楽行動とリハビリ行動の時間別

| 行動の種類 | 対象施設 | 行動の内容 | 連続の回数 | 継続の総時間（時） | 総時間（時） |
|---|---|---|---|---|---|
| レクリエーション行動 | DS-A | 中国語のテレビ視聴 | 1 | 0.3 | 5.6 |
| | | 麻雀をすること | 2 | 0.8 | |
| | | 麻雀の指導 | 1 | 0.2 | |
| | | トランプゲームをすること | 2 | 2.0 | |
| | | 卓球をすること | 4 | 1.1 | |
| | | チェッカーズをすること | 2 | 1.0 | |
| | | カラオケをすること | 1 | 0.2 | |
| | DS-B | 日本語のテレビ視聴 | 2 | 0.5 | 0.5 |
| リハビリ行動 | DS-A | ラジオ体操の模倣 | 3 | 0.7 | 0.7 |
| | DS-B | ラジオ体操の模倣 | 7 | 1.3 | 2.5 |
| | | 各種筋力低下予防のマシンの使用 | 15 | 0.6 | |
| | | 脳トレの結果の研究のチェック | 7 | 0.6 | |

## 5.5　調査日利用者とスタッフの一日の生活展開の概要と空間利用特性

本節では、両施設での利用者とスタッフの一日の滞在場所、スタッフとの行動、グループなどを 1 分毎に抽出し、両施設の調査日の生活展開と空間利用特性を明らかにする。

### 5.5.1　調査日利用者の一日の生活展開の概要と空間利用特性

#### 利用者の一日の生活展開の概要

利用者と一日の生活展開および空間利用特性を図 5.8～5.11 に示す。図 5.8 と図 5.9 は施設 DS-A 調査各日の生活展開である。3 月 4 日（図 5.8）をみると、この日の利用者は 12 人で、平均年齢が 78.1 歳、平均要介護度が 2.2 である。利用者は 9 時前後送迎車で相次いで到着した。それから 11 時 36 分まで、健康チェックや入浴などの介護行動以外、利用者が自分で好きなところ

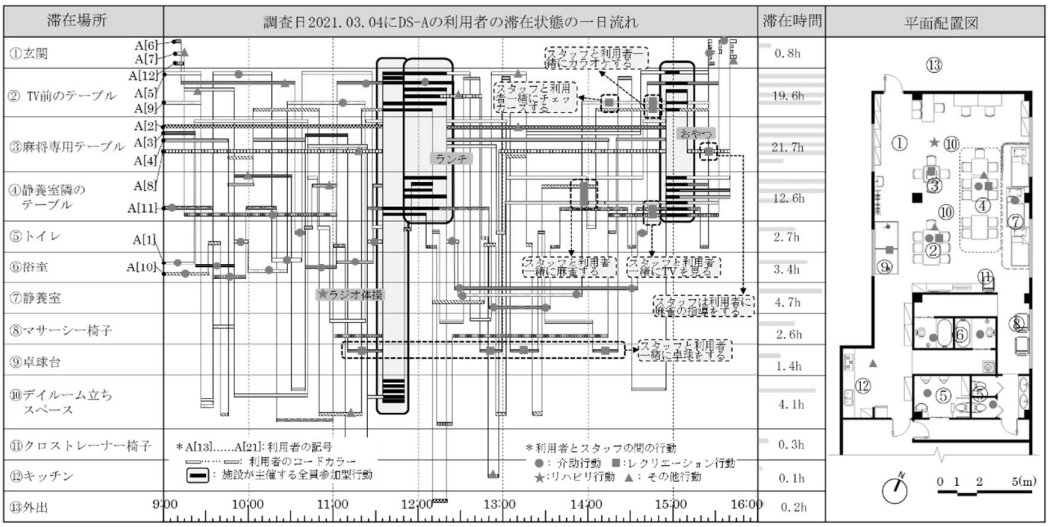



図 5.8　調査日 2021.03.04 の施設 DS-A の利用者の一日の流れと空間利用

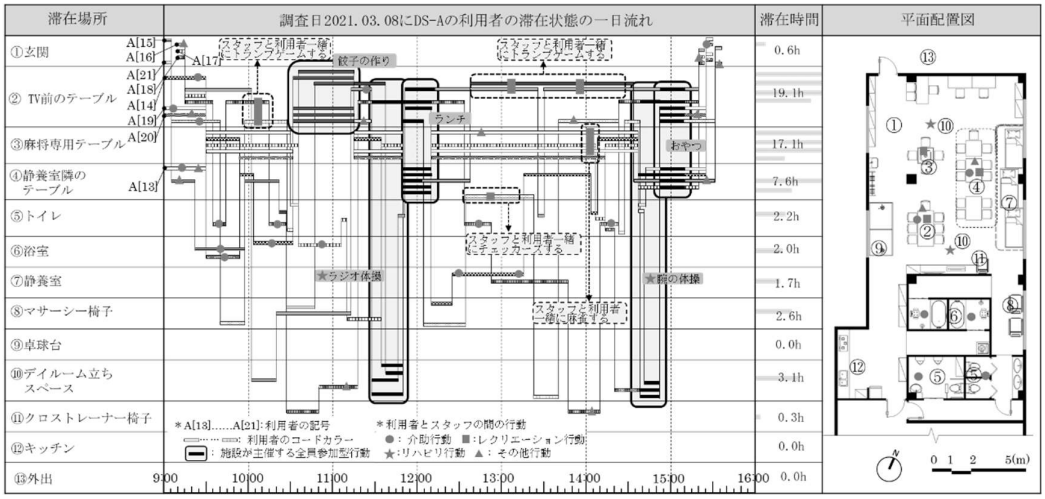



図 5.9　調査日 2021.03.08 の施設 DS-A の利用者の一日の流れと空間利用

でやりたい行動をしていた。例えば、10 時に利用者 2 人はテレビ前のテーブルでテレビ観賞し、4 人は麻雀専用テーブルで麻雀をしていた。また 3 人は静養室の隣のテーブルでひまわりの種を食べながら会話していた。昼食後から 14 時 53 分まで、利用者は午前と同じように過ごし、主に自分が好きな娯楽行動をしていた。例えば、14 時に利用者 1 人はテレビ前のテーブルでスタッフ A とチェッカーをし、4 人は麻雀専用テーブルで麻雀をしていた。また利用者 2 人はスタッフ B、C と静養室の隣のテーブルで麻雀していた。14 時 53 分からおやつの時間であった。その後利用者は主にテレビ前のテーブルと静養室の隣のテーブルで会話し、それぞれ帰宅した。2 日目の調査日（図 5.9）も同様の傾向が見られた。

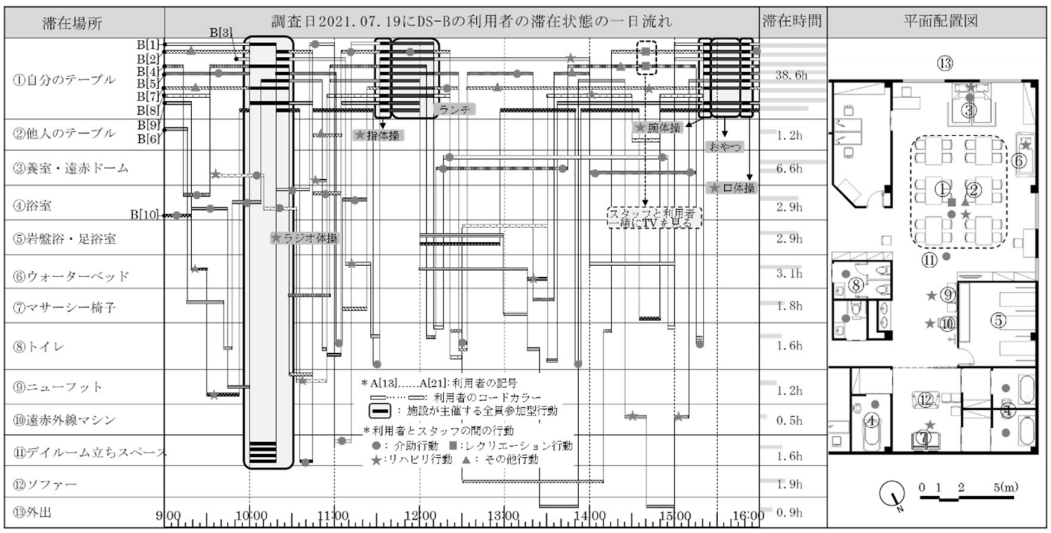



図 5.10　調査日 2021.07.1 の施設 DS-B の利用者の一日の流れと空間利用

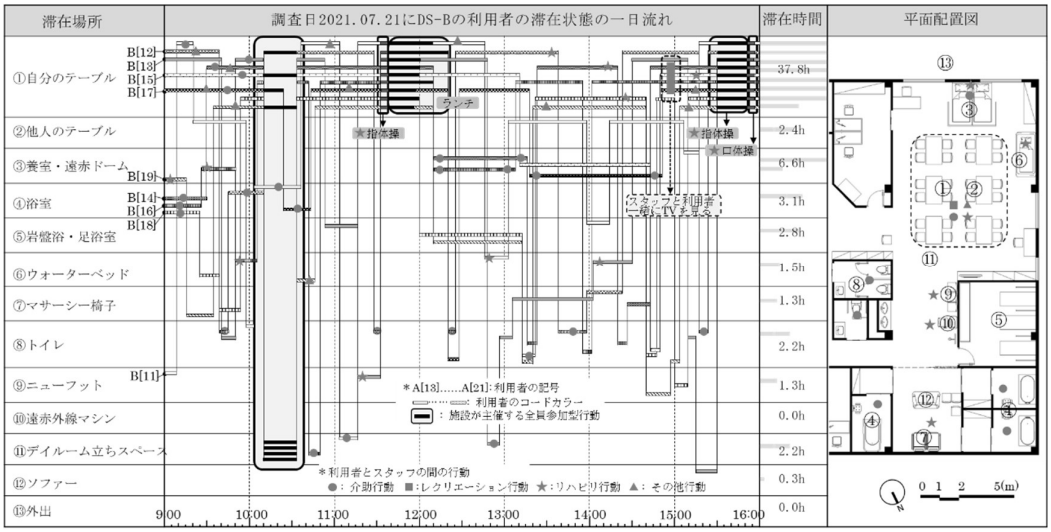



図 5.11　調査日 2021.07.21 の施設 DS-B の利用者の一日の流れと空間利用

図 5.10 と図 5.11 は施設 DS-B の調査各日の生活展開である。(図 5.10) をみると、この日の利用者は 10 人で、平均年齢が 79.5 歳、平均要介護度が 2.2 である。ほとんどの利用者は 9 時前送迎車で相次いで到着した。11 時 32 分まで健康チェックや入浴などの介護行動と全員でのラジオ体操を除き、利用者が自分の固定席で主に脳トレゲームまたは各種筋力低下予防のマシンを使用していた。例えば、11 時 10 分に利用者 3 人は自分のテーブルで各自絵描きをしていた、2 人は自分のテーブルで各自間違い探しをしていた。このように各自さまざまな行動をしていた。11 時 32 分から 12 時 10 分前後まで、利用者全員が自分のテーブルで指体操をして、昼食を食べていた。その後から 15 時 17 分まで利用者は午前と同じように過ごしていた。15 時 22 分からおやつの時間であった。おやつの前後で 5 分くらいの腕体操と口体操をしていた。口体操の後利用者はそれぞれ帰宅した。図 5.11 も同様の傾向が見られた。

### 空間利用の特性

中国帰国利用者または在日中国人利用者と日本人利用者の行動が大きく違っているために、デイルーム空間の使い方が大きく違っている。DS-A は行動に合わせて麻雀専用テーブル、卓球テーブル、8 人掛けと 4 人掛けなど何種類のテーブルが設置されている。4 人麻雀の行動は麻雀専用テーブルで行われ、5 人以上の団体行動は 8 人掛けのテーブルで行われる。また個人的な行動は主に 3 人または 4 人掛けのテーブルで行われる。DS-B の利用者の行動は主に個人的な行動であり、4 人掛けテーブル 6 点が設置され、多くの時間利用者が自分のテーブルに滞在する。

利用者とスタッフ間の行動の場所について図 5.8～図 5.11 に示す。両施設での介護活動の場所はほぼ同じく主に浴室とトイレ、休憩室である。娯楽行動の場所について、DS-A では娯楽活動の種類によって、複数の場所(麻雀専用テーブル、卓球テーブル、8 人掛けと 4 人掛けテーブルなど)が使い分けられている。DS-B では娯楽行動は日本語のテレビを見ることのみであり、テレビ前の 1 点のテーブルの場所である。リハビリ行動の場所について、DS-A では体操のみであり、デイルームの通路スペースの場所である。DS-B は体操以外にも各種類の筋力低下予防のマシン(ウオーターベット、遠赤外線ドーム、遠赤外線マシン、ホットパックなど)の使用と室内歩行練習があり、複数の場所が使い分けられている。

室内各場所の滞在時間により、両施設の空間利用の特性をまとめる。DS-A の利用者は麻雀専用テーブルでの滞在時間が最も長い、次いでテレビ前のテーブル、静養室隣のテーブル、静養室、立ちスペース、浴室、トイレの順である (図 5.8、図 5.9)。DS-B は自分のテーブル、静養室・遠赤ドーム、ウォーターベッド、岩盤浴・足湯室、浴室の順である (図 5.10、図 5.11)。両施設の空間利用の違いは両施設の利用者の娯楽行動・リハビリ行動及び施設の設備配置が異なるためと考えられる。DS-A では 21 人の利用者のうち 14 人が麻雀を行い、それ以外 7 人が麻雀を観戦し、そのため、麻雀専用テーブルでの滞在時間が最も長い。麻雀以外のテーブルでできる行動 (テレビ鑑賞、将棋、トランプゲームなど) はテレビ前のテーブルまたは静養室隣のテーブルで行っている。DS-B では利

用者は自分の固定席があり、さらに主な行動が他人との交流必要がない脳トレ行動（絵描き、計算練習、間違い探しなど）であるため、自分のテーブルでの滞在時間が一番長い。

### 5.5.2　調査日スタッフの一日の生活展開の概要と空間利用の特性

調査日の 2 つ施設のスタッフの行動と滞在状況の一日の流れを図 5.12 と図 5.13 に示す。2 つのデイの「介護行動」と「その他の行動」は、発生する時間や場所に見ると、ほぼ同じである。例えば、「入浴介助」や「健康管理介助」などの「介護行動」は朝の食卓で、「午睡眠介助」は昼食後の静養室で、「トイレ介助」はトイレで行われ。しかし、「レクリエーション行動」と「リハビリ行動」は、時間でも場所でも、大きく異なっている。 DS-A では、「レクリエーション行動」は調査日の一日中にランダムな時間で発生し、発生する場所が行動の種類によって異なる。たとえば、「麻雀」は麻雀専用テーブルで、「卓球」は卓球テーブルで、「テレビの視聴」はテレビの前のテーブルで行われている。また、「トランプゲーム」と「チェッカーズ」等の行動はテレビ前のテーブルや静養室隣のテーブルで行われている。しかし、DS-B のスタッフと利用者が一緒にするレクリエーション行動は「日本語のテレビ視聴」のみであり、通常的に午後のおやつの時間段に行われている。

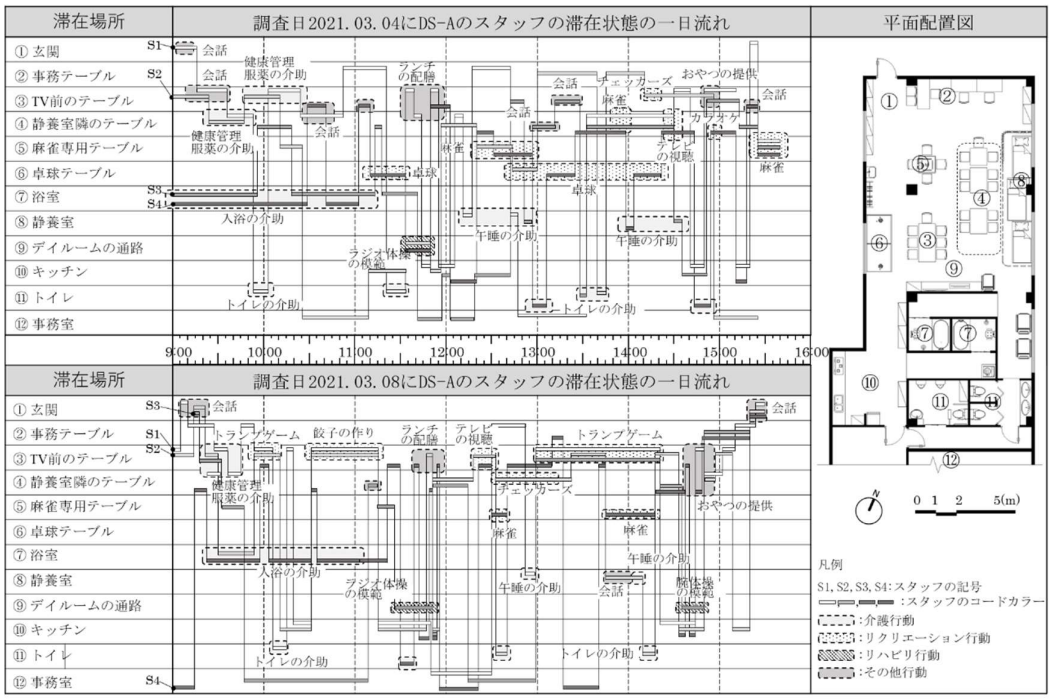



図 5.12　施設 DS-A 調査日にスタッフの一日の流れ

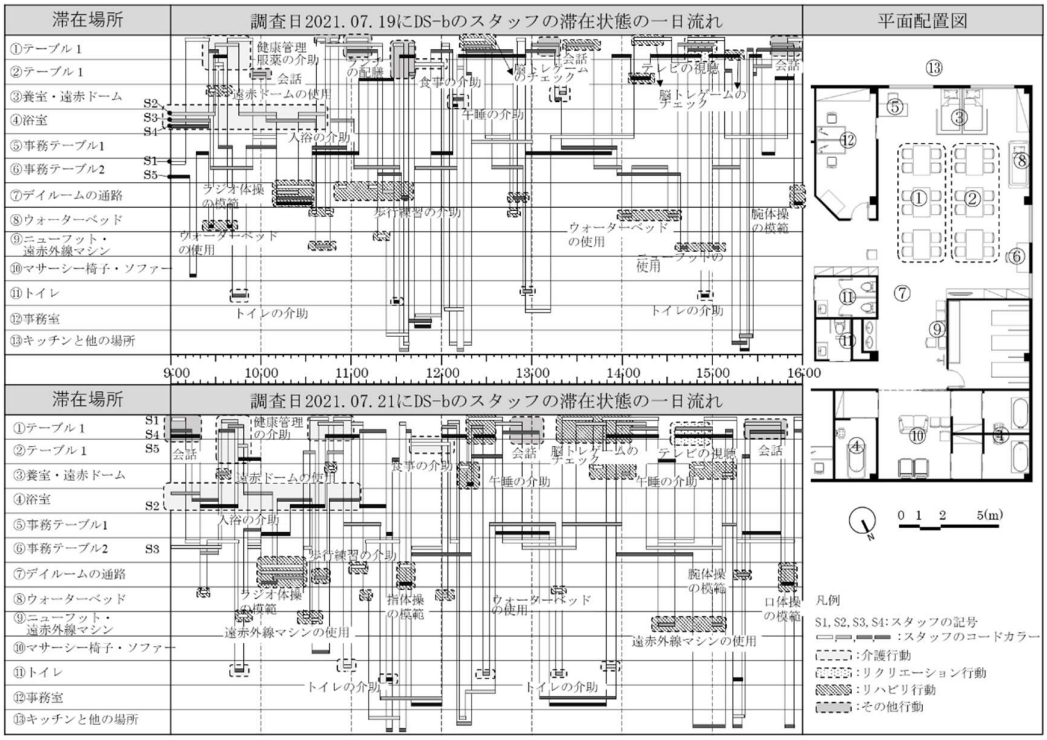



図 5.13　施設 DS-B 調査日にスタッフの一日の流れ

## 5.6　利用者の行動場面の種類・内容と自発的な集団行動の集まるパターン

### 5.6.1　利用者の行動場面の種類・内容

両施設での行動場面を生活場面（集団的・個別的）と介護場面に分類する。なお、利用者が 2 人以上の行動場面を集団的場面と定義する。両施設の行動場面の種類と内容を表 5.6 に示す。表 5.6 に示すように、DS-A の集団的行動場面の種類は DS-B より多いが、個別的場面の種類は DS-B より少ない。また、DS-A の集団的活動の多くは利用者の自発的な行動であり、DS-B の集団的行動の多くは施設がマネージメントする行動であった。

表 5.6　両施設の行動場面の種類と内容

| 対象施設 | 行動場面の種類 | 種類数 | 集団的行動場面の類型 | 種類数 | 行動場面の内容 |
|---|---|---|---|---|---|
| DS-A | 集団的行動場面 | 17 | 施設主催する行動 | 5 | ラジオ体操、ランチ、おやつ、腕体操、餃子の作り。 |
| | | | 自発的な行動 | 12 | 中国語のテレビの視聴、会話、トランプゲーム、麻雀、中国将棋、カラオケ、卓球、チェッカーズ、ボールのプレー。 |
| | 個人的行動場面 | 8 | 午睡、トイレ、ぼんやり、マサーシー、スマートフォンで中国のドラマを見ること、外で散歩、クロストレーナー、読書。 | | |
| | 介護行動場面 | 7 | 入浴の介助，トイレの介助、午睡の介助、薬の介助、送迎の介助、室内移動の介助、健康管理の介助。 | | |
| DS-B | 集団的行動場面 | 9 | 施設主催する行動 | 6 | ラジオ体操、ランチ、おやつ、腕体操、餃子の作り、腕体操、口体操。 |
| | | | 自発的な行動 | 3 | 会話、日本語のテレビの視聴、岩盤浴、足浴。 |
| | 個人的行動場面 | 14 | 午睡、トイレ、ぼんやり、1人で日本語のテレビの視聴、マサーシー、スマートフォン、外で電話、手作り、私のカレンダーの作成、脳トレ、遠い赤いドームの使用、ウォーターベッドの使用、遠赤外線マシンの使用、読書。 | | |
| | 介護行動場面 | 8 | 入浴の介助，トイレの介助、午睡の介助、薬の介助、送迎の介助、室内移動の介助、健康管理の介助、歩行訓練の介助。 | | |

図 5.14 と図 5.15 は両施設の利用者が自由時間に最も滞在場所が多い時間の滞在状態と最も滞在場所が少ない時間の滞在状態である。DS-A の最も滞在場所が多い時間は 1 日目の 13:10 であり、さまざまな場所で麻雀や卓球や将棋などの活動をしている。最も滞在場所が少ない時間は 2 日目の 09:00 であり、9 人の利用者の 7 人がテレビ前のテーブルで中国語のテレビを見ている。DS-B の最も滞在場所が多い時間は 1 日目の 13:10 であり、利用者が自分のテーブルやマサーシー椅子やウォーターベッドなどの場所でさまざまな行動をしている。最も滞在場所が少ない時間は 2 日目の 13:10 であり、ほぼ全員が自分のテーブルで脳トレをしている。図 5.14、図 5.15 に示すように、最も滞在場所が多い時間の滞在状態でも、最も滞在場所が少ない時間の滞在状態でも、DS-A では DS-B より集団的場面である。DS-A の麻雀やトランプゲームの主な娯楽行動・リハビリ行動は他人との交流が必要であるが、DS-B の主な娯楽行動・リハビリ行動は他人との交流が必要ではないことが要因と考えられる。

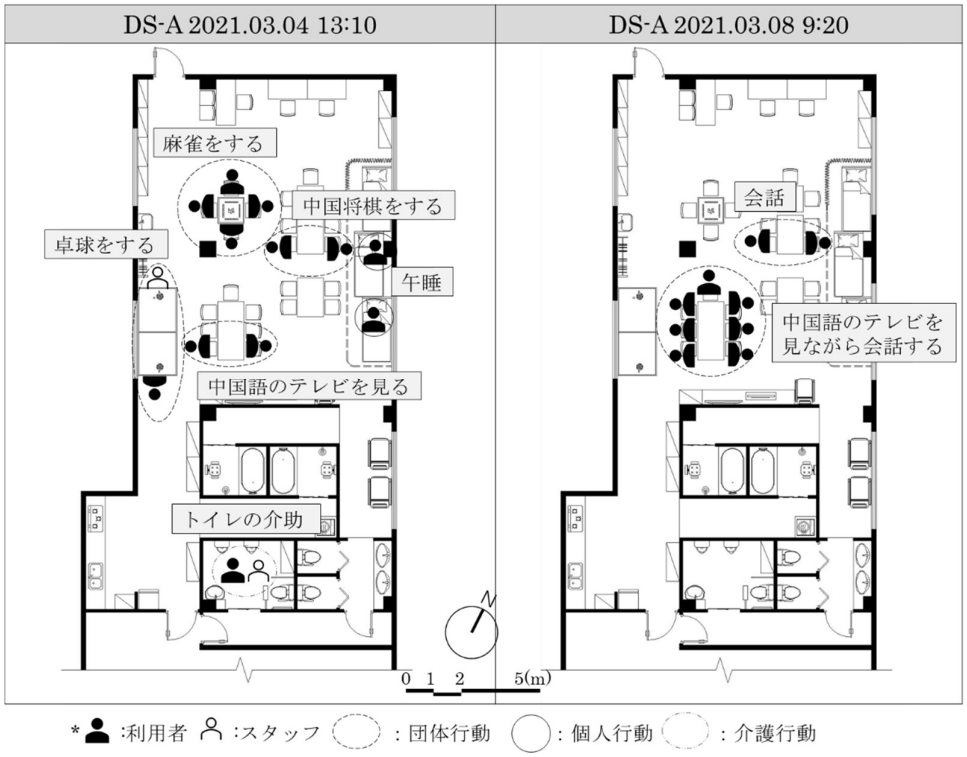



図 5.14　DS-A の利用者が自由時間に最も滞在場所が多いと少ない時間の滞在状態

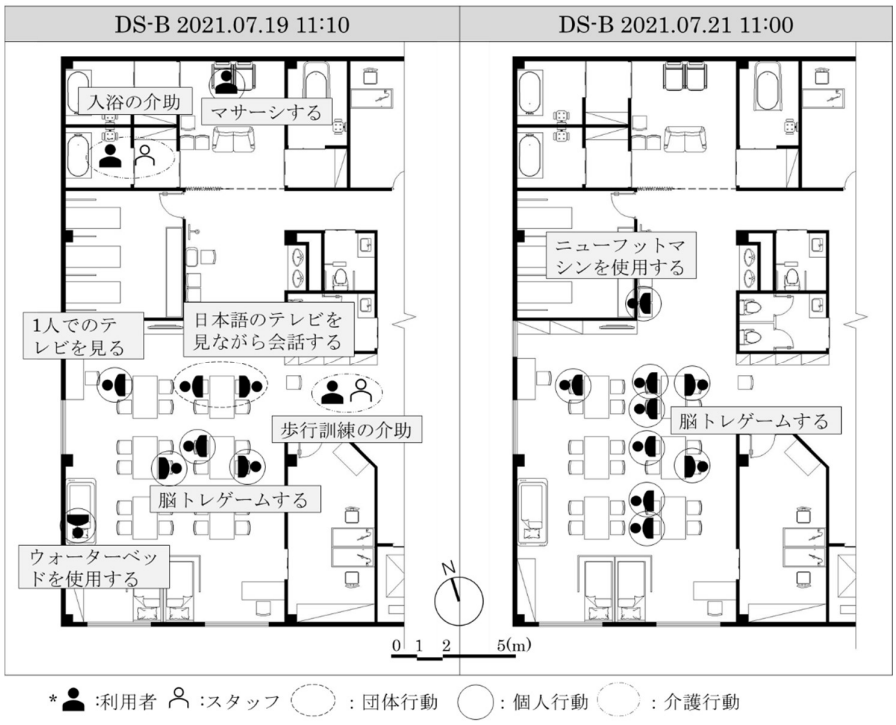



図 5.15　DS-B の利用者が自由時間に最も滞在場所が多いと少ない時間の滞在状態

### 5.6.2　自発的な集団行動とその集まるパターン

本研究では利用者の自発的な行動を個人行動（1 人の行動）と集団行動（2 人及び以上行動）に分類する。表 5.7 に示すように、集団行動は 3 種類に分かれている。2－3 人のは小規模で、4－5 人は中規模で、6 人及び以上は大規模である。DS-A の各種の自発的な集団行動は DS-B より多い。両施設の集団行動の集まるパターンは図 5.16 を示す。各種のパターンは行動の属性に基づいて表現している。たとえば、卓球は 2 人のスポーツで、麻雀は 4 人のゲームで、テレビの視聴や会話は人数制限のない活動である。また、DS-A の各種の自発的な集団行動は DS-B より多いので、DS-A の集団行動のパターンは DS-B よりも多様的に表現されている。

表 5.7　両施設の利用者の自発的な集団行動の種類と内容

| 対象施設 | 自発的な集団行動の種類 | 種類数 | 行動の内容 |
|---|---|---|---|
| DS-A | 小規模(2～3人) | 7 | 会話、ボールで運動トランプゲーム、中国将棋、卓球、チェッカーズ、中国語のテレビの視聴。 |
| | 中規模(4～5人) | 4 | 会話、麻雀(4人)、トランプゲーム (4人) 、中国語のテレビの視聴。 |
| | 大規模 (6人及び以上) | 2 | 餃子の作り、麻雀(4人がして、2人が見て、1人が指導している)。 |
| DS-B | 小規模(2～3人) | 3 | 会話、日本語のテレビの視聴、岩盤浴と足浴。 |
| | 中規模(4～5人) | 2 | 話、日本語のテレビの視聴。 |
| | 大規模 (6人及び以上) | 1 | 日本語のテレビの視聴。 |

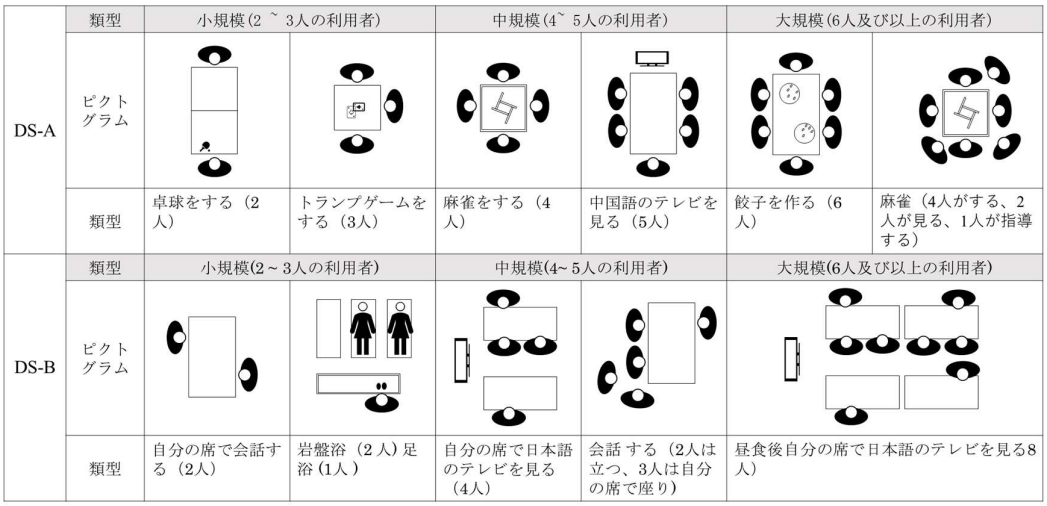



図 5.16　両施設の集団行動の集まるパターン

## 5.7　まとめ

本章は高齢中国帰国者と在日中国人高齢者向けのデイと日本人向けのデイの各 1 施設での行動観察調査によって一日の生活展開と滞在様態、空間利用特性を示した。以下、本稿で得られた結果を示す。

(1) 利用者または利用者同士間の行動について、中国帰国者と在日中国人向けのデイと日本人向けのデイでは、利用者の娯楽行動が大きく異なっている。中国帰国者と在日中国人向けのデイは日本人向けのデイに比べて娯楽活動の種類が多く総時間が長い。

(2) 利用者とスタッフ間の行動について、中国帰国者と在日中国人向けのデイではスタッフと利用者が一緒に麻雀、卓球、カラオケ、トランプゲームなどの娯楽行動を行うことが多くあり、日本人向けのデイではスタッフと利用者一緒に行う娯楽行動はほとんどなく、主にリハビリ行動である。

(3) 空間利用特性について、滞在場所の総時間数より、中国帰国者と在日中国人向けのデイは利用者が麻雀専用テーブルでの滞在時間が最も長い。日本人向けのデイは自分のテーブルでの滞在時間が最も長い。2 つのデイの空間利用特性の違いは両施設の利用者の娯楽行動及び設備配置が異なるためと考えられる。

(4) 中国帰国者と在日中国人向けのデイは主に利用者が自主的に集う集団的行動場面であるが、日本人向けのデイは主に個別的場面である。その要因は DS-A の主な娯楽行動・リハビリ行動が他人との交流が必要であるが、DS-B の主な娯楽行動・リハビリ行動が他人との交流が必要ではないと考えられる。

## 注記

注 18）各デイには一日のプログラムがあるが、日々同様の活動が行われていることを検証するため、各 2 日間の行動観察調査を行った。

注 19）DS-A はアンケートの回答があった施設であり、施設の面積、定員、空間構成が比較的類似している日本人向けのデイとして DS-B を選定した。

注 20）DS-A は介護保険制度の地域密着型サービスではないため、DS-A は府内全域から利用している。

# 第 6 章　総括及び研究の不足点と今後の課題

## 6.1　各章の要約

### 第 1 章

第 1 章では、本研究の背景について述べるとともに、関連する既往研究の整理と本研究の位置づけを示し、本研究の目的及び調査の方法を述べた。

### 第 2 章　高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の環境移行と住宅環境

第 2 章では、大阪府在住の 20 名の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者を対象として、アンケートとインタビューを行い、20 人の対象者の基本属性を把握し、彼らの環境移行の具体的なプロセスと来日後の移行の原因等を述べた。18 名が高齢中国帰国者、2 人が在日中国人高齢者。また、彼らの自宅での現地調査を実施し、住宅のタイプ、平面配置、面積等の基本情報、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者が家によく使うもの、在宅の活動やライフスタイル等の住宅環境の実態を明らかにした。

#### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の属性

20 人の調査対象の平均年齢は 77 歳で、平均要介護度は要介護 2.1 である。 7 人がひとりで暮らし、それ以外の人が配偶者または子供の家族と同居している。多くの対象者は、日本に来る前は経済状態が悪い農民であり、また教育水準が低かった。来日後、半数が日本で仕事をしておらず、工場でアルバイトをしていた。また日本語が話せない人が多かった。

#### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の環境移行

20 人の対象者の全員は 1980 年代以降来日し、来日後、平均引っ越し回数は 2 回であった。日本在住の平均年数は 22.8 年であり、現在の家の居住平均年数は 8.8 年である。対象者の中国から日本の今の住所への移行プロセスを図 6.1 に示す。彼らが日本に来た後、引っ越しする主な理由は公営住宅の当選、子供たちとの別居、そして自分や子供たちのキャリアの昇進である。

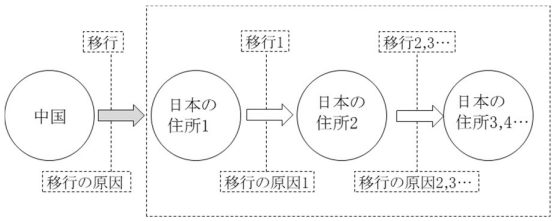



図 6.1　対象者が中国から日本の今の住所への移行のプロセス

#### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の住宅環境

（1）住宅の基本情報と住宅に対する不満足点

20 人の対象者のうち、13 人はバリアフリーがない市営や府営住宅などの公営住宅に住んでいる。

平均面積は 53 ㎡で、半分以上の対象者の住宅はビングルームがない 2K、2DK、3K などの平面配置である。また、住宅に対する不満足点や生活上の不便な点は,「バリアフリーでない」が最も多く、次いで、「空間が狭い・リビングルームがない」「クローズドキッチンではない」「古すぎる」「大きい声が出せない」の順である。

(2) 家でよく使うものと中国風の装飾

室内でよく使っている生活用品の量や種類別数と対象者の身体状況の間に明確な関係性がある、要介護度が高いの対象者はよく使っている生活用品の量や種類別数が少ない、特に台所、掃除とリラックス用品である。また、敷布団ではなくベッドに寝ることや座布団ではなく椅子に座ることを選ぶこと、中国のカレンダーと中国のテレビを見ることから、彼らは今でも中国式の生活習慣を維持していると考えられる。インテリアデザインや装飾は、所有者の文化的背景を反映している。20 人の対象者の家の主な中国風の装飾は中国のカレンダー、中国の結び目、中国のカーペット、中国の絵画である。

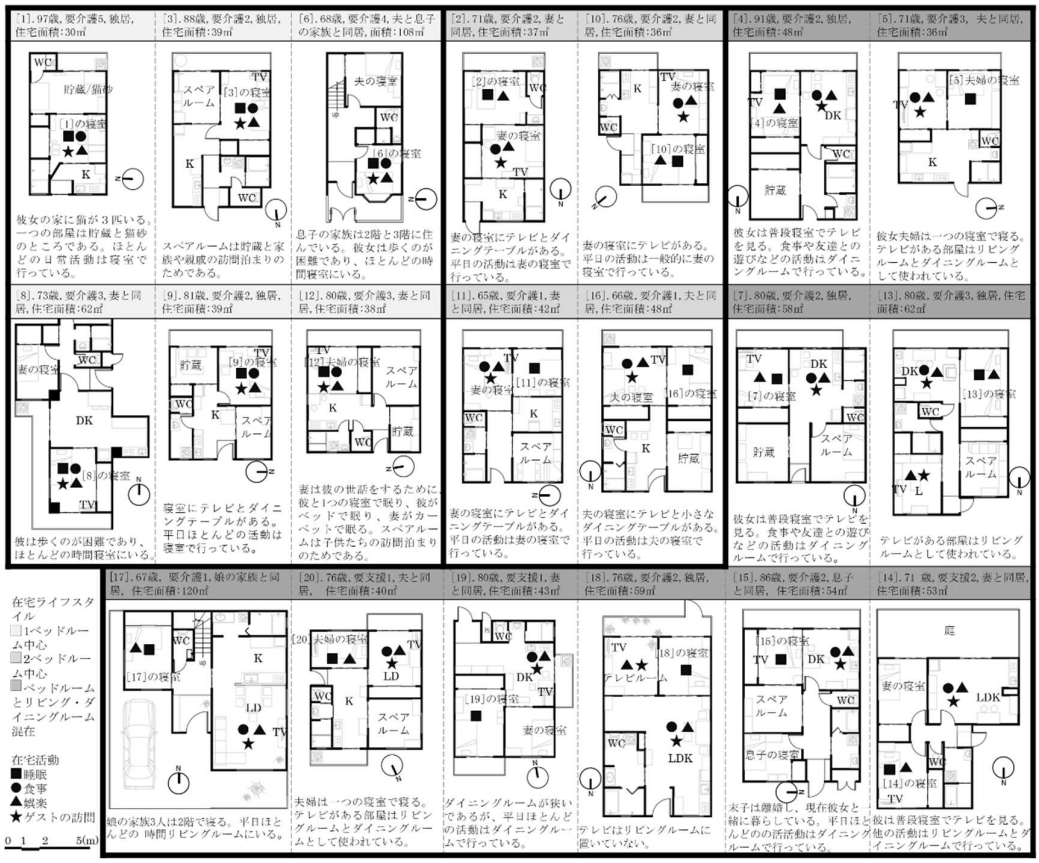



図 6.2　20 人の調査対象の在宅ライフスタイル

(3) 在宅活動と在宅ライフスタイル

20 人の対象者が家で最も多く行う活動は簡単な家事であり、最も多く行う娯楽は中国のドラマ

を見ることである。家で簡単な運動をする対象者は 3 人、ペットを飼っている人は 2 人である。20 人の対象者の在宅ライフスタイルは、図 6.2 に示すように、1 ベッドルーム中心(6 人)、2 ベッドルーム中心(4 人)、ベッドルームとリビング・ダイニングルーム混在 (10 人)の 3 タイプに分類できる。要介護度との関係を見ると、要介護 4 以上の 2 人は 1 ベッドルーム中心のライフスタイルである。

## 第 3 章　高齢中国帰国者・在日中国人高齢者社会環境と近隣環境

第 3 章では、大阪府在住の 20 人の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者を対象として、アンケートとインタビューを行い、近隣での現地調査を実施し、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会環境と近隣環境に注目している。高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会的なつながり、社交程度、近隣の利便性、近隣でのコミュニティーライフスタイル等の社会環境と近隣環境の現状を把握し、その実態を明らかにした。

### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の社会環境

(1) 対象者の社会的なつながり

ほとんどの高齢中国帰国者・在日中国人高齢者は日本人の友達がつくれず、日本人の隣人との交流がない。中国人の隣人や友人などの社会的つながりを持つ人も少ない。20 人の対象者の中で最も多い社会的なつながりは家族であり、全員が該当する。最も少ない社会的なつながりはアソシエーション（日本語クラス、教会）での社会的つながりであり、3 人である。また、彼らの社会的つながりにおいてはスーパーや飲食店の店員の一部を除き中国語でコミュニケーションしている。なお、高齢中国帰国者と在日中国人高齢者の傾向に差異はない。

(2) 対象者の社交程度

対象者が持っている社会的つながりの次元と種類を組み合わて（図 6.3)、20 人の対象者の社交程度を強い（3 人)、やや強い（5 人)、やや弱い（6 人)、弱い（6 人）の 4 つのレベルに分類した。

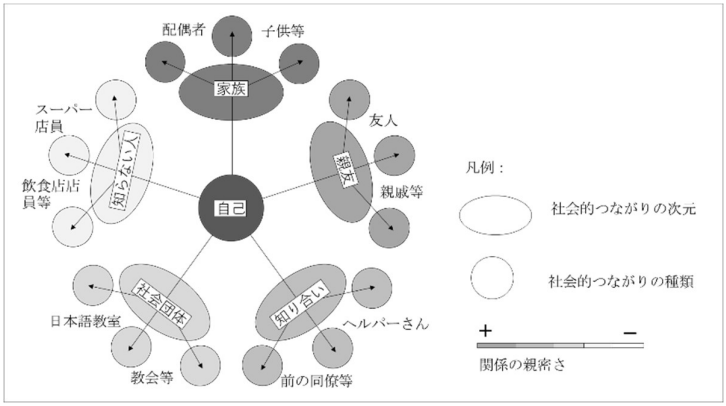



図 6.3　対象者が持っている社会的つながりの次元と種類

より多くの次元と種類の社会的つながりを持っている高齢者は、より強い社交程度を持っている。

### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の近隣環境

(1)近隣環境の生活利便性と近隣環境に関する重要視するポイント

対象者の自宅から半径 500m で、徒歩 10 分程度の近隣環境の範囲内の公共交通、買い物、医療・福祉施設、交友・レクリエーションの公園等の生活利便性について評価すると、20 人の対象者のうち、5 人の近隣環境の生活利便性が比較的高い。対象者が近隣環境において重要視するポイントは、「隣人との関係」の回答が最も多く、次いで、「買い物の利便性」「家族が近くに住むこと」「公園の有無」「中国語が対応できるデイサービス」の順である。

(2)外出頻度、近隣での活動とコミュニティーライフスタイル

20 人の対象者のうち、8 人が週に 5 回以上出かけ、7 人が週に 3 回未満の外出である。最も多くの外出が散歩であり、隣人への訪問は 9 人、子どもや親戚への訪問が 10 人、友人と遊ぶ外出が 8 人であった。外出の頻度と近隣の行動の多様性に基づいて、近隣のコミュニティライフスタイルを、アクティブ(4 人)、ややアクティブ(4 人)、ややパッシブ(5 人)、パッシブ(7 人)の 4 つのタイプに分類した。また、近隣でのコミュニティーライフスタイルは対象者の要介護度と近隣の利便性との関連性が低く、社交程度との関連性が高い。

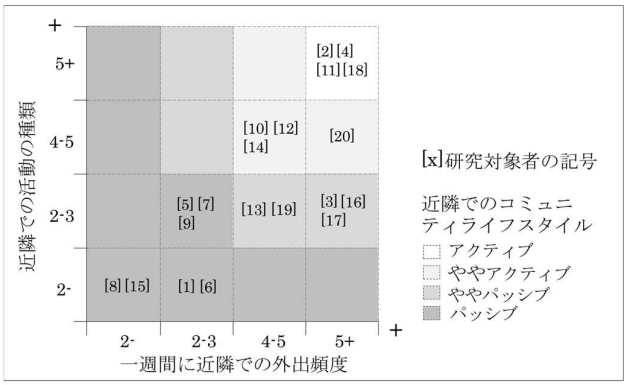



図 6.4　対象者の近隣のコミュニティライフスタイルの種類

### 住宅環境・社会環境・近隣環境の関係性と中国から日本への移行による環境変化

住宅でのライフスタイルは社交程度や近隣でのライフスタイルとの関連性は低いが、社交程度と近隣でのライフスタイルの関連性は高い。近隣での生活利便性と社交程度の関連性は低い。対象者の全体的な現状は、[2]、[4]、[18]が最も良く、[10]、[11]、[12]、[14]、[20]は 2 番目に良い。それ以外は比較的ネガティブな状況にあり、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者のほとんどが日本でポジティブな生活現状を送っていないことを示している。

中国から日本への移行による環境変化について、近隣環境がポジティブな変化を示し、社会環境がネガティブな変化を示し、一部の対象者は住宅環境がネガティブな変化を示している。

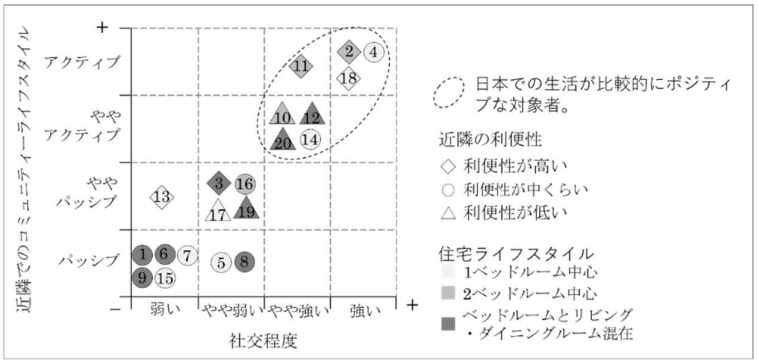



図 6.5 住宅環境・社会環境・近隣環境の関係性

## 第４章　日本における中国語の対応が可能なデイサービスの運営の実態

本章と第 5 章は高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の介護環境を注目する。本章では日本において中国語の対応が可能なデイへの郵送アンケート調査により中国語の対応が可能なデイの運営と利用の実態の全国的な傾向を把握し、その全体像を明らかにすた。115 ヶ所の中国語の対応が可能なデイへの郵送アンケートのうち有効回答数は 35 であり、有効回収率は 30.4%である。

### 施設の運営の状況

半分以上の中国語の対応が可能なデイが 2010 年以降の 10 年間に設置さ、運営主体が営利法人の 26 ヶ所が最も多い。ほとんどの施設は併設機能がない独立型である。1 日の定員は 11～20 人のデイが最もい。中国語が話せるスタッフの人数は、常勤と非常勤の合計が２人以内のデイが最も多く 20 ヶ所である。

### 高齢中国帰国者・在日中国人利用者の属性と一日の主な行動

35 ヶ所のデイのうち中国帰国利用者または在日中国人利用者がいるデイは 26 ヶ所である。中国帰国利用者の人数は合計 365 人であり、在日中国人利用者は合計 61 人である。全てのデイの 365 人の中国帰国利用者の平均要介護度は 2.2 であり、61 人の在日中国人利用者の要介護度は 1.8 である。

高齢中国帰国者・在日中国人利用者の行動の種類の上位 5 位は中国語テレビ観賞、麻雀、カラオケ、中国将棋、トランプゲームであり、それ以外に日本語テレビ観賞、卓球などの行動をする人も多い。日本人利用者の行動の種類の上位 5 位は日本語テレビ観賞、脳トレ、カラオケ、手芸、読書であり、それ以外、トランプゲーム、将棋する人も多い。日本人利用者と比べ、麻雀、中国将棋、卓球をすることが多いことが中国帰国利用者・在日中国人利用者の行動の特徴と考えられる。

### 施設建物の状況と使い方の不便な点

22 ヶ所のデイは民家、オフィス、ホテルなどの別用途から転用された。延床面積は、100 ㎡以下

のデイが最も多く、13 ヶ所である。使用階数は 1 階のみの低層階が最も多く、29 ヶ所である。建築空間は、18 ヶ所は戸外空間（テラス、中庭、前庭、菜園など）がなく、利用者が主に室内で活動している。キッチンの種類は食堂と一体のオープンキッチンが最も多く 20 ヶ所である。静養室とデイルーム・食堂といった共用空間のパーティションはカーテンで仕切りのデイが最も多く 24 ヶ所である。

現在建物の使い方で困っていることは、「日中過ごす場所が 1 室しかない、静かな環境が確保できない」が最も多く、次いで、「周囲に公園等の施設が少ない」「立地の交通が不便」「空間が狭い／収納場所が足りない」「クローズドキッチンではない」の順である。

### 異文化介護における問題

異文化介護の問題について、言語問題（日本語が話せないまたは中国の方言しか話せない）、生活習慣の違い（「食事の問題」が最重要、それ以外に「喋り方の違い」「入浴習慣の違い」）、文化背景と価値観の違い（「サービスへの理解の違い」「プライバシーへの態度の違い」「娯楽文化の違い」）は中国帰国利用者・在日中国人利用者にとって介護で困っている問題である。

## 第 5 章　中国語の対応が可能なデイサービスの空間特性と利用者の滞在状態

本章では行動観察調査を通して、中国語の対応が可能なデイサービスと日本人高齢者向けのデイサービスの利用者の行動、滞在状態と空間利用特性の違いを把握した。

### 調査対象施設の概要

本研究では、規模、定員と利用者の平均年齢や平均要介護度が比較的類似している 2 か所のデイサービス（DS-A と DS-B）を対象として選定されている。両施設は 1 日の定員が同じく 20 人であり、利用者の年齢層も同じく 75～84 歳の利用者が最も多い。平均要介護度は、DS－A が 2.3、DS－B が 2.4 である。建築面積は DS－A が 115 ㎡で、DS－AB が 137 ㎡である。

### 調査日 2 つの施設における利用者の行動の違いと原因

利用者または利用者同士間の行動について、中国帰国者と在日中国人向けのデイサービスと日本人向けのデイサービスでは、利用者の娯楽行動が大きく異なっている。中国帰国者と在日中国人向けのデイサービスは日本人向けのデイサービスに比べて娯楽活動の種類が多く総時間が長い。

利用者とスタッフ間の行動について、中国帰国者と在日中国人向けのデイサービスではスタッフと利用者が一緒に麻雀、卓球、カラオケ、トランプゲームなどの娯楽行動を行うことが多くあり、日本人向けのデイサービスではスタッフと利用者一緒に行う娯楽行動はほとんどなく、主にリハビリ行動である。

利用者又は利用者同士間の行動においても、利用者とスタッフ間の行動においても、両施設の利用者の娯楽活動とリハビリ行動は大きく異なっている。その主な要因は両施設の利用者の通所目的

が異なることが考えられる。中国帰国利用者・高齢中国人利用者にとって、中国語の対応が可能なデイは他の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者と娯楽行動を中心に交流できる場所と捉えていると考えられる。なお、中国帰国利用者と在日中国人利用者の行動等の傾向に差異はない。

### 調査日 2 つの施設の空間利用特性と利用者の行動場面

空間利用特性について、滞在場所の総時間数より、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者向けのデイサービスは利用者が麻雀専用テーブルでの滞在時間が最も長い。日本人向けのデイサービスは自分のテーブルでの滞在時間が最も長い。2 つのデイの空間利用特性の違いは両施設の利用者の娯楽行動及び設備配置が異なるためと考えられる。

高齢中国帰国者・在日中国人高齢者向けのデイサービスは主に利用者が自主的に集う集団的行動場面であるが、日本人向けのデイサービスは主に個別的場面である。その要因は DS-A の主な娯楽行動・リハビリ行動が他人との交流が必要であるが、DS-B の主な娯楽行動・リハビリ行動が他人との交流が必要ではないと考えられる。

## 6.2 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の福祉住環境に関する考察及び改善

在宅の 20 人の対象者へのインタビュー調査等より、ほとんどの高齢中国帰国者・在日中国人高齢者は今でも中国式の生活習慣を維持していて、中国語の環境中に生活している。彼らの多くは日本人の友達がつくれず、日本人の隣人との交流がなく、中国人の隣人や友人などの社会的つながりを持つ人も少なく、社交程度が非常に低い。また、近隣でのライフスタイルがパッシブな人が一番多い。近隣でのライフスタイルは要介護度と近隣の利便性との関連性が低く、社交程度との関連性が高い。社交程度が高い人は外出頻度が高く、近隣での活動の種類が多い。すなわち、社会的なつながりは彼の外出の主な促進要因である。つまり、高齢中国帰国者・在日中国高齢者は日本に孤立的な生活を送っている傾向にある。日本語が話せないことと頻繁な移行は主な要因と考えられる。

中国帰国者と在日中国人向けのデイサービスと日本人向けのデイサービスでの行動観察調査より、利用者又は利用者同士間の行動においても、利用者とスタッフ間の行動においても、両施設の利用者の娯楽活動とリハビリ行動は大きく異なっている。その主な要因は両施設の利用者の通所目的が異なることが考えられる。高齢帰国利用者または高齢中国人利用者にとって、中国語の対応が可能なデイサービスは他の中国帰国者又は在日中国人高齢者と娯楽行動を中心に交流できる場所と捉えていると考えられる。活動の違いにより、施設空間への利用特性が異なっていると考えられる。

以上の研究に基づいて、在日中国人高齢者のエイジング・イン・プレイスの目標を達成するために、福祉住環境の改善について以下の視点から考察する。

### 住宅環境、社会環境、近隣環境

(1)住宅環境について、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者は見守りや介護が必要になった後在宅生活を継続するために、バリアフリーやキッチン換気などの住宅改修のサポートと中国が話せる在宅生活支援業者や訪問介護員が必要である。(2)近隣環境について、歩行能力が低下した高齢者、自宅の近隣での生活利便性が低い高齢者、特に日本語が話せない高齢者にとって、買物、医療、交通などの近隣での生活支援が必要である。(3)社会環境について、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者が家族や友達以外の豊かな社会的つながりを築くために、地域や社会団体は彼らが参加できる活動を行う必要がある。特に介護が必要になるときに中国帰国者と在日中国人向けのデイサービスは、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者のコミュニケーションの場も提供し、重要な役割を果たしていると考えられる。

### 介護環境

介護環境の改善について、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者向けの介護施設は、彼らの文化背景や生活習慣を考慮し、行動の特徴に応じて介護環境を整える必要がある。具体的には、中国帰国者または在日中国人が行う麻雀や卓球、トランプゲームなどの行動は音が出やすく動きも伴うため静かに暮らしたい利用者に迷惑をかけやすい。そのため、施設の室内の区画は音が出る動的領域と

静的領域を明確に分ける必要があり、特に静養室とデイルームは別室として設置する。また、中国料理の油煙や香辛料の匂いが他の空間への拡散を防ぐために、クローズドキッチンが望ましいと考えられる。

## 6.3　本研究の不足点と今後の課題

### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の環境移行について

本研究では高齢中国帰国者・在日中国人高齢者が中国から日本への移行による住環境の変化及び日本での引っ越しによる移行のプロセスと原因を注目した。身体機能の低下による自宅から介護施設への移行にまだ注目していない。高齢中国帰国者・在日中国人高齢者が家から介護環境への適応過程、適応不良の影響と適応しやすい環境に対する施設計画は今後の課題になると考えられる。

### 高齢中国帰国者・在日中国人高齢者の住宅環境、社会環境と近隣環境について

本研究は大阪府に在住の 20 人の高齢中国帰国者・在日中国人高齢者を対象とした研究であるが、20 人の対象者のうち、高齢中国帰国者は 18 人で、自分や子供が仕事のために日本に来た在日中国人は 2 人のみである。普通の在日中国人と比べ、中国帰国者、特に一世に対して、老齢基礎年金等の満額支給、配偶者支援金、公営住宅の優先入居、家賃の減免等の生活支援及び医療通訳者の配置等の医療支援のような政策を行われている。在日中国人は日本人と同じく、特別な支援政策がない。そのため、在日中国人高齢者の住宅環境、社会環境と近隣環境の実態をより明確に把握するために、在日中国人高齢者を対象とする人数は増加すべきである。在日中国人高齢者のみを対象とする研究は今後の課題になると考えられる。

### 介護環境について

本研究では在高齢中国帰国者・日中国人高齢者の介護環境はデイサービスのみに注目した。また、コロナの影響で、行動観察調査の対象施設は 2 ヶ所のデイしかなく、在日中国人高齢者と日本人高齢者の行動や滞在状態などの違いに関する豊富なデータを得るために、もっと多くの調査対象が必要だと考えられる。さらに、厚生労働省の「中国語の対応が可能な介護事業」により、デイサービスセンター以外の他の介護施設（特別養護老人ホーム、有料老人ホーム、グループホーム等）は日本にも多くある。在日中国人高齢者の介護環境の現状を多角的に把握するために、特別養護老人ホームやグループホームなどの多様な中国語の対応が可能な介護施設に対する研究は今後の課題になると考えられる。

### 在日中国外国人高齢者について

少子高齢化の継続に伴い、益々多くの外国人労働者が日本に来ていて、在日外国人の人数が急速に増加しているとともに、在日外国人高齢者も増えっている。身体機能の低下のため、高齢者、特に日本社会に馴染まない外国人高齢者にとって、日本社会に適応し、将来の退職生活を心配しなく、老後生活を楽しめ、地域に住み続けるように、彼らの福祉住環境の改善を目的とする研究は重要である。今後、高齢中国帰国者・在日中国人高齢者以外の他の国の在日高齢者の福祉住環境に関する課題にも注目するべきである。

データシート

## 20 人在日中国人高齢者の基本属性に関するアンケート

1）年齢：_____歳

2）性別：○男性　○女性

3）来日年数：_____年

4）来日の原因
○中国帰国者一世　○中国帰国者一世の配偶　○中国帰国者二世　○中国帰国者二世の配偶
○自分が仕事のために来日した　○子供が仕事のために来日した　○その他_____

5）出身地について
中国帰国者一世の場合，日本の出身地：_____，中国にいた時の住所：_____
中国帰国者二世の場合，中国の出身地：_____
在日中国人の場合，中国の出身地：_____

6）今の国籍：○日本　○中国

7）中国の国籍を持っている場合、在留資格：○永住者　○定住者　その他_____

8）自分のアイデンティティ：○中国人　○日本人

9）配偶者：○いる　○いない

10）子供人数：____人，息子：____人，いまの住所：_____，娘：_____人，いまの住所：_____，その他_____

11）日本語のレベル：
○母語者　○日常会話でオーケー　○挨拶程度　○全然話せない

12）教育歴：
○大学　○高校　○中学校　○小学校　○進学したことがない

13）中国にいた時の仕事：
○農民　○会社員　○教師　○料理人　○医者　○無職　○その他_____

14）来日した後の仕事：
○農民　○会社員　○教師　○料理人　○医者　○無職　○その他_____

15）要介護度：
○自立　○要支援 1　○要支援 2　○要介護 1　○要介護 2　○要介護 3　○要介護 4
○要介護 5

16）認知症：

○なし　○軽度　○中等度　○やや高度　○非常に高度

17）来日後引っ越しの回数：_____回

18）来日後の住所について

住所 1：_____（都　道　府　県），住む年数_____年，引越しの原因_____

_____

住所 2：_____（都　道　府　県），住む年数_____年，引越しの原因_____

_____

住所 3：_____（都　道　府　県），住む年数_____年，引越しの原因_____

_____

住所 4：_____（都　道　府　県），住む年数_____年，引越しの原因_____

_____

住所 5：_____（都　道　府　県），住む年数_____年，引越しの原因_____

_____

その他:_____

# 住宅環境に関するアンケート

1）住宅の類型

○市営住宅　○府営住宅　○文化住宅　○一戸建て　○賃貸住宅　○その他＿＿＿＿＿＿

2）　家でよく使っているもの

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 家具用品 | ベッド | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 畳 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 食卓 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | テーブル | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 椅子 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | ソファー | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 中国のカレンダー | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 家電用品 | 冷蔵庫 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | クックトップ | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 電子レンジ | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 炊飯器 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 食器棚 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 洗濯機 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 浴槽 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | シャワー | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 掃除道具 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 電動ファン | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | エアコン | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 娯楽用品 | スマートフォン | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | アンテナテレビ | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 中国語の本 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 植栽 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 編み針 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 猫の砂 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |
| | 麻雀 | ○よく使っている | ○なし | ○あるけど，あまり使わない |

3）在宅の活動

○家事する　○中国語の TV を見る　○日本語の TV を見る　○炊事する　○家族／親戚と話す　○スマートフォンで遊ぶ　○植物の世話をする　○運動する　○本を読む　○ペットの世話をする　○祈る　○その他＿＿＿＿＿＿

4）住宅に対する不満足点

○空間が狭い・リビングルームがない　○古すぎる　○大きい声が出せない　○バリアフリーでない　○南向きではない　○クローズドキッチンではない　○天井が低い　○冬の時寒い　○その他＿＿＿＿＿＿

5）今の住宅は中国の住宅と比べどちらが良いか？

| | | |
|---|---|---|
| 住宅タイプ | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 平面配置 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 家用電気 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 日常用品 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 中国飾り | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| レクリエーション | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 個人空間 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 在宅活動 | ○今のが良い | ○中国のが良い |

## 社会環境に関するアンケート

1）今持っている社会的なつながりの種類：

○家族_____人 _____

○親戚_____人 _____

○中国人友人_____人 _____

○日本人友人_____人 _____

○中国人隣人_____人 _____

○日本人隣人_____人 _____

○中国人ヘルパーさん_____人 _____

○社会団体_____個 _____

○デイサービスセンター_____

○知らない人（スーパーや飲食店店員等）_____

○その他_____

2） 平日家族や友人等一緒にする活動：

○家族 _____

○親戚 _____

○中国人友人 _____

○日本人友人__ _____

○中国人隣人 _____

○日本人隣人 _____

○その他_____

5）今の社会的なつながりと中国にいた時のなつながりと比べどちらが良いか？

| | | |
|---|---|---|
| 配偶者 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 子供 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 親戚 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 隣人 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 友人 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 仕事 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 社会団体 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 言語 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 経済状況 | ○今のが良い | ○中国のが良い |

## 近隣環境に関するアンケート

1）平均一週間に外出頻度：

○2 回以下　○2～3 回　○4～5 回　○5 回以上

2）近隣での活動：

○散歩する　○運動する　○買い物する　○隣人を訪ねる　○友人を訪ねる／友人と遊ぶ

○子供や親戚を訪ねる　○社会活動に参加する　○デイサービスセンターを利用する

○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2）今の近隣環境と中国にいた時の近隣環境と比べどちらが良いか？

| | | |
|---|---|---|
| 交通状況 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 衛生状況 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 買い物の利便性 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 公園 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| クリニック・病院 | ○今のが良い | ○中国のが良い |
| 公共活動 | ○今のが良い | ○中国のが良い |

## 中国語の対応が可能な介護施設の基本情報のアンケート

中国帰国者：太平洋戦争後中国に残留した日本人の一世、二世又は家族等の総称.

在日中国人：自分や家族は仕事のため、日本に来た残留孤児ではない中国人。

1. 施設の種類（必須）

○　デイサービスセンター

○　特別養護老人ホーム

○　グループホーム

○　小規模多機能

○　その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2. 施設の開設年数(必須)＿＿＿＿＿＿年＿＿＿＿＿月

3. 施設の運営主体（必須）

○営利法人（会社）　○社会福祉法人　○医療法人　○特定非営利活動法人

○社団財団法人　○地方公共団体　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4. 施設の定員人数について（必須）

| 施設の定員人数 | 登録者の総人数 | 残留孤児登録者の人数 | 残留孤児ではない中国人登録者人数 |
|---|---|---|---|
| | | | |

5. デイサービスを提供する場合、週一回以上利用する残留孤児かどうかによる人数

| 週一回以上利用する日本人利用者の人数 | 週一回以上利用する残留孤児の人数 | 週一回以上残留孤児ではない中国人利用者の人数 |
|---|---|---|
| | | |

6. 残留孤児と中国人利用者性別による人数（必須）

| 男性残留孤児と中国人利用者の人数 | 女性残留孤児と中国人利用者の人数 |
|---|---|
| | |

7. 残留孤児と中国人利用者の年齢について（必須）

| 残留孤児又は中国人利用者の平均年齢 | 一番若い残留孤児又は中国人利用者の年齢 | 一番年上の残留孤児又は中国人利用者の年齢 |
|---|---|---|
| | | |

8.　残留孤児と中国人利用者要介護度について（必須）

| 平均要介護 | 人数が一番多くの要介護度 | 人数が一番少ない要介護度 |
|---|---|---|
| | | |

9.　スタッフの人数（必須）

| 常勤スタッフの人数 | 非常勤スタッフの人数 | 中国語が話せる常勤スタッフの人数 | 中国語が話せる非常勤スタッフの人数 |
|---|---|---|---|
| | | | |

10.　送迎について、自分で来る人の割合（必須）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

11.　毎日主な介護言語（必須）

○中国語だけ　○日本語だけ　○日本語と中国語　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

12. 毎日主な料理の種類（必須）

○中国料理　○日本料理　○中国料理と日本料理　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

15. 機能訓練サービスの有無（必須）

○あり　　○無し

16. 施設の所在地区（町）には中国人又は残留孤児が比較的多いですか？（必須）

○はい　○いいえ　○　分からない

17. 施設建物の種類（必須）

○新築　○改修　○増築　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

18. 改修の場合、改修する前の用途は（必須）

○民家　○オフィス　○教育施設　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

19. 施設面積（㎡）と部屋数量（必須）

| 施設の面積 | 部屋の数量 |
|---|---|
| | |

20. 施設は＿＿＿＿＿＿＿階建ての＿＿＿＿＿＿＿階にある。（必須）

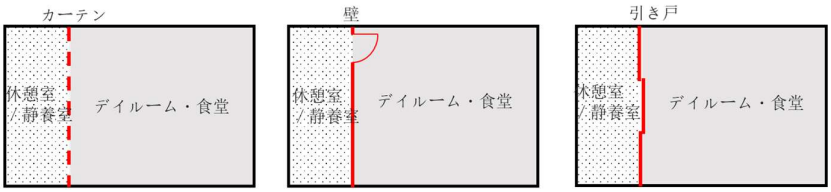
21. エレベーターが付いているか（必須）

○付いている　　○付いていない

22.　施設の構造（複数選択可）（必須）

○木造　○鉄骨造　○コンクリート造　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

23.　休憩室又は静養室とデイルーム・食堂といた公共空間のパーテイション種類




○カーテンで仕切る　　○壁で仕切る　　○引き戸で仕切る　　○その他

27. デイルーム・食堂のテーブルの数量(必須)

テーブルの総数量_____点、その中___人掛けテーブル____点、___人掛けテーブル____点、_

人掛けテーブル____点、___人掛けテーブル____点.

28.　毎日日本人利用者と残留孤児又は中国人利用者の交流頻度が高いですか(必須)

○全く高くない　○ほとんど高くない　○やや高い　○かなり高い　○とても高い

29.　主な日本人利用者の活動 ＊(複数選択可) (必須)

○中国語のテレビ番組を見る　○日本語のテレビ番組を見る　○麻雀　○将棋

○ビリヤード　○トランプゲーム　○カラオケ　○本を読む　○体操　○卓球

○その他_____

30.　主な残留孤児又は中国人利用者の活動 ＊(複数選択可) (必須)

○中国語のテレビ番組を見る　○日本語のテレビ番組を見る　○麻雀　○将棋

○ビリヤード　○トランプゲーム　○カラオケ　○本を読む　○体操　○卓球

○その他_____

31.　宿泊できる場合、居室数量について(必須)

| 個室の数量 | ２人部屋 の数量 | ユニットの数量 |
|---|---|---|
| | | |

32. 施設が戸外空間（テラス、中庭、前庭、菜園、花壇など）の有無(必須)

○あり　　○なし

33.　キッチンの類型(必須)

○オーポンキッチン（食堂と一体のキッチン）

○クローズドキッチン（壁で周囲と仕切っているキッチン）

34. 浴槽の種類(必須)

○一般浴槽　○個別浴槽　○座位式機械浴槽　○臥位式機械浴槽

○シャワーだけ　○その他_____

35. 施設の全利用者の平均入浴回数(必須)

一人当たり平均：＿＿＿＿＿＿＿回／週

36. 現在建物の使い方で困っていることは何ですか(複数選択可)（必須）

○立地の交通が不便　○周囲に公園等の施設が少ない　○日中過ごす場所が１室しかない、静かな環境を確保できない　○照明が悪い　○防音性能が悪い　○クローズドキッチンではない　○バリアフリーが足りない　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

37. 残留孤児又は中国人にとって、現在介護で困っていることは何ですか(複数選択可)（必須）

①言語の問題

○利用者は日本語が話せない　○利用者は中国語の方言だけが話せる

○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

②生活習慣の問題

○食事の習慣（日本料理に慣れない）○喋り方の不同(声が強い等）○衛生の問題

○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

③文化の問題

○人間関係文化の不同　○祝日文化の不同　○お風呂文化の不同　○娯楽文化の不同　○家族関係文化の不同　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

④価値観の問題

○サービスへの理解の不同　○プライバシーへの態度の不同

○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

38. 利用者がこの施設を選んだ理由は何ですか(複数選択可)（必須）

○ケアマネジャーの情報　○地域包括支援センターの情報　○利用者の口コミ

○市役所の宣伝　○ウェブサイトや新聞からの情報　○日本人向けの施設に行っていたが、馴染まなかった　○その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

39. 残留孤児又は中国人高齢者を受け入れる原因又は契機何ですか(複数選択可)（必須）

○以前から残留孤児の支援をしてきて，高齢化の問題が出てきた.

○以前から中国人の支援をしてきて高齢化の問題が出てきた.

○困っている高齢者が身近にいた.

○日本人向けデイサービス等を始めたが中国人利用者を受け入れることとなった.

その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿